

仙石山仏教学論集  
第 14 号（令和 5 年）

Sengokuyama Journal  
of Buddhist Studies  
Vol. XIV, 2023

道宣撰『集古今仏道論衡』の  
江南系統大蔵経本  
——解題と翻刻——

王 雪



# 道宣撰『集古今仏道論衡』の 江南系統大蔵経本——解題と翻刻——

王 雪

---

## 要 旨

道宣撰『集古今仏道論衡』は、『大唐内典録』から始まり、従来の入蔵録に記載されているのが三巻若しくは四巻である。初治本である日本古写経本(三巻本)の研究では、著者の道宣による同書の編纂過程を明らかにすることができるが、現在再治本の特徴は、すべて四巻本の刊本大蔵経本からわかる。最も早く開版された開寶蔵から、比較的に完備した高麗再雕蔵にかけて、『仏道論衡』テキストの形態は変化し続けてきた。またほぼ同時代に彫られた開寶蔵と契丹蔵および後世に開版された諸江南大蔵経のテキストのバージョンも一致していないことから、刊本大蔵経本のテキストは複雑な流伝過程を経たと考えられる。

本論は、解題と翻刻の2つの部分に分けられている。解題では、まず江南系統大蔵経の中で最も早い北宋から南宋初頭にかけて成立した福州版(東禪寺蔵と開元寺蔵)と南宋の湖州版(圓覚寺蔵と資福寺蔵)を紹介した上で、両蔵本『仏道論衡』の基本情報を示す。次に翻刻で扱った底本の湖州版思溪蔵本を中心に、中原・北方系統及び日本古写経本と比較した上で、江南系統大蔵経本の特徴を示す。翻刻では、湖州版思溪蔵本を底本にし、福州版の開元寺本、高麗再雕本を校本にする。

---

## 【解題】

### はじめに

ここに紹介する江南系統大蔵経本『集古今仏道論衡』は、当書の流伝・変容及び伝播の過程を遡る上で非常に重要なテキストである

道宣(596～667年)によって撰述された『集古今仏道論衡』(以下、『仏道論衡』と略称する)は、後漢から唐初に至るまで、仏教と道教と

の間に繰り広げられた論争に関わる記事を集めた著述である。経録の記載に基づけば、『仏道論衡』のテキストとして、かつては三巻本と四巻本の二種があったことが分かる。日本古写経本の三巻本に基づいて考察した結果、同書の成立について、道宣はまず、龍朔元年（661）に一旦漢魏両晋南北朝から唐高祖・太宗朝までの計二十六事と、最後に付した「実録序」<sup>1</sup>及び高宗時代の四条の実録からなっている三巻本の初治本を完成させた。そして麟徳元年（664）に自分の手で更に三事を追加して、高宗時代の部分を第四巻に分けた（それが再治本の四巻本である）<sup>2</sup>。

道宣が生きている唐の時代に、一旦完成させた三巻の初治本と後に増補し調巻された再治本が並んで流布し、後代において主流となったバージョンが再治本と思われるのは当然である。道宣の初治本に相当する日本古写経本が現存している一方で、現在、最も広く使われている『仏道論衡』のテキストは、『大正蔵』第五十二巻に収録された四巻のものである。それは、高麗再雕本を底本とし、「宮」（開元寺版本）・「宋」（思溪蔵本）・「元」（普寧蔵本）・「明」（嘉興蔵本）の四本で対校したものである。それらの校本はすべて江南系統大蔵経本である。その中の「宮」は宮内庁書陵部に所蔵されている福州開元寺版である。その画像をオンラインで閲覧すると、初治本の日本古写経本と相似するところが多いことを気づいた。四巻本であるのに初治本の古い形態と再治本の新しい形態が同時に見られるため、それを問題とせざるを得ない。解題で江南系統本の特徴を明らかに示したい。

## 1. 東禅寺版、開元寺版、思溪蔵本の書誌

<sup>1</sup> 「実録序」は高宗時代における見聞を記録した168文字の短い序文で、当該時代についての記事の前に置かれている。

<sup>2</sup> 日本古写経本『集古今仏道論衡』に関しては、拙稿「道宣撰『集古今仏道論衡』の日本古写経本—解題と翻刻—」（『仙石山仏教学論集』第11号、2019年9月）と拙稿「道宣撰『集古今仏道論衡』の日本古写経本について」（『印度学仏教学研究』、2019年12月、第68巻第1号）に詳述した。

北宋の勅版と遼の契丹蔵の印造が仏典の流通に大きな役割を果たしたが、中国の北方と中原から離れている南部の地域に経本の供給はいまだ十分ではなかった。仏教が盛んになっている中国の江南・閩江地域が樹木の成長に有利な気候であり、印刷に必要な版本や紙の原材料を豊かに提供できることは、江南刊本大蔵経を開版する重要な条件となった。十一世紀後半に開版する福州の東禅寺蔵を最初に、相次いで開元寺蔵、思溪蔵、磧砂蔵などの私版大蔵経が宋代に中国の南部で開版された。それらの大蔵経は同じ系統として流通し、元の普寧蔵ないし明・清時代の大蔵経に深く影響した。以下、その中で最も早い北宋から南宋初頭にかけて成立した福州版（東禅寺蔵と開元寺蔵）と南宋の湖州版（圓覚寺蔵と資福寺蔵）を紹介した上で、両蔵本『仏道論衡』の書誌情報を示す。

## 福州版『集古今仏道論衡』について

### （1）東禅寺版

「福州版」というのは、北宋末から南宋の初頭にかけて福州で開版された東禅寺大蔵経（崇寧蔵）と開元寺大蔵経（毘盧蔵）のことである。東禅寺版は遅くとも元豊三年（1080）に開版され、崇寧二年（1104）末頃に徽宗皇帝（在位 1100～1125 年）が「崇寧万寿大蔵」という大蔵経名を賜ったため、「崇寧蔵」とも呼ばれている。雕造場所は福州城外の白馬山東禅等覚院で、経名を敕賜した当時に寺格も東禅等覚禅寺に昇った。中国史上初の私版大蔵経としてその刊記は豊かであり、東禅寺蔵の各帖の巻首にはおおむね数行の題記が付されており、当時の刊行活動を理解するために重要な情報を提供している。

政和二年（1112）を最後とし、この頃まで三十年間かけて五百六十四函、一四三〇余部、五七〇〇余巻の全蔵が仕上げられ、後の乾道・淳熙年間（1165～1189）に追雕が行われた。東禅寺版は福州或いはその周辺に伝わっていた写本大蔵経を底本とし、開宝蔵とは明らかに相違する一版三十六行（一折六行×六折）、一行十七字の折本装である。<sup>3</sup>

<sup>3</sup> 東禅寺蔵について『印刷漢文大蔵経の歴史——中国・高麗篇』（立正大学情

『醍醐寺蔵宋版一切経目録』第四冊<sup>4</sup>によれば、四巻のいずれの巻首にも同じ題記が以下のように記されている。

福州懷安縣信士葉冀與妻黃十一娘、永固皇基、上延帝祚、長輝佛日、深報師慈、答父母恩、酬檀那德、同與三寶、共樂衆生、回向菩提、齊成正覺、紹興甲寅歲、造捨東禪寺。

東禪寺版巻首の題記は捨銭刊記の性質を持ち、彫造史上の重要な資料であるといえる。上掲のように施主の情報及び年分が載せられており、福州懷安県の信者の葉冀及び妻の黄十一娘が紹興甲寅年（1134）に資財し、四巻の『集古今仏道論衡』の経版を彫造させたということが知られる。一般的に東禪寺版の初雕部分は元豊三年（1080）から政和二年（1112）までに五百六十四函、一四三〇余部、五七〇〇余巻の全蔵が仕上げられ、後の乾道・淳熙年間（1165～1189）に追雕が行われたとされている。しかしながら、前掲した題記に見られる如く、紹興甲寅年（1134）になお経版の補充が行われることがあり、賢聖集伝<sup>5</sup>に属する該当論集はまさにこの時期に開版されたと知られる。

更に、第二巻以外に、三巻のいずれの巻尾にも以下の通り刊記が記されている。

經頭僧慶智裕贍立宣、都句當藏主沙門智賢、都勸首住持傳法沙門懷紹、前都勸首住持傳法慧空大師冲真、證會靈應侯王。

以上の刊記から、開版事業の主事がすでに前の冲真から懷紹に変わったことが知られる。また当時の崇寧蔵はすでに徽宗に「崇寧万壽大蔵」と勅令により命名されていたが、尚且つ依然として前の「雕経都会+証

報メディアセンター、2015年）38～40頁を参照。

<sup>4</sup> 総本山醍醐寺編『醍醐寺蔵宋版一切経目録』第四冊、東京、汲古書院、2015年、372頁－375頁。

<sup>5</sup> 十世紀頃から歴史に登場した中国の刊本大蔵経の多くは、『開元釈教録・入蔵録』に基づいて構成されている。智昇は、南北朝以来の經典分類法を踏襲して大乘の三蔵と小乗の三蔵および賢聖集伝とに三大別し、大蔵経に編入すべき仏典の総数を5048巻と決定した。[方広錫 [2006] 『中国写本大蔵経研究』（上海古籍出版社、2006年12月）の第一章『開元録』対大蔵経結構的貢獻』参照。『中国写本大蔵経研究』39～45頁。]

会」<sup>6</sup>のような私版大蔵経の開版事業をすすめる募集組織を採用したと知られる。

諸巻の書誌情報は『醍醐寺蔵宋版一切経目録』<sup>7</sup>によると、以下のようである。

### 第一巻

撰者号：古今仏道論衡実録序 唐釈道宣撰/集古今仏道論衡実録巻

第一 唐釈道宣撰

外題：古今仏道論衡（巻第一）疑

内題：古今仏道論衡実録序 疑

集古今仏道論衡実録巻第一

尾題：集仏道論衡実録巻第一 疑

表紙：紺色

後表紙：紺色

紐：原紐

折数：六十一折

### 第二巻

撰者号：唐釈道宣撰

外題：古今仏道論衡（巻第二）疑

内題：集古今仏道論衡実録巻第二 疑

尾題：集仏道論衡実録巻第二 疑

表紙：紺色

後表紙：紺色

<sup>6</sup> 京都仏教各宗学校連合会編『新編大蔵経——成立と変遷』（法蔵館、2020年12月10日、111頁）は「東禅寺開版事業の知識と経験とが開元寺蔵のそれにも生かされ」と述べ、また紹興三年（1133）以前の開元寺蔵本の募集組織について紹介している。『仏道論衡』の刊記から紹興四年に東禅寺版の組織には都会と証会が尚存在していたと知られる。

<sup>7</sup> 総本山醍醐寺編『醍醐寺蔵宋版一切経目録』、第四冊、東京、汲古書院、2015年。

紐：缺

折数：四十八折（本文紙背二及ブ）

### 第三卷

撰者号：唐釈道宣撰

外題：古今仏道論衡（卷第三）疑

内題：集古今仏道論衡実録卷第三 疑

尾題：集古今仏道論衡実録卷第三 疑

表紙：紺色

後表紙：紺色

紐：原紐

折数：四十五折（本文紙背二及ブ）

### 第四卷

撰者号：唐釈道宣撰

外題：古今仏道論衡（卷第四）疑

内題：集古今仏道論衡実録卷第四 疑

尾題：集古今仏道論衡実録卷第四 疑

表紙：紺色

後表紙：缺

紐：缺

折数：四十四折（本文紙背二及ブ）



## （2）開元寺藏本

一方、政和二年（1112）二月東禪寺版の完成を待っていたかのように翌月、開元寺版の開版が着手されている。開元寺での開版作業は前期に推進組織としての「雕經都会」、後期に「開元經局（開元經司）」のもとで進められた。宋金戦争の現地に遠く離れていたため、北宋の国難に大きく影響されずに南宋紹興二十一年（1151）二月を以って開版が完了した。版式は東禪寺版と同じように一版三十六行（一折六行×六折）、一行十七字とされた。

現在、中国で東禪寺版と開元寺版が少ししか残っていないのに対して、小野玄妙の考察によると日本で五・六セットが現存している<sup>8</sup>。ただし、すべて東禪開元二蔵の混合蔵経である。その中の一つは、「宮本」という略称で知られる宮内庁書陵部所蔵の「宋版大蔵経」である。また、京都醍醐寺、京都教王護国寺、南禅寺などに部分的な蔵本が保存されているという<sup>9</sup>。

筆者が校合に取り扱った福州版は宮内庁書陵部所蔵の開元寺蔵本<sup>10</sup>で、第 463 函・疑の第 5～8 帖にある『仏道論衡』の白黒フォトである。いずれも四巻の巻首に

敷文閣直学士、左朝議大夫、潼川府路都鈐、轄安撫使知瀘州軍、州提舉學事兼管内勤農使、賜紫金魚袋馮戢、恭為今上皇帝祝延聖壽、捨俸添鏤經板三十函、補足毗盧大藏、永冀流通。勸緣福州開元禪寺主持慧通大師了一題。

という刊記がある。それにより、経本は開元寺蔵本のことだとわかる。刊記を見る限りでは、馮戢が資財を喜捨して『仏道論衡』を含めて三十函の版木を補足したという。第 532 函・尹『御制詮源歌』の巻尾に、幹

<sup>8</sup> 李富華・何梅 [2003] 『漢文仏教大蔵経研究』（北京：宗教文化出版社）、221 頁参照。

<sup>9</sup> 大蔵会『大蔵経——成立と変遷』（京都：百華苑 1988 年）54 頁参照。

<sup>10</sup> 宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧——書誌書影・全文影像データベース——参照、[https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/T\\_bib\\_frame.php?id=007075#](https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_frame.php?id=007075#)

縁僧の文軫及び澄月が「敷文閣直學士、左朝邑大夫、潼川府路兵馬都鈐、轄瀘南沿邊安撫使、知瀘州軍州提舉學事、兼管内勸農使、文安縣開國伯、食邑七百戸、賜紫金魚袋」という長い肩書が付いている馮擲が最後の三十函の経版を大蔵經に補足する経緯を刊記に載せ、そこに明確に記された年代は「紹興庚午（1150年）六月」である。同じ馮擲の捨財による雕造された最後三十函に属する『集古今仏道論衡』も早くとも紹興庚午（1150）年に造られたと見られる。四巻の紹介は以下の通りである。

#### 第一巻

内容：序文、漢・魏晉南北朝の十事

紙数：二十

首題：古今仏道論衡実録序 疑／唐釈道宣撰

尾題：集仏道論衡実録巻第一 疑

#### 第二巻

内容：北周・隋代の六事

紙数：十九

首題：集古今仏道論衡実録巻第二 疑／唐釈道宣撰

尾題：集仏道論衡実録巻第二 疑

#### 第三巻

内容：唐高祖・太宗朝の十事、実録序

紙数：十九

首題：集古今仏道論衡実録巻第三 疑／唐釈道宣撰

尾題：集古今仏道論衡実録巻第三 疑

#### 第四巻

内容：唐高宗時代の七事

紙数：十九

首題：集古今仏道論衡実録巻第四 疑／唐釈道宣撰

尾題：集古今仏道論衡巻第四 疑

上記の簡条から、第一巻の内容は序文と後漢の「後漢明帝感夢金人騰蘭入雒道士等請求角試」、前魏の「前魏時吳主崇重祇門為仏立塔寺因問三教優劣」、北魏の「魏陳思王曹植辯道論」・「元魏君臨積李雙信致有興廢故述其由」・「魏明帝登極召沙門道士對論敘仏道先後」、東晋の「晋孫盛老聃非大賢論」・「晋孫盛老子疑問反訊」、劉宋の「宋太宗文皇帝朝會群臣論仏理治致太平」、南梁の「梁高祖先事黃老後帰信仏下勅捨奉老子」、北齊の「北齊高祖文宣皇帝下勅廢道教」の十事である。全二十紙で、首題に題名の「古今仏道論衡実録序」、千字文の「疑」、撰者号の「唐釈道宣撰」が記されている。尾題に題名・巻号の「集仏道論衡実録卷第一」と千字文の「疑」が載せられている。第二巻の内容は北周の「周高祖登朝論屏仏法安法師上論」・「周祖平齊集論毀法遠法師抗詔」・「周祖東巡滅法已久任道林請興仏」・「周天元皇帝納王明広表開仏法」と隋の「隋高祖下詔述絳州天火焚老君像」・「隋兩帝事宗仏理稟受帰戒」の六事であり、十九紙に載せられている。首題は「集古今仏道論衡実録卷第二 疑／唐釈道宣撰」、尾題は「集仏道論衡実録卷第二 疑」である。第三巻に唐太祖時代の「大唐高祖問僧形服利益」・「高祖幸国学統集三教問道是仏師」・「道士李仲卿著論毀仏琳師抗辯」、太宗時代の「太宗勅道先仏後僧等上諫」・「皇太子集三教学者詳論」・「辛中舎著齊物論浄琳二師抗釈」・「太宗問琳師辯正論信毀交報」・「太宗幸弘福寺手製願文并敘仏道後先」・「太宗勅道士三皇經不足開化令焚除」・「太宗詔契師翻道經為梵文與道士辯覈」の十事と「実録序」の内容を十九紙に載せている。首題は「集古今仏道論衡実録卷第三 疑／唐釈道宣撰」、尾題は「集古今仏道論衡実録卷第三 疑」である。第四巻は内容が唐高宗時代の「実録序」・「今上召仏道二宗入内詳述名理」・「上以西明寺成召僧道士入内論義」・「上以冬雪未降内立齋祀召仏道二宗論義」・「上幸東都召西京僧道士等於彼論義」・「上在東都令洛邑僧靜泰與道士李栄對論」・「上在西京蓬萊宮令僧靈辯與道士對論」・「又在司成宣范義顔宅難莊易義」の七事であり、紙数が十九紙である。首題に題名の「集古今仏道論衡実録卷第四」と千字文の「疑」と撰者号の「唐釈道宣撰」、尾題に題名の「集古今仏道論

衡卷第四」と千字文の「疑」が記されている。

宋版の開元寺蔵本『仏道論衡』の題名は「集古今仏道論衡実録」で、ほかの系統本より「実録」の二文字が増えている。「実録」は著者の周囲で実際に起きた出来事を記録したものという性質を持っているため、全四巻のうち、ただ第四巻が題名と附合している。巻号は中原・北方系統本の「巻甲」、「巻乙」、「巻丙」、「巻丁」と違い、「第一巻」、「第二巻」、「第三巻」、「第四巻」となっている。諸巻の紙数も開宝蔵本、高麗再雕本と異なり、すべて十九紙前後である。千字文は「疑」で、数字で置き換えれば四百六十三で、中原・北方系統本より一字上がる。諸巻の内容は高麗再雕本とほぼ同じで、ただし、第三巻の高祖・太宗時代の十事の後に記載された「実録序」が再雕本では第四巻の高宗時代の記事の前に記された。また再雕本の最後に付した「捨道歸佛文」は開元寺蔵本に収録されていない。

両蔵の刊記から、前後して雕造された両蔵本といえども、わずか十数年だけ離れて刊行されたことが分かる。かつ『醍醐寺蔵宋版一切経目録』に載せられた東禅寺版の書誌情報を開元寺版のテキストと対照して比較すれば、両蔵本の類似性は高いと判断される。両蔵本の題名はすべて「集古今仏道論衡実録」、撰者号は「唐釈道宣撰」、巻号は統一的に数字とされ、また各巻外題、内題、尾題など相互に対応できるため、底本も相似していたと考えられる。

### 思溪蔵本『集古今仏道論衡』について

思溪版大蔵経は開版地名にちなんで湖州版とも称されるが、前期と後期に分かれて「前思溪蔵」と「後思溪蔵」に区別されている。「前思溪蔵」と通称されたのは、南宋靖康元年（1126）から紹興二年<sup>11</sup>（1132）以後にかけて湖州（現在の浙江省）帰安県松亭郷思溪の円覚禅院で開版された「円覚寺蔵」である。それは北宋の末期に密州觀察史を致仕した同

<sup>11</sup> 雕造完了の年時は全く不明であるが、いくつかの説がある。紹興二年頃は開版した時なのか完了した時なのか、未だ確定していない。詳しい内容は李富華・何梅 [2003] 234頁を参照。

郷在住の王永従が一族とともに発願して支援した私版大蔵経である。開版事業は円覚禅院が出来上がってほどなく展開し、役職として雕経作頭・印経作頭・掌経沙門・対経沙門などが設けられていた。専ら王氏一族の喜捨によって出来上がった。福州版と異なり全蔵五百四十八函、五千四百八十巻の中に一・二箇所を除き、首尾に刊記が持たないのが特色である。また、福州版の「音釈」が別帖になっているのと異なって基本的に各帖末に収録されている。版式について初期の『大般若経』の第二百余巻前は福州版と同じように一版三十六行（一折六行×六折）、一行十七字で、後は全部一版三十行（一折六行×五折）、一行十七字という形式である。

南宋の中期において王氏一族の没落に伴い、円覚禅院の印経坊の印刷活動も停滞してきた。南宋末の淳祐年間（1241～1252）に宋室宗族の趙氏が檀越になり、寺格も法宝資福禅寺に上昇し、再び開版されるに至った。版本の補刻・補修が施され、続蔵部（四百五十巻）が追雕され、思溪版の後期、即ち「後思溪蔵」の時代に入り、同蔵経も「資福蔵」と呼ばれている。しかし、半世紀も過ぎない内に、端宗の景炎元年（1276）モンゴル軍の兵火によって大蔵経版はすべて焼失してしまった。思溪版は南宋のはじめに雕造し、南宋の滅亡と共に失われ、南宋版とも称される<sup>12</sup>。

現在、中国に数少なく散在する経本以外、ただ国家図書館に四千余巻の清末に楊守敬（1839～1915）が日本から持ち帰った思溪版（資福蔵）がある。南宋時代（日本の平安・鎌倉時代に当たる）に日本に伝わったが、六蔵ほど現存しているという。その中の増上寺の南宋思溪版は『大正蔵』の対校本に用いられており、大蔵経テキスト学上極めて重要な役割を担った<sup>13</sup>。指摘したいのは思溪版が『大正蔵』の脚注に「宋」本と示されている一方で、同じ宋本の福州版が宮内庁書陵部に所蔵されてい

<sup>12</sup> 思溪版の情報については李富華・何梅 [2003] 223～251 頁を参照。

<sup>13</sup> 落合俊典「南宋思溪版の過去・現在・未来」『漢伝仏教研究的過去現在未来』会議論文集 45～64 頁、2015 年 4 月）。現存場所については『大蔵経——成立と変遷』54 頁参照。

るため、「宮」本で示されていることである。

筆者が直接閲覧した思溪蔵本『仏道論衡』は現在愛知県岩屋寺所蔵の思溪版經典群に含まれている四巻本である。版式は一版三十行（一折六行×五折）、一行十七字で、音義は各巻の巻末に付されている。諸巻の紹介は以下の通りである。

#### 第一巻

内容：漢・魏晉南北朝の十事

紙数：二十五

首題：古今仏道論衡実録序 疑／唐釈道宣撰

尾題：集仏道論衡実録巻第一 疑

#### 第二巻

内容：北周・隋代の六事

紙数：二十三

首題：集古今仏道論衡実録巻第二 疑／唐釈道宣撰

尾題：集仏道論衡実録巻第二 疑

#### 第三巻

内容：唐高祖・太宗朝の十事、実録序

紙数：二十四

首題：集古今仏道論衡実録巻第三 疑／唐釈道宣撰

尾題：集古今仏道論衡実録巻第三 疑

#### 第四巻

内容：唐高宗時代の七事

紙数：二十四

首題：集古今仏道論衡実録巻第四 疑／唐釈道宣撰

尾題：集古今仏道論衡巻第四 疑

上記に示したように、二十五紙の第一巻に序文と後漢の「後漢明帝感夢金人騰蘭入雒道士等請求角試」、前魏の「前魏時吳主崇重釈門為仏立塔寺因問三教優劣」、北魏の「魏陳思王曹植辯道論」・「元魏君臨釈李雙信致有興廢故述其由」・「魏明帝登極召沙門道士對論敘仏道先後」、東晋

の「晋孫盛老聃非大賢論」・「晋孫盛老子疑問反訊」、劉宋の「宋太宗文皇帝朝會群臣論仏理治致太平」、南梁の「梁高祖先事黃老後帰信仏下勅捨奉老子」、北齊の「北齊高祖文宣皇帝下勅廢道教」の十事が収録されている。首題に「古今仏道論衡実録序 疑／唐釈道宣撰」、尾題に「集仏道論衡実録卷第一 疑」が載せられている。二十三紙の第二巻に北周の「周高祖登朝論屏仏法安法師上論」・「周祖平齊集論毀法遠法師抗詔」・「周祖東巡滅法已久任道林請興仏」・「周天元皇帝納王明広表開仏法」と隋の「隋高祖下詔述絳州天火焚老君像」・「隋兩帝事宗仏理稟受帰戒」の六事が載せられている。首題は「集古今仏道論衡実録卷第二 疑／唐釈道宣撰」、尾題は「集仏道論衡実録卷第二 疑」である。二十四紙の第三巻に唐太祖時代の「大唐高祖問僧形服利益」・「高祖幸国学統集三教問道是仏師」・「道士李仲卿著論毀仏琳師抗辯」、太宗時代の「太宗勅道先仏後僧等上諫」・「皇太子集三教学者詳論」・「辛中舍著齊物論淨琳二師抗釈」・「太宗問琳師辯正論信毀交報」・「太宗幸弘福寺手製願文并敘仏道後先」・「太宗勅道士三皇経不足開化令焚除」・「太宗詔煬師翻道経為梵文與道士辯覈」の十事と「実録序」の内容を載せている。首題は「集古今仏道論衡実録卷第三 疑／唐釈道宣撰」、尾題は「集古今仏道論衡実録卷第三 疑」である。第四巻は内容が唐高宗時代の「実録序」・「今上召仏道二宗入内詳述名理」・「上以西明寺成召僧道士入内論義」・「上以冬雪未降内立齋祀召仏道二宗論義」・「上幸東都召西京僧道士等於彼論義」・「上在東都令洛邑僧静泰與道士李栄對論」・「上在西京蓬萊宮令僧靈辯與道士對論」・「又在司成宣范義顔宅難莊易義」の七事であり、紙数が二十四紙である。首題に題名の「集古今仏道論衡実録卷第四」と千字文の「疑」と撰者号の「唐釈道宣撰」、尾題に題名の「集古今仏道論衡卷第四」と千字文の「疑」が記されている。

思溪蔵は福州版と比較すれば、些細な文字以外は、内容と形式・版式がほぼ一致しているため（以下の図に示す）、直接的な伝承関係が認められる。一般的には東禪寺版が開元寺版・思溪蔵に影響したと認識されているが、同書は例外であるかもしれない。紹興四年までに福州版の雕造チームは四巻本の『仏道論衡』を見つけられなかったため、刊行せず、

思溪蔵本が刊行された後、それを底本として補刻された可能性が高い。  
思溪蔵を江南大蔵経本の代表としたい。

## 2. 江南系統大蔵経本『仏道論衡』の性格

『仏道論衡』のテキストについて宋元諸刊本大蔵経の中では、最初に開版された開寶蔵、ないし開寶蔵を忠実に復刻した金蔵・高麗初雕蔵とそのほかの諸刊本大蔵経の間で内容の違いが最も大きい。また初めて開寶蔵本の相違に注意した人物は、二百五十余年後の高麗再雕蔵校正チームの責任者であった学僧守其である。再雕蔵本『仏道論衡』の末尾に守其によって記された校正跋文「集古今仏道論衡四卷重校序」（以下、「重校序」と呼ぶ）が載せられている。

守其の校正跋文は、『仏道論衡』の開寶蔵本（宋本）と契丹蔵本（丹本）は、第三巻と第四巻において大きく食い違っていることを指摘した上で、高麗再雕本が契丹蔵本の内容に従ったという結論とその理由を述べている。

契丹蔵本については、王朝の順に記事が調整された高麗再雕本を参照すれば全体を把握できるが、『新集蔵経音義随函録』<sup>14</sup>によってその構成を裏付けることができる。『随函録』に『仏道論衡』から採録された各巻首尾の語彙を現存テキスト原文の対応箇所と突き合わせて見れば、テキストの形態や構成などを窺知できる。序文と四巻の各巻に収録された巻首尾にあたる音義釈を参照すれば、各巻記事の順列は契丹蔵本によって調整された高麗再雕本の調巻と一致している。道宣が当時において完成した四巻の再治本と最も近いのは、それを伝承した長安写経にほぼ等しい北方系統の契丹蔵本である。題名はすでに「実録」（初治本の題名に「実録」が付いている）が付いておらず、「集古今仏道論衡」になった一方で、巻号も「甲」、「乙」、「丙」、「丁」になった。

<sup>14</sup> また『可洪音義』と称す。現存する契丹蔵の零巻と断片から見て、巻首の経題下の千字文が開寶蔵と宋元版の刊本大蔵経と全く異なり、ただ東晋可洪撰の音義書『随函録』に取り上げられる諸經典の千字文帙号と一致しているところから、契丹蔵と『随函録』が依拠した底本は同じ系統に属する大蔵経であると考えられる。



守其が再雕蔵を編集した時に、取り扱った底本（初雕と開寶蔵本）と校本（契丹蔵本）は実際に何れも再治本或いは再治本から伝承された異本である。しかしそれらの調巻と内容に大きな食い違いがあるので、二つの系統のテキストを合成しなければならなかった。そのため再雕蔵本は中原と北方の何れの系統に属せず、複合本（初雕・開寶蔵本の全巻と契丹蔵本の第三巻）であると見なすことができる。もとの再治本より「捨道帰仏文」が増えているのみで、現存テキストの中で最も再治本と近いものである。

大正蔵を編纂した時『仏道論衡』の底本として比較的に優良であるが、複合本の高麗再雕蔵本を採用したが、江南諸蔵本に同じく属する校本の状況はどうであろうか。それを把握するために、前述の江南系統本を代表する思溪蔵本を用いて、開寶蔵系統本と契丹蔵系統本を比較する必要がある。

江南系統本を代表する思溪蔵本を全体的に考えれば、北方・中原との間で、内容より題名、巻号、撰者号などの形式の方が相違が大きいと言える。中原・北方系統本に現れた特徴の内訳は実際は再治本の形式を反映している。宋版の思溪蔵本『仏道論衡』の題名は「集古今仏道論衡実録」で、ほかの系統本より「実録」の二文字が増えている。巻号を思溪蔵本は序数で、他は十干で示している。撰者号を江南系統本は「唐釋道宣撰」、他は「唐西明寺釋氏」とする。帙号は江南系統本がすべて「疑」、中原・北方系統本が「星」とする。更に江南系統は「郭行真捨道帰仏文」が付いていないなどの点も見過ごせず、中原・北方系統本と異なっている独特の一面が認められる一方、10世紀以後に成立した中原・北方系統本から直接伝承された痕跡は見当たらない。ただし題名・選者号などの初治本と共通する特徴から見て、思溪蔵本の源流を求めるためには『仏道論衡』のより一層古い形態が保存されている日本写経本と比較する以外に術がないのである。

前述したように、唐代において『仏道論衡』は初治本と再治本が存在し、また関連記載に基づけば、何れも日本に伝わったことが分かる。

『大日本古文書』によれば、初めて写された『仏道論衡』の記述は、天

平宝字五年（761）の写経所公文（『大日本古文書』編年の十五）に現れたただ四卷本の中の一巻である。更に日本の将来目録により平安時代に『仏道論衡』が二度にわたり請来されたことがわかる。第一回は最澄の『伝教大師将来越州録』に記された「古今佛道論衡二卷」の不完全な四卷本の経本であり、第二回は円珍の『智証大師請来目録』に載せられた宣宗大中七年（853）に伝来したものである。題名と巻数が日本古写経本と相応する故に円珍が将来した三巻の『仏道論衡』は、日本古写経本の源へ遡る可能性がある。

現存の日本古写経本は、金剛寺本<sup>15</sup>・興聖寺本<sup>16</sup>・七寺本<sup>17</sup>の『仏道論衡』を主とする、十二世紀以降に書写されたものである。通常、日本古写経が基づいた底本のルーツは、平安初期に書写された古写経に遡り得るため、同書の古い形態を反映したものと考えられる。円珍が記した「古今仏道論衡実録」という題名は江南の思溪藏本<sup>18</sup>と同じである。請

<sup>15</sup> 金剛寺一切経の『仏道論衡』は比較的早期に書写されたもので珍しい写本である。「快尋奉書写一切経」という奥書があるため、恐らく元来は快尋発願一切経の経本である。金剛寺本は上・中・下の三巻から成り、平安後期の保延四年（1138）の写経で、卷子本である。紙本墨書（黄檗・白色の楮紙）。日本古写経データベースで上・中・下三巻のカラー画像が見られる。

<sup>16</sup> 興聖寺本『仏道論衡』は上・中・下の三巻から成り、折本である。紙本墨書（黄檗の楮紙）、天地界、行間淡墨界、楷書体である。毎巻冒頭の上に「円通山興聖寺」と横書きされている。当写本には校合や書写年代などの奥書が全く見られない。写本の筆跡や所蔵する興聖寺一切経の歴史状況からみて、およそ平安末期（12世紀後半）の頃に書写されたものと推測される。全巻にわたって若干の虫損箇所を除き、現存状態は良好である。

<sup>17</sup> 七寺本『仏道論衡』は上・中・下の三巻から成り、函号「甲復十」、卷子本である。紙本墨書（黄檗の楮紙）、天地朱界、行間淡墨界。楷書である。文中には行間の補字、衍字、倒置・削除・補入の符号と行間の校勘が間間見られ、若干の虫損が見られるものの、文字の判読を妨げるほどではなく、状態のよい写本と言える。書写年代の記録を欠くが、七寺一切経の歴史的状況と奥書の「道胤」から見て、平安末期の承安五年（1175）から治承二年（1178）までに書写されたと推測される。日本古写経データベースで巻上のカラー画像が見られる。

<sup>18</sup> 前掲の図に見られる如く、首題は「古今仏道論衡実録（序）」である。

来場所の天台山や福州が同じ中国の南部に位置しているため、初治本が中国南部に流传していたことも認められる。

思溪蔵本と興聖寺本は題名や撰者号が一致している一方で、高麗再雕蔵本と異なっている。また高麗再雕蔵にある郭行真の「舍道帰仏文」が収められていないため、江南諸蔵本と日本古写経本との間の構成上の親近性が高いと考えられる。内容について写経本より高宗時代の最後の三つの記事が増えていることを除けば、思溪蔵本を代表する江南諸蔵本に現れた特徴は初治本のものである。

更に記事の字句を比較すれば、思溪蔵本は興聖寺本に近い。古写経本と一致している箇所がテキストの中に存在しているため、江南系統本は日本古写経本の元になった中国写経本から影響を受けたのに違いない。

思溪蔵本は四巻であるものの、底本は上中下の三巻本で、日本古写経本と同源である。両方の序文に「分為上中下三卷」と示されているが、それは思溪蔵本を編集する際に直接的に三巻本の『仏道論衡』を参考にした証拠である。

写本より後に成立した江南系統本の『仏道論衡』は古い形態が見られる一方で、後に改変が加えられた新しい形態も見られる。諸巻の前に各記事のタイトルがあり、開寶蔵本・契丹蔵本・古写経本のように巻ごとに記事の番号を付けているのと違って、思溪蔵本は一から三十三まで記事の番号を通して整えられており、これは編集者により加えられた改変であると推測される。

また思溪蔵本の「実録序」が載せられた箇所にもそれが三巻本から後人の手で再編集された痕跡が見られる。「実録序」の内容は第四巻に載せられている高宗時代の仏道論争の記事を収録する由緒についてであるため、江南系統本が第三巻末尾に収録したのは決して正しいとは言えない。もとの長安写経も第四巻に載せていたことが推定できるため、思溪蔵本の編集者は実録序と第四巻の内容をよく照合しなかったため、第三巻と第四巻を調巻した時「実録序」を第三巻の最後に載せたと推測される。

以上から、古い三巻本の初治本を底本とした思溪蔵本は、四巻本を参

照した上で、一定の編集を行い、新しく作られた四巻本である。端的に言えば江南諸蔵本は高麗再雕蔵本と同じ性質を持っている複合本であるが、高麗再雕蔵本は異なる再治本を複合したのに対し、江南諸蔵本は初治本と再治本との複合である。

### おわりに

江南系統本『仏道論衡』を概観して、他のテキストと比較した結果、独特の特徴を持つことが分かった。刊本大蔵経本の多様性は道宣自ら二種のテキストを流伝させたからである。ただし、比較を通して、写本を含めて種類のテキストの性質を定めることができる。それらのテキストの中でただ日本古写経本だけが唐において道宣が最初に完成した初治本に遡ることができ、長安写経を底本として成立した契丹蔵は、道宣によって後に完成された四巻の再治本に遡ることができる。開寶蔵、高麗初雕・金蔵本は四巻再治本の変形で、高麗再雕蔵本は上掲二種の四巻本から生まれた四巻再構本である。更に江南系統本は三巻初治本と四巻再治本から生まれた四巻の再構本である。

### 参考文献

#### （一次資料及び略号）

- 『大正新修大蔵経』大蔵出版、高楠順次郎等編、1924—1932年。  
 『昭和法宝総目録』、大正新修大蔵経刊行会、1929年。  
 『七寺一切経目録：尾張史料』、七寺一切経保存会、1968年。  
 『高麗大蔵経』李瑄根編、東国大学校、1976年。  
 『興聖寺一切経調査報告書』、京都府教育委員会、1998年。  
 総本山醍醐寺編『醍醐寺蔵宋版一切経目録』第四冊、東京、汲古書院、2015年。  
 宮内庁書陵部収蔵漢籍覧：  
[https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/T\\_bib\\_body.php?no=007075](https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_body.php?no=007075)

（二次資料）

- 李富華・何梅『漢文仏教大蔵経研究』、宗教文化出版社、2003年。
- 落合俊典『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』、国際仏教学大学院大学、2007年。
- 劉林魁『『集古今仏道論衡』的編纂、版本与學術価値』、『図書館工作与研究』所収、2016年。
- 何梅『歴代漢文大蔵経目録新考』上冊、中国社会科学文献出版社、2013年。
- 宮崎展昌『大蔵経の歴史—成り立ちと伝承—』、方丈堂出版、2019年。
- 野沢佳美『印刷漢文大蔵経の歴史——中国・高麗篇』、立正大学情報メディアセンター、2015年。
- 京都仏教各宗学校連合会編『新編大蔵経——成立と変遷』、法蔵館、2020年。

## 【翻刻】

## 『集古今佛道論衡』の江南系統大蔵経本翻刻

## 凡例

- 1、本篇は、主に道宣撰『集古今佛道論衡』の江南系統大蔵経本について校訂したものである。校訂本は思溪蔵本を底本にし、毘盧蔵本（福州開元寺版）を校本にする。思溪蔵本はおそらく最も早く刊行されたので、江南系統大蔵経本の代表として底本とした。毘盧蔵本の図版は公開され、思溪蔵と比較する江南大蔵経本として校本の一つとして入れた。江南系統大蔵経と比較するために、後世に最も影響を与えた完本といえる高麗再彫蔵本も校本とする。毘盧蔵本を盧本と略称、高麗再彫本を麗本と略称する。
- 2、讀解の便の為、私意によって句読点を施し、また内容によって段落を分けた。典籍名はすべて『 』で示した。二列の小文字の脚注は一列に変更して（ ）を付した。引用文は「 」で示した。
- 3、俗字、異体字、古今字、繁簡字などはすべて通行の繁体字（正字）に直し、脚注で示さない。（例）「花」＝「華」・「于」＝「於」・「无」＝「無」・「陀」＝「陀」・号＝號・「沉」＝「沈」・「曆」＝「歷」。

## 古今佛道論衡卷一

古<sup>19</sup>今佛道論衡實錄<sup>20</sup>序 疑唐釋道宣撰<sup>21</sup>

若夫無上佛覺、迥出籠樊<sup>22</sup>、超三界而獨高、截四流而稱聖。故使隄封所漸、區寓統於大千、聲教所覃、沐道霑於八部。所以金剛御座、峙閭

<sup>19</sup> 「古」、麗本「集古」。

<sup>20</sup> 「實錄」、麗本ナシ。

<sup>21</sup> 「唐釋道宣撰」、麗本「唐龍朔元年於京師西明寺實錄」。

<sup>22</sup> 「籠樊」、麗本作「樊籠」。

浮之地心、至覺據焉、布英聖之良術。遂有天人受道、龍鬼皈<sup>23</sup>心、挹酌不相之方、散釋無明之患。

然夫聖人所作起必因時、時有邪倒之夫、故即因而陶化、天竺盛於六諦、神州重於二篇、遂使儒道互先真偽交正<sup>24</sup>。自非入證登位、何由分析殊途。致令九十六道競飾澆詞、六十二見各陳名理、在緣或異、大約斯歸、莫不謂無想為泥洹、指梵主為生本。故二十五諦開計度之街衢、六大論師立神我之真宰。居然設教、億載斯年、攝統塵蒙、九土崇敬。考其術也、輕生而會其源、論其行也、封固而登其信。故有四韋陀論、推理極於冥初、二有天根、尋生窮於劫始。臆度玄遠、冒罔生靈、致有赴水投巖、坐熱臥棘、吸風露而曰仙、祖形骸<sup>25</sup>而號聖、守死長迷、莫知迴覺。如來哀彼黔黎、降靈<sup>26</sup>赤澤。曜形丈六、金色駁於人天、敷揚四辯、慧解暢於幽顯。能使魔王列陣、千<sup>27</sup>軍碎於一言、梵主來儀、三輪摧於萬惑。於是鑠腹戴爐之輩、結舌伏於道場、敬日重火之徒、洗心仰於覺教<sup>28</sup>。舍衛城側大偃邪鋒、堅固林中傾倒巢<sup>29</sup>穴。能事既顯、將<sup>30</sup>務弘通、玉關揚正道之秋、金陵<sup>31</sup>表乘機之瑞。清涼臺上圖以靈儀、顯節陵<sup>32</sup>中陳茲聖景。度人立寺、創廣仁風、抑邪通正、於斯啟轍。

于斯時也、喋喋黔首、無敢抗言、瑣瑣黃巾、時褻異議。然其化被不及於龍勒、名位無踐於槐庭王、何達其上賢、班<sup>33</sup>馬隆其褒貶、安得與夫釋門相抗。雷同混迹者哉。斯何故耶。良以博識既寡、信保常迷、今則通觀具瞻、義必爽開前惑。且夫其流易曉、闕澤之對天分、其理難通<sup>34</sup>、孫

<sup>23</sup> 「皈」、麗本「歸」。

<sup>24</sup> 「正」、盧本「喪」。

<sup>25</sup> 「骸」、麗本「體」。

<sup>26</sup> 「靈」、底本・盧本「雲」、麗本により改めた。

<sup>27</sup> 「千」、麗本「十」。

<sup>28</sup> 「教」、麗本「路」。

<sup>29</sup> 「巢」、麗本「枯」。

<sup>30</sup> 「將」、麗本「獎」。

<sup>31</sup> 「陵」、底本・盧本「相」、麗本により改めた。

<sup>32</sup> 「陵」、麗本「園」。

<sup>33</sup> 「班」、麗本「斑」。

<sup>34</sup> 「通」、麗本「迴」。

盛之談海截。然猶學未經遠、情弊疎通、邪辯逼真、能無猜貳。孔丘之在東魯、尚啟虛盈、卜商之據西河、猶參疑聖。自餘恒俗、無足討論。今以天竺胥徒、聲華久隔。震旦張葛、交論寔繁。故商推<sup>35</sup>由來、銓衡敘列。筆削蕪濫、披圖藻鏡。總會聚之號、曰「佛道論衡」。分為上中下三<sup>36</sup>卷、如有隱括、覽者詳焉。

### 集古今佛道論衡實錄卷第一<sup>37</sup>

唐釋道宣撰<sup>38</sup>

後漢隆法道士表<sup>39</sup>請求角試事第一

魏時吳王<sup>40</sup>立寺<sup>41</sup>問三教優劣事第二

魏陳思王辨道論事第三<sup>42</sup>

晉孫盛聖賢同軌老聃非大賢論事第四<sup>43</sup>

晉孫盛老子疑問反詰事第五<sup>44</sup>

後魏太武重道毀佛感應事第六<sup>45</sup>

宋文帝集群臣論佛理致太平<sup>46</sup>第七<sup>47</sup>

梁高祖下勅捨奉老子事第八<sup>48</sup>

魏明帝召佛道二宗論先後事第九<sup>49</sup>

<sup>35</sup> 「推」、麗本「確」。

<sup>36</sup> 「上中下三」、麗本「甲乙下四」。

<sup>37</sup> 「實錄卷上」、麗本「卷七」。

<sup>38</sup> 「唐釋道宣撰」、麗本「唐西明寺釋氏」。

<sup>39</sup> 「後漢隆法道士表」、麗本「後漢明帝感夢金人騰蘭入雒道士等」。

<sup>40</sup> 「王」、麗本「主」。

<sup>41</sup> 「魏時吳王立寺」、麗本「前魏時吳主崇重釋門為佛立塔寺因」。

<sup>42</sup> 「辨道論事第三」、麗本「曹植辯道論附」。

<sup>43</sup> 「聖賢同軌老聃非大賢論事第四」、麗本「老聃非大賢論附」。

<sup>44</sup> 「詰事第五」、麗本「訊附」。

<sup>45</sup> 「後魏太武重道毀佛感應事第六」、麗本「元魏君臨釋李雙信致有興廢故述其由事三」。

<sup>46</sup> 「平」、麗本「平事」。

<sup>47</sup> 「宋文帝集群臣論佛理致太平事第七」、麗本「宋太宗文皇帝朝會群臣論佛理治致太平事四」。

<sup>48</sup> 「下勅捨奉老子事第八」、麗本「先事黃老後歸信佛下勅捨奉老子事六」。

<sup>49</sup> 「魏明帝召佛道二宗論先後事第九」、麗本「魏明帝登極召沙門道士對論敘佛



齊高祖文宣帝下勅廢道事第十<sup>50</sup>後漢隆法道士表<sup>51</sup>請求角試事第一

漢顯宗孝明皇帝感夢金人、乃遣使尋佛法。還洛陽、與道士掄神力、僧護信為立寺度人<sup>52</sup>。『漢法本內傳』云：明帝永平三年、上夢神人金身丈六、項有白光飛在殿前、欣然悅之。明日博問<sup>53</sup>群臣「此為何<sup>54</sup>神。」有通人傅毅曰「臣聞天竺有得道者、號曰佛<sup>55</sup>、飛行虛空、身有日光、殆將其神乎。」於是上悟、遣郎中蔡愔<sup>56</sup>・博士弟子王遵<sup>57</sup>一十八人、於大月支中天竺國、寫佛經四十二章、藏在蘭臺石室第十四間。又於洛陽城西雍門外為起佛寺、於是<sup>58</sup>壁畫千乘萬騎、繞塔三匝。又<sup>59</sup>於南宮清涼臺及開陽城門上、圖佛儀像。時造壽陵、名曰顯節、亦於其上作佛圖像、廣如牟子所顯。

時有沙門稱<sup>60</sup>摩騰・竺法蘭、位行難論<sup>61</sup>、志在<sup>62</sup>開化。承蔡愔達<sup>63</sup>天竺、請騰東行、不守區域、隨至洛陽、曉喻物情、崇明信本<sup>64</sup>。帝問騰曰「法王出世、何以化不及此。」騰曰「迦毘羅衛者、三千大千世界百億日月之中心、三世諸佛皆在彼生、乃至天龍鬼神有願行者、皆生於彼、受佛

---

道先後事五」。

<sup>50</sup> 「齊高祖文宣帝下勅廢道事第十」、麗本「北齊高祖文宣皇帝下勅廢道教事七」。

<sup>51</sup> 「後漢隆法道士表」、麗本「漢明帝感夢金人騰蘭入雒諸道士等」。

<sup>52</sup> 「漢顯宗……度人」、三十三字、麗本ナシ。

<sup>53</sup> 「博問」、麗本「問」。

<sup>54</sup> 「為何」、麗本「何為」。

<sup>55</sup> 「佛」、麗本「佛也」。

<sup>56</sup> 「愔」、麗本「愔、郎將秦景」。

<sup>57</sup> 「遵」、麗本「遵等」。

<sup>58</sup> 「是」、麗本「其」。

<sup>59</sup> 「又」、麗本「又將畫釋迦立像乃」。

<sup>60</sup> 「稱」、麗本「迦攝稱」。

<sup>61</sup> 「論」、麗本「倫」。

<sup>62</sup> 「在」、麗本「存」。

<sup>63</sup> 「達」、麗本「使達」。

<sup>64</sup> 「本」、麗本「為本」。

正化、咸得悟道。餘處眾生無緣感佛、佛不往也。佛雖不往、光明及處、或五百年、或一千年<sup>65</sup>外皆有聖人、傳佛聲教而化導也<sup>66</sup>、廣說教義。」帝信重之。永<sup>67</sup>平十四年正月一日、五嶽諸山道士朝正之次、自相命曰「天子棄我道法、遠求胡教、今因朝集、可以表抗之。」其表曰「五嶽十八山觀、太上三洞弟子褚善信等、死罪上言：臣聞太上無形無名・無極無上・靈寶<sup>68</sup>自然。大道出於造化之前、上士<sup>69</sup>同遵、百王不易。今陛下道邁義皇、德過堯舜、竊承陛下棄本逐<sup>70</sup>末、求教西域、所事乃是胡神、所說不參華夏。願陛下恕臣等罪、聽與試驗。臣等諸山道士、多有徹視遠聽、博通經典<sup>71</sup>。從元皇已來、太上群錄・太虛符呪、無不綜練、達其涯極。或策使鬼神、或吞霞飲氣、或入火不燒、或履水不溺、或白日昇天、或隱形不測。至於方術藥餌、無所不能、願得與其比較<sup>72</sup>。一則聖上意安、二則得辨真偽、三則大道有歸、四則不亂華俗。臣等若比對不如、任聽重決、如其有勝、乞除虛妄。」

勅遣尚書令宋庠引入長樂宮、勅以今月十五日、可集白馬寺。道士等便置三壇、壇別開二十四門。南嶽道士褚善信、華嶽道士劉正念、恒嶽道士桓文度、岱嶽道士焦德<sup>73</sup>心、嵩嶽道士呂惠通、霍山・天目山<sup>74</sup>・五臺山<sup>75</sup>・白鹿等八<sup>76</sup>山道士祁文信等、都合六百九十人、各持<sup>77</sup>靈寶真文・太上玉訣・三元符錄等五百九<sup>78</sup>卷、置於西壇。茅成子・許成子・黃子・老子

<sup>65</sup> 「年」、麗本「年、或一千年」。

<sup>66</sup> 「也」、麗本「之」。

<sup>67</sup> 「永」、麗本「暨永」。

<sup>68</sup> 「靈寶」、麗本「虛無」。

<sup>69</sup> 「士」、麗本「古」。

<sup>70</sup> 「逐」、麗本「追」。

<sup>71</sup> 「典」、盧本「與」。

<sup>72</sup> 「校」、麗本「校」。

<sup>73</sup> 「德」、麗本「得」。

<sup>74</sup> 「山」、麗本ナシ。

<sup>75</sup> 「山」、麗本ナシ。

<sup>76</sup> 「八」、麗本「十八」。

<sup>77</sup> 「持」、麗本作「齋」。

<sup>78</sup> 「九」、麗本「九十」。

等二十七家子書、有三<sup>79</sup>百三十五卷、置於中壇。饌食奠祀百神、置於東壇。帝時御行殿在寺南門、以佛舍利經像、置於道西、十五日齋訖。道士等以柴荻和檀・沈香為炬、遶經而泣曰：臣等上啟太極大道・元始天尊・眾仙百靈、今胡神亂夏、人主信邪、正教失蹤、玄風墜緒。臣等敢置經壇、上以火取驗、欲使開示群心、得辨真偽。便縱火焚經、經從火化、悉成灰燼。道士等相顧失色、大生怖懼。將欲昇天隱形者、無力可能、禁効鬼神者、呼策不應、各懷赧愧<sup>80</sup>。南嶽道士費叔才、自憾<sup>81</sup>而死、太傅張衍語褚信曰「卿等所試無驗、即是虛妄、宜就西來真法。」褚信曰「茅成子云太上者、靈寶天尊是也。造化之初<sup>82</sup>、謂之太素、斯豈妄乎。」衍曰「太素有貴德之名、無言教之稱、今子說有言教、即為妄也。」信便默然。

時佛舍利光明五色、直上空中、旋環如蓋、遍覆大眾、映蔽日光。摩騰法師踊身高飛、坐臥在空中<sup>83</sup>、廣現神變、于時天雨寶花在佛僧上。又聞天樂感動人情、大眾感悅、歎未曾有、皆遶法蘭、請說法要。蘭乃出大梵音、歎佛功德、亦令大眾稱<sup>84</sup>三寶。說善惡諸業皆有果報、六道三乘、諸相不一、以<sup>85</sup>說出家功德其福最高、初立佛寺、同梵福量。時有司空陽城侯劉峻與諸官人士庶等千餘人出家、及四嶽諸山道士呂惠通等六百二十人出家、陰夫人・王婕妤等與諸宮人婦女等二百三十人出家。至月末以來、日供設、種種行施、法衣瓶器並出所司。便立十寺七寺安僧在城邑外、

<sup>79</sup> 「三」、麗本ナシ。

<sup>80</sup> 「赧愧」、麗本「愧惡」。

<sup>81</sup> 「憾」、底本・盧本「感」、麗本により改めた。

<sup>82</sup> 「初」、麗本「作」。

<sup>83</sup> 「在空中」、麗本「空中」。

<sup>84</sup> 「稱」、麗本「稱揚」。

<sup>85</sup> 「以」麗本「又」。

三寺安尼在雒城內、漢立<sup>86</sup>佛法自此興<sup>87</sup>焉。摩<sup>88</sup>騰西來、將畫釋迦立像、帝乃令圖出之、於陵園<sup>89</sup>及洛城<sup>90</sup>供養。

### 魏時吳主為佛造塔寺因問三教優劣事第二

『吳書』云孫權赤烏四年、有沙門康僧會者、是康居國大丞相之長子、神儀剛正、遊化為任。於時、三國鼎峙、各擅威衡、佛法北通、未達南國、會欲道被未聞、開教江表。初達建鄴<sup>91</sup>、營立茅茨、設像行道、吳人初見、謂之妖異。有司奏聞、吳主問曰「佛有何神驗也。」會曰「佛晦靈迹、出餘千載、遺形舍利、應現無方。」吳主曰「若得舍利、當為立塔。」經三七日、遂獲舍利、五色曜天、剖之逾堅、燒之不然、光明出火、作大蓮華、照<sup>92</sup>曜宮殿。臣主驚嗟、信情發越<sup>93</sup>、因為造塔、度人立寺。以其所住為佛陁里、教法創興、故遂名建初寺焉。

下<sup>94</sup>勅問尚書令闕澤曰「漢明已來、凡有幾年、佛教入漢既久、何緣始至江東。」澤曰「自永平十年佛法初來、至今赤烏四年、則一百七十年矣。初永平十四年、五嶽道士與摩騰角力之時、道士不如。南嶽道士褚善信・費叔才等在會自憾而死、門徒弟子歸葬南嶽、不預出家、無人流布。後遭漢政凌遲、兵戎不息、經今多載、始得興行。」又問曰「孔丘老子得與佛比對不。」澤曰、「臣聞魯孔丘<sup>95</sup>者、英才誕秀、聖德不群、世號素王、制述經典、訓獎周道、教化來葉。師儒之風、澤潤今古。亦有逸民、如許成子・原陽子・莊子・老子等百家子書、皆修身自翫、放暢山谷、縱汰其心。學歸淡泊、事乖人倫、長幼之節、亦非安俗化物之風。至漢景帝、以黃

<sup>86</sup> 「立」、麗本「興」。

<sup>87</sup> 「興」、麗本「始」。

<sup>88</sup> 「摩」、麗本「初摩」。

<sup>89</sup> 「園」、麗本「國」。

<sup>90</sup> 「城」、麗本「門」。

<sup>91</sup> 「鄴」、麗本「業」。

<sup>92</sup> 「照」、麗本「炤」。

<sup>93</sup> 「越」、麗本「起」。

<sup>94</sup> 「下」、麗本「尋下」。

<sup>95</sup> 「丘」、麗本「君」。

子・老子義體尤深、改子為經、始立道學、勅令朝野悉諷誦焉。若將孔老二教遠方佛法、遠則遠矣。所以然者、孔老二教、法天制用、不敢違天。諸佛設教、天法奉行、不敢違佛、以此<sup>96</sup>言之、實非比對。」吳主大悅、以澤為太子太傅。餘如晉宋炳『明佛論』廣之。

### 魏陳思王曹子建辯道論第三<sup>97</sup>

夫神仙之書・道家之言、乃云「傳說上為辰尾宿、歲星降為東方朔、淮南王安誅於淮南、而謂之獲道輕舉、鉤弋死於雲陽、而謂之尸逝柩空<sup>98</sup>。」其為虛妄甚矣<sup>99</sup>。中興篤論之士、有桓君山者、其所著述多善。劉子駿嘗問言「人誠能抑嗜慾・闔耳目、可不衰竭乎。」時庭中<sup>100</sup>有一老榆、君山指而謂曰「此樹無情欲可忍、無耳目可闔、然猶枯槁<sup>101</sup>腐朽。」而子駿乃言「可不衰竭、非談也。」君山援榆喻之、未是也。何者？余前為王莽典樂大夫、『樂記』言「文帝得魏文侯樂人竇公、年百八十兩目盲。帝奇而問之何所施行。對曰臣年十三而失明、父母哀<sup>102</sup>其不及事、教臣鼓琴、臣不能導引、不知壽得何力。」君山論之曰「頗得少<sup>103</sup>盲、專一內視、精不外鑒之助也。」先難子駿以內視無益、退論竇公便以不鑒證之、吾未見其定論也。君山又曰「方士有董仲君者、有罪繫獄、佯<sup>104</sup>死數日、目陷蟲出、死而復生、然後竟死。生之必死、君子所達、夫何喻乎。夫至神不過天地、不能使蟄虫夏潛<sup>105</sup>、震雷冬發、時變則物動、氣移而事應。彼仲君者<sup>106</sup>乃能藏其氣、屍其體、爛其膚、出其虫、無乃大怪乎。」

<sup>96</sup> 「此」、盧本「言」。

<sup>97</sup> 「第三」、麗本ナシ。

<sup>98</sup> 「空」、盧本「室」。

<sup>99</sup> 「矣」、麗本「矣哉」。

<sup>100</sup> 「中」、麗本「下」。

<sup>101</sup> 「槁」、麗本「竭」。

<sup>102</sup> 「哀」、盧本「衰」。

<sup>103</sup> 「少」、麗本「省」。

<sup>104</sup> 「佯」、盧本「揚」。

<sup>105</sup> 「潛」、麗本「逝」。

<sup>106</sup> 「者」、麗本ナシ。

世有方士、吾<sup>107</sup>王悉所招致。甘陵有甘始、廬江有左慈、陽城有郗儉、始得<sup>108</sup>行氣導引、慈曉房中之術、儉善辟穀、悉號三百歲。本所以集之於魏國者、誠恐斯人之徒接姦讒<sup>109</sup>以欺眾、行妖慝以惑人、故聚而禁之。甘始者老而有少容、自餘術士咸共歸之。然始詞繁寡實、頗竊有怪之<sup>110</sup>言。若遭秦始皇・漢武帝、則復徐福・欒大之徒矣。桀紂殊世而齊惡、姦人異代而等偽、乃如此耶。

又世虛然有仙人之說。仙人者、黨獠猿之屬與。世人得道化為仙人乎。夫雉入海為蛤、鷺入海為蜃、當其<sup>111</sup>徘徊其翼、差池其羽、猶自識也。忽然自投、神化體變、乃更與鼃鼃為群、豈復自識翔林薄・巢垣屋之娛乎。牛哀病而為虎、逢其兄而噬之、若此者、何貴於變化也<sup>112</sup>。而頗為匹夫所罔。納虛妄之詞、信眩惑之說、隆禮以招弗臣、傾產以供虛求、散王爵以榮之、清閑館以居之、經年累稔、終無一効。或歿於沙丘、或崩於五柞。臨時雖復誅其身・滅其族、紛然足為天下笑矣。然壽命長短、骨體強劣、各有人焉、善養者終之、勞擾者半之、虛用者夭之、其斯之謂歟。

陳思王曹植、字子建、魏武帝第四子也。初封東阿郡王、終後諡為陳思王也。幼含珪璋、十歲能屬文、下筆便成、初不改定、世間術藝無不畢善、邯鄲淳見而駭服、稱為天人。

植每讀佛經、輒流連嗟翫、以為至道之宗極也、遂制轉讀七聲昇降、曲折之響、世之諷誦、咸憲章焉。嘗遊漁<sup>113</sup>山、忽聞空中梵天之響、清颺哀婉、其聲動心、獨聽良久、而侍<sup>114</sup>御莫聞。植深感神理、彌悟法應、乃摹<sup>115</sup>其聲節、寫為梵唄、撰文制<sup>116</sup>音、傳為後式。梵聲光顯、始於此焉。其

<sup>107</sup> 「吾」、麗本「至」。

<sup>108</sup> 「得」、麗本「能」。

<sup>109</sup> 「讒」、麗本「詭」。

<sup>110</sup> 「之」、麗本ナシ。

<sup>111</sup> 「其」、麗本ナシ。

<sup>112</sup> 「牛哀……變化也」、底本・盧本ナシ、麗本により補った。

<sup>113</sup> 「漁」、麗本「魚」。

<sup>114</sup> 「侍」、盧本「待」。

<sup>115</sup> 「摹」、麗本「慕」。

<sup>116</sup> 「制」、麗本「製」。

所傳喤凡六契、見梁釋僧祐『法苑集』。然統括道源、精據<sup>117</sup>仙錄、姦妄奇妖<sup>118</sup>、終歸飾詐、故<sup>119</sup>前論所委辯當明矣。

### 晉孫盛撰聖賢同軌<sup>120</sup>老聃非<sup>121</sup>大賢論第四<sup>122</sup>

頃獲閑居、復<sup>123</sup>申所詠。仰先哲之玄微、考大賢於靈術<sup>124</sup>、詳觀風流、究覽行止、高下之辯殆可髣髴。夫大聖乘時、故迹浪於所因、大賢次微、故與大聖而舒卷。所因不同、故有揖讓與干戈迹乖、次微道亞、故行藏之軌莫異。亦猶龍虎之從風雲、形聲之會影響、理固自然、非召之也。是故箕・文同兆、元吉於虎兇之吻、顏・孔俱否、逍遙於匡陳之間。唐堯則天、稷<sup>125</sup>契翼其化、湯武革命、伊呂讚其功。由斯以言、用會<sup>126</sup>影響之論、惟我與爾之談、豈不信哉。何者？大賢庶幾觀象知器、觀象知器<sup>127</sup>預籠吉凶、預籠吉凶<sup>128</sup>是<sup>129</sup>運形<sup>130</sup>同、御治因應、對接群方、終保元吉、窮通滯礙、其揆一也。但欣聖樂易、有待而亨、欽冥而不能冥、悅寂而不能寂、以此為優<sup>131</sup>劣耳。至於中賢・第三之人、去聖有間、故冥體之道未盡、自然運用、自不得玄同。然希古為勝、高想頓足、仰慕淳風、專詠至靈、故有栖峙林壑、若巢許之倫者、言行抗轡、如老彭之徒者、亦非故然、理自然也。

夫形躁好靜、質柔愛剛、瀆<sup>132</sup>所常習、愒所希聞、世俗之常也。是以見

<sup>117</sup> 「據」、麗本「搜」。

<sup>118</sup> 「奇妖」、麗本「多奇」。

<sup>119</sup> 「故」、麗本「其」。

<sup>120</sup> 「軌」、底本・盧本「執」。麗本により改めた。

<sup>121</sup> 「非」、盧本「並」。

<sup>122</sup> 「第四」、麗本ナシ。

<sup>123</sup> 「復」、麗本「後」。

<sup>124</sup> 「術」、麗本「術」。

<sup>125</sup> 「稷」、盧本「稷」。

<sup>126</sup> 「會」、麗本「合」、盧本「舍」。

<sup>127</sup> 「知器觀象知器」、麗本「觀象知器知器」。

<sup>128</sup> 「吉凶預籠吉凶」、麗本「預籠吉凶吉凶」。

<sup>129</sup> 「是」、麗本「是以」。

<sup>130</sup> 「形」、麗本「形斯」。

<sup>131</sup> 「優」、麗本「憂」。

<sup>132</sup> 「瀆」、底本・盧本「讀」。麗本により改めた。

編<sup>133</sup>抗之詞、不復尋因應之適、覩矯枉之論、不復悟過直之失耳。案老書<sup>134</sup>之作與聖教同者、是代大匠斲、駢拇枝指之喻、其詭乎。聖教者、是遠救世之宜<sup>135</sup>、違明道若殊<sup>136</sup>之義也。六經何常闕虛靜之訓、謙沖之誨哉。孔子曰「述而不作、信而好古、竊比我於老彭。」尋斯指<sup>137</sup>也。則老彭之道、以籠罩乎聖教之內矣。且旨<sup>138</sup>說二事而不、非實言也。何以明之。聖人淵寂、何不好哉。又三皇五帝已下、靡不制作、是故『易』象經墳、爛然炳著、棟宇衣裳、與時而與、安在述而不作乎。故『易』曰「聖人作而萬物覩。」斯言之發、蓋指說老彭之德、有以髣髴類己形迹之處所耳、亦猶匿怨而友<sup>139</sup>其人。「左丘明恥之、丘亦恥之。」豈若於吾言無所不說、相體之至也。且顏孔不以導養為事、而老彭養之、孔顏同乎斯人、而老彭異之。凡斯數者、非不亞聖之迹、而又其書往往矛盾、粗列如左。大雅摛紳、幸祛其弊<sup>140</sup>盛、又不達老聃輕舉之指<sup>141</sup>、為欲著訓戎狄、宣導殊域類<sup>142</sup>乎。

若欲<sup>143</sup>宣導殊類、則左衽非玄化之所、孤逝非嘉遁之舉。諸夏陵<sup>144</sup>遲、敷訓所先、聖人之教、自近及遠、未有輒張遐嶮、如此之遊也。若懼禍避地、則聖門可隱、商朝魯邦有無如者矣。苟得其道、則遊刃有餘、觸地元吉、何違天心於戎貊。如不能然者、得無庶於朝隱、而祈仙之徒乎。

昔裴逸民、作『崇有』・『貴無』二論。時談者、或以為不虛達勝之道者、或以為矯時流遁者。余以為尚無既失之矣、崇有亦未為得也。道之為物、惟悅惟惚、因應無方、惟變所適。值澄淳之時、則司契垂拱、遇萬動之化、

<sup>133</sup> 「編」、麗本「偏」。

<sup>134</sup> 「書」、麗本ナシ。

<sup>135</sup> 「宜」、盧本「寶」。

<sup>136</sup> 「殊」、麗本「昧」。

<sup>137</sup> 「指」、麗本「旨」。

<sup>138</sup> 「旨」、麗本「指」。

<sup>139</sup> 「友」、麗本「於」。

<sup>140</sup> 「弊」、盧本「曰」。

<sup>141</sup> 「指」、麗本「旨」。

<sup>142</sup> 「類」、麗本ナシ。

<sup>143</sup> 「欲」、麗本「欲明」。

<sup>144</sup> 「陵」麗本「凌」。



則形體勃<sup>145</sup>興。是以洞鑒雖同、有無之教異陳、聖致雖一、而稱為之名殊目<sup>146</sup>。唐虞不希結繩、湯武不擬揖讓、夫豈異哉。時運故也。伯陽以執古之道以御今之有、逸民欲執今之有以絕古之風。吾故以為、彼二子者、不達圓化之道、各矜其一方者耳。

### 晉孫盛老子疑問反詰第五<sup>147</sup>

『道經』云「故常無欲以觀其妙、故常有欲以觀其徼。此兩者同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、眾妙之門」。舊說及王弼解、妙謂始、徼謂終也。夫觀始要終觀妙知著、達人之鑒也。既以欲澄神照其妙始、則自斯以已宜悉鎮之。何以復須有欲得其終乎。且有欲俱出妙門、同謂之玄。若然以往復、何獨貴於無欲乎。天下皆知美之為美、斯惡已、皆知善之為善、斯不善已。

盛以為夫美惡之名、生乎美惡之實、道德淳美、則有善名、頑嚚聾昧、則有惡聲。故『易』曰「惡不積、不足以滅身。」又曰「美在其中、暢於四支而發於事業。」又曰『『韶』盡美矣、未盡善也。』然則大美大善、天下皆知之、何得云斯惡乎。若虛美非美、為善非善。所美過美、所善違中、若此皆世教所疾。聖王奮<sup>148</sup>誠天下、亦自知之、於斯談也<sup>149</sup>不尚賢、使民不諍<sup>150</sup>、不貴難得之貨、使民不為<sup>151</sup>盜、常使民無知無欲、使知者不敢為。又曰「絕學無憂。唯之與阿相去幾何。善之與惡相去何若。」又下章云「善人、不善人之師、不善人、善人之資。不貴其師、不愛其資、雖智大迷。」盛以為、民苟無欲、亦何所師於師哉。既相師資、非學如何不善師善。非尚賢如何貴愛既在。則善惡不得不彰、非相去何若之謂。又下章云「人之所教我、亦以教人。吾言甚易知、而天下莫能知。」又曰「吾

<sup>145</sup> 「勃」、盧本「教」。

<sup>146</sup> 「殊目」、盧本「目殊」。

<sup>147</sup> 「詰第五」、麗本「訓」。

<sup>148</sup> 「奮」、麗本「舊」。

<sup>149</sup> 「也」、麗本ナシ。

<sup>150</sup> 「諍」、麗本「爭」。

<sup>151</sup> 「為」、麗本ナシ。

將以為教父。」

原斯談也、未為絕學。所云絕者、孔<sup>152</sup>之學耶？堯孔之學耶<sup>153</sup>？隨時設教、老氏之言一其所尚。隨時設教、所以通<sup>154</sup>百代、一其所尚、不得不滯於適變、此又闇弊所未能通者也。

「道冲而用之又不盈」・「和其光同其塵」、盛以為老聃可謂知道、非體道也。昔陶唐之莅天下也、無日解哉、則維昭任眾師、錫匹夫則馭然禪授。豈非冲而用之、光塵同彼哉。伯陽則不然、既處濁位、復遠導<sup>155</sup>西戎、行止則猖狂其迹、著書則矯誑其言、和光同塵固若是乎。余固以為知道、體道則未也。『道經』云「三者不可致詰、混然為一繩<sup>156</sup>。」、「繩兮不可名。復歸於無物、無物之像、是謂惚恍。」又下章云「道之為物、惟恍與惚。惚兮恍兮、其中有象、恍兮惚兮、其中有物。」此二章或言無物、或言有物、先有所不宜者也。

執古之道、以御今之有。上章云「執者失之、為者敗之。」而復云「執古之道以御今之有。」或執或否、得無陷矛盾之論乎。「絕聖棄智、民利百倍。」盛<sup>157</sup>曰：夫有仁聖、必有仁聖之迹、此而不崇、則陶訓焉融。仁義不尚、則孝慈道喪。老氏既云絕聖、而每章輒稱聖人、既稱聖人、則迹焉能得絕。若所欲絕者、堯舜・周孔之迹、則所稱聖者、為是何迹乎。即如其言、聖人有宜滅其迹者、有宜稱其迹者、稱滅不同、吾誰適從。「絕仁棄義、民復孝慈。」若如此談、仁義不絕、則不孝不慈矣。復云「居善地」、「與善仁」。不審「與善仁」之仁、是向所云「欲絕者」非耶。如其是也、則不宜復稱述矣、如其非也、則未詳二仁之義。一仁宜絕、一仁宜明、此又所未達也。若謂不聖之聖、不仁之仁、則教所未詳<sup>158</sup>、不假高唱矣。退至莊周云「聖人不死、大盜不止。」又曰田常竊仁義、以取齊國。

<sup>152</sup> 「孔」、麗本「堯孔」。

<sup>153</sup> 「耶」、麗本ナシ。

<sup>154</sup> 「通」、麗本「道通」。

<sup>155</sup> 「導」、麗本「遁」。

<sup>156</sup> 「繩」、盧本ナシ。

<sup>157</sup> 「盛」、麗本「孫盛」。

<sup>158</sup> 「未詳」、麗本「誅」。

夫天地陶鑄、善惡兼育、各稟自然、理不相關。梟鴟縱毒、不假學於鸞鳳、豺虎肆害、不借術於麒麟。此皆天資<sup>159</sup>自然、不須外物者也、何至凶頑之人、獨當假仁義以濟其姦乎。若乃冒頓殺父、鄭伯盜鄆、豈復先假孝道獲其終害乎。而莊李悝擊殺根、毀駁正訓<sup>160</sup>、何異疾盜賊而銷鑄干戈、覩食噓而絕棄嘉穀乎。後之談者、雖曲為其義、辯而釋之、莫不艱頓<sup>161</sup>於殺聖、困躓於忘親也。知我者希、則我貴矣。又上章云「聖人之在天下」、「百姓皆注其耳目」。師資貴愛、必彰萬物、如斯則知之者安得希哉。知希者何必貴哉。即己之身見貴、九服何得背。實抗言云貴由知希哉。斯蓋欲抑動恒俗、故發此過言耳。聖教則不然、中和其詞、以理訓導。故曰在家必聞、在邦必聞也、是聞必達也、不見善而無悶、潛龍之德、人不知而不愠。君子之道、眾好之必察焉、眾惡之必察焉、既不以知多為顯、亦不以知少為貴。誨誘綽綽、理中自然、何與老聃之言、同日而語其優劣哉。「禮者、忠信之薄而亂之首、前識者、道之華而愚之始。是以大丈夫處其厚不處其薄、處其實不處其華也。」盛<sup>162</sup>曰「老聃足知聖人禮樂、非玄勝之具不獲已而制作耳、而故毀之何哉。是故屏撥禮學、以全其任自然之論、豈不知菽麥<sup>163</sup>不復得返自然之道、直欲申已好之懷、然則不免情於所悅、非浪心救物者也。非惟不救、乃獎其弊矣。」或問「老莊<sup>164</sup>所以故發此唱、蓋與聖教相為表裏、其於陶物明訓其歸一也。」盛以為不然、夫聖人之道、廣大悉備<sup>165</sup>、猶日月懸天、有何不照<sup>166</sup>哉。老<sup>167</sup>氏之言、皆<sup>168</sup>絞<sup>169</sup>於六經矣、

<sup>159</sup> 「資」、麗本「質」。

<sup>160</sup> 「訓」、麗本「說」。

<sup>161</sup> 「頓」、麗本「屯」。

<sup>162</sup> 「盛」、麗本「孫盛」。

<sup>163</sup> 「菽麥」、麗本「叔末」。

<sup>164</sup> 「老莊」、麗本「莊老」。

<sup>165</sup> 「備」、麗本「備矣」。

<sup>166</sup> 「照」、麗本「照者」。

<sup>167</sup> 「老」、麗本「孔」。

<sup>168</sup> 「皆」、麗本「智」。

<sup>169</sup> 「絞」、盧本「駁」。

寧復有所僭<sup>170</sup>之、俟佐助於聃周乎。即莊周所謂「日月出矣、而燭<sup>171</sup>火不息」者也。至於虛詠譎怪微詭之言、尚拘滯於一方、而橫稱不經之奇詞也。「王侯得一以為天下貞」、貞、正也。下<sup>172</sup>章云「孰知其極、其無正耶<sup>173</sup>」。正復為奇、善復為妖。」尋此二章、或云「為天下正」、或云「無正」。既云「善人不善人師」、而復云「為妖」、天下之善一也、而或師或妖、天下之正道一也、而云「正復為奇」、斯反鄙見所未能通也。

集論者曰：盛字安國、師<sup>174</sup>東晉名士綽之子<sup>175</sup>也」、祖則魏名臣之子荊也。綽有顯論、才學所推、聞之前史、盛以<sup>176</sup>為名父之子仕晉、為給事中祕書監散騎常侍。吳昌男、少好墳典、遊心史籍、常以為雖賢聖玄邈、得諸言表、而仁愛自我、陶染庶物、漸漬之功、莫過乎經史。是以仲尼因魯史記以著『陽<sup>177</sup>秋』、使百代之後仰高風以式瞻。孟軻・孫卿並讚揚大化、暨乎史遷、亦記一代之成敗、明鑒誠作來今。遂歷心博綜、撰考諸事疏、著『晉陽秋』、庶擬前賢、以美道訓傳、本并音合三十二卷。又命掌國史竭意經論、一時名作是稱良史、未奏遂卒。子潛以晉太元十五年上之、詔曰「得上故、祕書監所著書、省以慨然。遠模前典、憲章在昔、亦一代之事。」輒勅納之祕閣、以貽于後。潛襲父爵、位<sup>178</sup>參驃騎將軍諮議參軍、見於『晉紀』。盛凡著述、備如別集。品評老氏中賢之流、故知為尹喜<sup>179</sup>述書、乃祖承有據。嵇子云老子就涓子學九仙之術、尋乎練餌、斯或有之。

<sup>170</sup> 「僭」、麗本「愆」。

<sup>171</sup> 「燭」、麗本「焦」。

<sup>172</sup> 「下」、麗本「又下」。

<sup>173</sup> 「耶」、麗本ナシ。

<sup>174</sup> 「師」、麗本「有說云即」。

<sup>175</sup> 「子」、麗本「後」。

<sup>176</sup> 「以」、麗本ナシ。

<sup>177</sup> 「陽」、麗本「春」。

<sup>178</sup> 「位」、麗本ナシ。

<sup>179</sup> 「喜」、麗本ナシ。

至於聖也、則不云學。故<sup>180</sup>語云<sup>181</sup>＜生知<sup>182</sup>者上、學知者次＞、王何所謂<sup>183</sup>典達鴻猷。故班<sup>184</sup>固敘人九等之例、孔丘等為上上、類例皆是聖、李耳等為中上、類例皆是賢。聖有極聖亞聖、賢有大賢小<sup>185</sup>賢、並以神機有利鈍、故智用有漸頓。盛敘老非大賢、取<sup>186</sup>其閑放自牧、不能兼濟於萬物、坐觀周衰、陽遁於西裔、行及秦壤<sup>187</sup>、而實死扶風、葬槐里、非遁天之仙、信矣。

### 元魏君臨釋李雙信致有廢興之相<sup>188</sup>故述其由第六<sup>189</sup>

魏太祖道武帝、託跋珪天興元年下詔曰「夫佛法之興、其來遠矣。拯濟<sup>190</sup>之功莫及存沒、神蹤遺跡信可依憑。可於京邑建飾容範、脩整宮舍、令信向之徒有所居止。」是歲、始作五級佛圖・耆闍崛山及須彌殿。加以飾繪、別構講堂禪室・沙門座處、莫不具焉。

魏世祖太武託跋燾即位、亦遵太祖・太宗之業。雖有黃老不昧其術、每引高德沙門與談玄理。於四月八日、與諸佛像行於廣衢、帝親御門樓、散花禮敬、篤敬兼至。晚據有平城、興敬李術、為立道壇。司徒崔皓少習左道、猜忌釋門、既位居佐<sup>191</sup>輔、尤不信有佛、謂是虛誕。見讀佛經奪而投井中、密欲加滅、燾所仗<sup>192</sup>信。道士寇謙之與皓欸狎、遂奏拜謙、位稱天

<sup>180</sup> 「故」、麗本「古」。

<sup>181</sup> 「云」、麗本「曰」。

<sup>182</sup> 「知」、麗本「知之」。

<sup>183</sup> 「謂」、麗本「位」。

<sup>184</sup> 「班」、麗本「斑」。

<sup>185</sup> 「小」、麗本「中」。

<sup>186</sup> 「取」、麗本「聖」。

<sup>187</sup> 「行及秦壤」、麗本ナシ。

<sup>188</sup> 「之相」、麗本ナシ。

<sup>189</sup> 「第六」、麗本「事三」。

<sup>190</sup> 「拯濟」、麗本「濟益」。

<sup>191</sup> 「佐」、麗本「偽」。

<sup>192</sup> 「仗」、底本・盧本「投」、麗本により改めた。

師<sup>193</sup>。皓有才略、太武信用、國人以為摸楷<sup>194</sup>。

時有沙門玄高、道王河西、名高海右、神用莫測、貴賤咸重。燾乃軍逼掠境、徵高東還、暨<sup>195</sup>達平城、大弘禪化。太子晃事高為師、形心盡禮。晃時被讒、為父所疑、乃告高曰「空羅枉苦、何由可脫。」高令作金光明齋懺七日懇誠、燾乃夢見其祖及父<sup>196</sup>執劍列威曰、「何故信讒、枉疑太子。」燾驚覺、大集群臣、說所<sup>197</sup>告夢、諸臣咸言太子無過、實如皇靈降誥。燾於太子、無復疑焉、蓋高誠感之力也。因下書曰「朕承祖宗重光之緒、思闡鴻基、恢隆萬代、武功雖昭<sup>198</sup>而文教未暢、非所以崇太平之治也。今<sup>199</sup>城內安逸、百姓富昌、宜定制度為萬代<sup>200</sup>之法。夫陰陽有往復、四時有代序、授子任賢、安全相付、所以休息疲勞、式固長久、古今不易之令典也。可令皇太子副理萬機、總統百揆、更舉賢良、以備列職。擇人授任而黜陟之。」其朝士庶民皆稱臣於太子。

于時、崔寇先得寵於燾、恐晃篡政、有奪威權。又譖云「太子前事實有謀心、但結高公 道術、故令先帝降夢、如此物論、事跡難明。若<sup>201</sup>不早除、必為巨害。」燾納之、即勅收高。於太平五年九月十五日、縊於平城之隅、太子又幽殺之、即宋元嘉之二十二年也。爾夜門人莫知其死、忽有光明繞塔入房、其光聲曰「吾其已逝、弟子等崩赴屍所、請告遺累。」言畢、高眼稍開、汗通香起、便坐謂曰「大法應化、隨緣盛衰。盛衰在迹、理恒湛然。但念汝等不久復當如我耳、汝等死後、法當更興、善自修心、無令中悔。」言已便臥而絕、崔皓於此縱以姦心、每與帝言、恒加非毀。以佛法無益於政、有傷民利、勸令廢之。

後太武至長安入僧寺、見有弓盾。帝怒誅寺僧、皓因進說、盡殺沙門、

<sup>193</sup> 「燾所仗信……天師」、麗本ナシ。

<sup>194</sup> 「楷」、麗本「楷燾所仗信道士寇謙之與皓歎狎遂奏拜謙位稱天師」

<sup>195</sup> 「暨」、麗本「既」。

<sup>196</sup> 「父」、麗本「父皆」。

<sup>197</sup> 「所」、麗本「神」。

<sup>198</sup> 「昭」、盧本「照」。

<sup>199</sup> 「今」、麗本「今者」。

<sup>200</sup> 「代」、麗本「世」。

<sup>201</sup> 「若」、麗本「若事」。

焚經毀像、勅留臺下四方僧寺有者、依長安法除之。道士寇謙不從其毀。苦與皓爭、皓拒之。謙謂皓曰「卿從今年受戮滅門矣。」熏惑其言、以太平七年、遂普滅佛法。分軍四出、燒掠寺舍、統內僧尼無少長坑之、其竄逸者、捕獲梟斬。

有沙門慧始、甚有神異。昔赫連昌破長安、始被白刃、而體不傷、五十餘年未嘗寢臥。跣行泥塗、初不污足、而色逾鮮白、世號「白足和上」、死十餘年身相如在。初入深山、習行蘭若、太平之末<sup>202</sup>方知滅法、始<sup>203</sup>聞之、乃於元會之日杖錫宮門。有司奏云「有一道人、足白於面、云欲入見。」屬依軍法斬而不傷、遂至殿庭、熏大怒、自以所佩劍斫之、體無餘異。時北園養虎、勅以始飴之、虎皆潛伏、終不敢視、試以天師近檻、虎輒鳴吼、熏方知佛化高尊、黃老之所不及。即延始入殿、頂禮足下、悔其僭咎<sup>204</sup>、始為說法、明辯因果。熏於是大生愧懼、遂感瘡<sup>205</sup>疾、通身發瘡、痛苦難忍。群臣議曰、崔皓邪佞、毀害佛僧、陛下所患、必由於此。于時、崔寇二人次發惡疾、熏惟過由於彼。以太平十一年乃載皓於露車、官使十人於車上便<sup>206</sup>尿其口、行數里、不堪困苦。又生埋出口而尿之、自古三公戮辱、未之過此之甚。遂誅諸姻親門族都盡、宣下國中興復正法。俄而熏崩、孫濬襲位、大弘佛事、即高宗文成<sup>207</sup>皇帝是也。見『後魏書』及『十六國春秋』・『高僧傳』等。

### 宋太宗文皇帝朝會與群臣論佛事第七<sup>208</sup>

文帝即宋武第三子也。聰睿英博、雅稱令達、在位三十年。嘗以暇日從容而顧<sup>209</sup>侍中何尚之・吏部羊玄保曰「朕少來讀經、不多比日、彌復無暇。三世因果未辨厝懷、而復不敢立異者、正以卿輩時秀、率所敬信也。范

<sup>202</sup> 「末」、盧本「人」。

<sup>203</sup> 「始」、麗本「慧始」。

<sup>204</sup> 「僭咎」、麗本「愆咎」。

<sup>205</sup> 「瘡」、盧本「勵」。

<sup>206</sup> 「便」、麗本「更」。

<sup>207</sup> 「成」、底本・盧本「武」、麗本により改めた。

<sup>208</sup> 「朝會與群臣論佛事第七」、麗本「集群臣論佛理治致太平事四」。

<sup>209</sup> 「顧」、麗本「顧問」。

泰・謝靈運常言、六經典文、本在濟俗、為政必求、性靈真奧、豈得不以佛理為指南耶。近見顏延之『析達性論』・宗炳『難白黑論』、明佛法汪汪、尤為名理、並足開獎人意。若使率土之濱皆淳此化、則朕坐致太平矣、夫復何事。」尚之對曰「悠悠之徒多不信法、以臣庸弊、更荷褒拂、非所敢當。至如前代群英<sup>210</sup>、則不負明詔矣。中朝已遠、難復盡知。渡江已來、則王道・周顗・庾亮・王濛・謝尚・郗超・王坦・王恭・王謐・郭文・謝敷・戴逵・許詢、及亡高祖兄弟、及王元琳昆季・范汪・孫綽・張玄・殷顗等、或宰輔之冠蓋、或人倫之羽儀、或置情天人之際、或抗跡煙霞之表、並稟志歸依、厝心歸信。其間比對、則蘭護開潛、深遁崇邃、皆亞迹黃中、或不測之人也。慧遠法師嘗云＜釋氏之化、無所不可。適道固自教源、濟俗亦為要務。＞竊尋此說有契理奧。若使家家奉戒、則罪息形<sup>211</sup>清。陛下所謂坐致太平、誠如聖旨。」羊玄保進曰「此談蓋天人之際、豈臣所宜預。竊恐秦楚論強兵之事、孫吳盡吞併之術、將無取於此也。」帝曰「此非戰國之具、良如卿言。」尚之曰「夫禮隱逸、則戰士怠、貴仁德、則兵氣衰。若以孫吳為志、苟在吞噬、亦無取堯舜之道、豈惟釋教而已哉。」帝曰「釋門有卿、亦猶<sup>212</sup>孔門之有季路、所謂惡言不入於耳也。」自是文帝致意佛經、及見嚴觀諸僧、輒論道義、屢延僧殿會、帝躬御地筵、同僧例飯。

時有竺道生法師、學<sup>213</sup>出群品、英義獨拔、帝重之。曾<sup>214</sup>述生頓悟義、沙門僧弼等皆設巨難、帝曰「若使逝者可興、豈為諸君所屈。」時顏延之著『離識論』、帝命嚴法師辯其同異、往返終日。帝笑曰「公等今日無愧支許之談也云云。」見<sup>215</sup>僧史傳。

### 魏明帝登極明佛道對論敘先後事第八<sup>216</sup>

<sup>210</sup> 「英賢」、麗本「群英」。

<sup>211</sup> 「形」、麗本「刑」。

<sup>212</sup> 「猶」、麗本「由」。

<sup>213</sup> 「學」、麗本「秀」。

<sup>214</sup> 「曾」、麗本「嘗」。

<sup>215</sup> 「見」、麗本「見諸」。

<sup>216</sup> 「明佛道對論敘先後事第八」、麗本「召沙門道士對論敘佛道先後事五」。



元魏君臨、凡一十七帝一百七十九年、興顯佛法<sup>217</sup>教、不可勝言。惟太武在位五六年中屏除佛法、自餘光顯、具彰魏史、略陳相狀、以成信重。

獻文即位、興皇元年、於五級大寺、太祖已下、五帝鑄像。五軀各長一丈六尺、用金二十五萬斤。正光元年、明帝加朝服、大赦天下。請僧尼・道士・女官等殿前齋訖、侍中劉勝宣勅。請法師等與道士論議、以釋弟子疑網。時清通<sup>218</sup>觀道士姜斌與融覺寺法師曇謨最對論。

帝曰「佛與老子同時以不。」姜斌曰「老子西入化胡、佛時以充侍者、明是同時。」法師曰「何以知之。」斌曰「案『老子開天經』、是以得知。」法師曰「老子當周何王・幾年而生。周何王・幾年西入。」斌曰「當周定王即位三年、乙卯之歲、於楚國陳郡・苦縣・厲鄉・曲仁里、九月十四日夜子時生、周<sup>219</sup>簡王四年丁丑歲、事周為守藏吏、簡王十三年遷為太史。至敬王元年庚辰之<sup>220</sup>歲、年八十五、見周德凌遲、遂與函<sup>221</sup>關令尹喜、西入化胡、斯足明矣。」法師曰「佛以周昭王二十四年四月八日生、穆王五十二<sup>222</sup>年二月十五日滅度。計入涅槃後經三百四十五年、始到定王三年老子方生、生已年八十五、至敬王元年、凡經四百二十五年。始與尹喜西遁、據此則知<sup>223</sup>年代<sup>224</sup>懸殊、無乃謬乎。」斌曰「若佛生周昭王之時、出何文記。」法師曰「『周書異記』・『漢法本內傳』並有明文。」斌曰「孔子既是制法聖人、當時於佛迥無文記、何耶。」法師曰「仁者識同管窺、覽不弘遠。案孔子有三備卜經、謂天地人也、佛之文言出於<sup>225</sup>中備、仁者幸自披究、不有此迷。」斌曰「孔子聖人、不言而識<sup>226</sup>、何假卜乎。」法師曰「惟佛是眾聖之王、四生之首、達一切含靈・前後二際・吉凶終始、不

<sup>217</sup> 「法」、麗本ナシ。

<sup>218</sup> 「通」、麗本「道」。

<sup>219</sup> 「周」、麗本「至周」。

<sup>220</sup> 「之」、麗本ナシ。

<sup>221</sup> 「函」、底本・盧本「散」、麗本により改めた。

<sup>222</sup> 「二」、麗本「三」。

<sup>223</sup> 「則知」、麗本ナシ。

<sup>224</sup> 「代」、麗本「載」。

<sup>225</sup> 「於」、麗本「在」。

<sup>226</sup> 「識」、麗本「識知」。

假卜觀。自餘小聖雖曉未然之理、必籍著龜以通靈卦也。」

時侍中尚書令元叉宣勅語「道士姜斌論無宗旨、宜下席。」又問『『開天經』何處得來。是誰所說。』即遣中書侍郎魏收・尚書郎祖瑩等、就觀取經、帝令議之。太尉丹陽王蕭綜・太傅李寔・衛尉卿許伯桃・吏部尚書邢巒・散騎常侍溫子昇等一百七十人、讀訖奏云「老子只<sup>227</sup>著五千文、更無言說、臣等所議、姜斌罪當惑眾、帝加斌極刑。」時三藏法師菩提流支極<sup>228</sup>諫乃止、配徙馬邑。

### 梁武帝捨事道法事第九<sup>229</sup>

梁高祖武皇帝、年三十四登位、在政四十九年。雖億兆務殷、而卷不釋手。內經外典、罔不厝<sup>230</sup>懷、皆為訓解、數千餘卷。而儉約自節、羅綺不緣<sup>231</sup>、寢處虛閑、晝夜無怠。致有布被莞席、草屨葛巾。初臨大寶、即備斯事、日惟一食、永絕辛羶、自有帝王罕能及此。舊事老子、宗尚符圖、窮討根源、有同委<sup>232</sup>作。帝乃躬運神筆下詔捨道、文曰

「維天鑒三年四月八日、梁國皇帝蘭陵蕭衍、稽首和南十方諸佛・十方尊法・十方聖僧。伏見經云＜發菩提心者、即是佛心。其餘散<sup>233</sup>善、不得為喻、能使眾生出三界之苦門。入無為之勝路。＞故如來漏盡、智凝成覺、至道通機、德圓最聖。發慧炬以照迷、鏡法流以澄垢、啟瑞迹於天中、爍靈儀於像外、度群迷於欲海、引含識於涅槃、登常樂之高山、出愛河之深際。言乖四句、語絕百非、應迹娑婆、王宮誕相。步三界而為尊、普大千而流照。但以機心淺薄、好生厭怠、遂乃湛說圓常、亦復潛輝鵠<sup>234</sup>樹。闍

<sup>227</sup> 「只」、麗本「止」。

<sup>228</sup> 「極」、麗本ナシ。

<sup>229</sup> 「梁武帝捨事道法事第九」、麗本「梁高祖先事黃老後歸信佛下勅捨奉老子事六」。

<sup>230</sup> 「厝」、盧本「歷」。

<sup>231</sup> 「緣」、麗本「衣」。

<sup>232</sup> 「委」、麗本「妄」。

<sup>233</sup> 「散」、麗本「諸」。

<sup>234</sup> 「鵠」、麗本「鶴」。

王滅罪、婆藪除殃。若不逢值<sup>235</sup>大聖法王、誰能救接。在迹雖隱、其道無虧。弟子比經<sup>236</sup>迷荒、耽事老子、歷葉相承、染此邪法、習因善發、棄迷知返<sup>237</sup>。今捨舊醫、歸憑正覺、願使未來生世童男出家、廣弘經教、化度含識、同共成佛。寧在正法中長淪惡道、不樂依老子教暫得生天、涉大乘心、離二乘念、正願諸佛證明、菩薩攝受、弟子蕭衍和南。」

于時、帝與道俗二萬人、於重雲殿重閣上、手書此文、發菩提心。至四月十一日又勅門下「大經中說道有九十六種、惟佛一道是於正道、其餘九十五種名為邪道、朕捨邪外以事正內。諸佛如來、若有公卿能入此誓者、各可發菩提心、老子・周公・孔子等、雖是如來弟子、而化迹既邪、止是世間之善、不能革凡成聖、其公卿百官侯王宗族、宜反偽就真、捨邪入正。故經教『成實論』云、若事外道心重、佛法心輕、即是邪見。若心一等、是無記性、不當善惡。若事佛心強、老子心弱者、乃是清信。言清信者、清是表裏俱淨、垢穢惑累皆盡、信是信正不信邪、故言清信。佛弟子、其餘諸信、皆是邪見、不得稱清信也。」門下速施行。

至四月十四<sup>238</sup>日、侍中安前將軍丹陽尹邵陵王上啟云

「臣綸聞如來嚴相、巍巍架于有頂、微妙色身、蕩蕩顯乎無際。假金輪而啟物、託銀粟以應凡。砥波若之利刀、收涅槃之妙果、汎生死之苦海、濟常樂於彼岸。故能降慈悲雲、垂甘露雨。七處八會、教化之義不窮、四諦五時、利益之方無盡。並汎冰清日盛、霧豁雲除、燭火翳光、塵熱自靜。可謂入俗化於蒙底、出世冥此真如。使稠林邪徑之人、景法門而無倦、渴愛聾瞽之士、慕探蹟而知迴。道樹始於迦維、德音盛乎京洛。恒星不見、周鑒娠徵、滿月圓姿、漢感宵夢。五法用傳、萬德方兆、華俗潛改<sup>239</sup>、競扇高風。資此三明、照迷途之失、憑茲七覺、拔長夜之苦。

屬值皇帝菩薩、應天御物、負宸臨民、含光宇宙、照清海表、垂無礙辯、以接黎庶。以本願力攝受眾生、故能隨方逗藥、示權因顯。崇一乘之旨、

<sup>235</sup> 「值」、麗本「遇」。

<sup>236</sup> 「比經」、麗本「經值」。

<sup>237</sup> 「返」、麗本「反」。

<sup>238</sup> 「四」、麗本「七」。

<sup>239</sup> 「改」、麗本「故」。

廣十地之基、是以萬邦迴向、俱稟正識。幽顯靈祇、皆蒙誘濟。人興等覺之願、物起菩提之心、莫不翹勤歸宗之境、悅懌還源之趣、共保慈悲、俱修忍辱、所謂覆護饒益、橋梁津濟者矣<sup>240</sup>。道既光被、民亦化之。於是應真飛錫、騰虛接影、破邪外道、堅持正法<sup>241</sup>、伽藍精舍寶刹相望、講會傳經德音盈耳。

臣昔未達理源、稟承外道、如欲植<sup>242</sup>甘果翻種苦栽、欲除<sup>243</sup>渴乏反趣鹹水。今啟迷方、粗知歸向、受菩薩大戒、戒節身心、捨老子之邪風、入法流之真教、伏惟<sup>244</sup>天慈、曲垂矜許、謹啟。」

至四月十八日、中書舍人臣任孝恭宣勅云「能改迷入正、可謂是宿植勝因、宜加勇猛也。」

#### 北齊高祖文宣皇帝<sup>245</sup>廢道事第十<sup>246</sup>

昔金陵道士陸修靜者、道門之望。在宋齊兩代、祖述三張、弘衍二葛。郗張之士、封門受錄、遂妄加穿鑿、廣制齋儀、糜費極繁、意在王者遵奉。會梁祖啟運、下詔捨道、修靜不勝其憤、遂與門人及邊境亡命、叛入北齊。又傾散金玉、贈諸貴遊、託以襟期、冀興道法。帝惑之也、於天保六年九月、乃下勅召諸沙門與道士學達者十人、親自對校。于時道士咒<sup>247</sup>諸沙門衣鉢、或飛或轉、咒諸梁木、或橫或豎。沙門曾不學方術、默無一對、士女擁開、貴賤移心、並以靜徒為勝也。諸道士等雀躍騰倚、魚睨雲漢。高談自矜、誇衒其<sup>248</sup>道術、仍又唱言曰「神通權設、抑挫強禦、沙門現一、我當現二。今薄示小術、並辭退屈、事亦可見。」

帝命上統法師與靜角試、上曰「方術小伎、俗儒恥之、況出家人也。雖

<sup>240</sup> 「矣」、麗本ナシ。

<sup>241</sup> 「法」、麗本「因」。

<sup>242</sup> 「植」、麗本「須」。

<sup>243</sup> 「除」、盧本「求」。

<sup>244</sup> 「惟」、麗本「願」。

<sup>245</sup> 「帝」、麗本「帝下勅」。

<sup>246</sup> 「事第十」、麗本「教事七」。

<sup>247</sup> 「咒」、麗本「祝」、下同。

<sup>248</sup> 「其」、麗本ナシ。

然天命令拒、豈得無言。可令最下坐僧對之。」即往尋覓有僧佛鑄、一名曇顯者、不知何許<sup>249</sup>人、遊行無定、飲噉同俗、時有放言、標悟宏遠。上統知其深量、私與之交。于時名僧盛集、顯居行末<sup>250</sup>、酣酒大醉、昂兀而坐。有司不敢召之、以事告於上統。上統曰「道士祭酒、常道所行、止是飲酒道人可共言耳、可扶舉將來。」於是合眾皆憚、而怯<sup>251</sup>上統威權、不敢有諫、乃兩人扶顯、令上高座。便立而含笑曰「我飲酒大醉、耳中有所聞云＜沙門現一、我當現二＞、此言虛實。」道士曰「有實。」顯即翹足而立「我以<sup>252</sup>現一、卿可現二。」各無對之。顯曰「向咒諸衣物飛颺者、我故開門試卿術耳。」命取稠禪師衣鉢咒之、諸道士一時奮發共咒、一無動搖。帝勅取衣、乃至十人牽舉不動。顯乃令以衣置諸梁木、又令呪之、卒無一驗。道士等相顧無賴、猶以言辯自高、乃曰「佛家自號為內、內則小也、詔我道家為外、外則大也。」顯應聲曰「若然、則天子處內、定小百官矣。」靜與其屬緘口無言。帝目驗臧否、便下詔曰「法門不二、真宗在一、求之正路、寂泊為本。祭酒道者、世中假妄、俗人未悟、仍有祇崇。麴[麥\*薛]是味、清虛焉在。瞿脯斯甘<sup>253</sup>、慈悲永隔。上異仁祠、下乖祭典、皆宜禁絕、不復遵事。」頒<sup>254</sup>勅遠近、咸使知聞、其道士歸伏者、並付昭玄大統上法師、度聽出家。未發心者、可令染剃、爾日斬首者非一。自謂神仙者、可上三爵臺、令其投身飛逝、皆碎屍塗地、偽妄斯絕。致使齊境國無兩信、迄于隋初漸開其術、至今東川此宗微末、無足抗言矣。

帝諱詳、即魏<sup>255</sup>丞相王歡之第二子也。嫡兄澄、怠慢為奴所害、詳襲其位、代為相國。魏將曆窮、詳築壇於南郊、筮遇大橫、大吉、漢文之卦也。乃鑄金像、一瀉而成、魏收為禪文、魏帝署之、即受其禪、為大齊也。凡

<sup>249</sup> 「許」、麗本ナシ。

<sup>250</sup> 「行末」、麗本「末坐」。

<sup>251</sup> 「怯」、盧本「法」。

<sup>252</sup> 「我以」、麗本「云我已」。

<sup>253</sup> 「甘」、麗本「甜」。

<sup>254</sup> 「頒」、麗本「領」。

<sup>255</sup> 「魏」、麗本「元魏」。

所行履、不測其愚智。委政僕射楊遵彥、帝大起佛寺、僧尼滿<sup>256</sup>諸州縣<sup>257</sup>、冬夏供施、行道不絕。時稠禪師箴<sup>258</sup>帝曰「檀越羅刹、殆臨水自見。」帝從之觀、群羅刹在後、於是遂不食肉。禁鷹鷄、去官漁屠、辛葷悉除、不得入市。帝恒坐禪、竟日不出、禮佛行繞、其疾如風。受戒於昭玄大統法上、面掩地、令上履髮而授焉。

先是帝在晉陽、使人騎駝、勅曰「向寺取經函。」使問所在、帝曰、「任駝出城。」及出奄如夢至一山、山半有佛寺、群沙彌遙曰「高詳託駝來。」便引見。一老僧拜之曰「高詳作天子何如。」曰「聖明。」曰「爾來何為。」曰「取經函。」僧曰「詳在寺懶讀經、令北行東頭與之。」使者反<sup>259</sup>命。初帝至谷口木井佛寺、有捨身癡人、不解語。忽謂帝曰「我去、爾後來。」是夜癡人死、帝尋崩於晉陽<sup>260</sup>。

著作王邵曰「釋氏非管窺所及、率爾妄言之。」引列子述商、太宰問孔子聖人事。又云「黃帝夢遊華胥氏之國、在佛神遊而已。佛<sup>261</sup>之所言<sup>262</sup>、蓋欲柔伏人心、故多寓言以方便、不知是何神變、浩蕩之甚乎。說<sup>263</sup>人身善惡、世事因緣、以慈悲喜捨、常樂我淨、書辯至精、明如日月、非正覺孰能證之。凡在順首、莫不歸命。達人則慎其身口、修其慧定、平等解脫、究竟菩提。及僻者為之、不能通理、徒務費竭財力、功利煩濁、猶六經皆有所失、未之深也已矣。」其<sup>264</sup>事如此、依『齊書』錄之。

集佛道論衡實錄卷第一

<sup>256</sup> 「滿」、麗本「溢滿」。

<sup>257</sup> 「縣」、麗本ナシ。

<sup>258</sup> 「箴」、麗本「問箴」。

<sup>259</sup> 「反」、麗本「返」。

<sup>260</sup> 「陽」、麗本「陽焉」。

<sup>261</sup> 「佛」、麗本「此」。

<sup>262</sup> 「言」、麗本「言髣髴於佛石符姚世經譯遂廣」。

<sup>263</sup> 「說」、麗本「其說」。

<sup>264</sup> 「其」、麗本「事」。

集古今佛道論衡實錄卷第二<sup>265</sup>

唐釋道宣撰

周高祖登朝論屏佛法安法師上論事第十一<sup>266</sup>周祖平齊集論毀法遠法師抗詔事第十二<sup>267</sup>周祖東巡滅法已久任道林請興佛事第十三<sup>268</sup>周天元皇帝納王明廣表開佛法事第十四<sup>269</sup>隋高祖下詔述絳州天火燒<sup>270</sup>焚老君像事第十五<sup>271</sup>隋兩帝事宗 佛理稟受歸戒事第十六<sup>272</sup>周高祖武皇帝將滅佛法有安法師上論事第十<sup>273</sup>一

周武初信<sup>274</sup>佛、後以讖緯<sup>275</sup>云黑衣當王、遂重於道法、躬受符籙<sup>276</sup>。玄冠黃褐內常服禦、心忌釋門志欲誅殄、而患信佛者多未敢專制。有道士張寶、譎詐罔上私達其策、潛進<sup>277</sup>李宗、排棄釋氏、又與前僧衛元嵩唇齒相赴<sup>278</sup>、共相狙齏。帝納其言、欲親覘視<sup>279</sup>經過、貶量佛失。召僧入內、七宵行道。時既密知、各加懇到。帝亦同僧七夕<sup>280</sup>不寐、為僧讚唄并諸法事、既無過犯、無何而止。天和四年、歲在己丑、三月十三<sup>281</sup>日、勅召有德眾

---

<sup>265</sup> 「第二」、麗本「乙」。

<sup>266</sup> 「第十一」、麗本ナシ。

<sup>267</sup> 「第十二」、麗本ナシ。

<sup>268</sup> 「第十三」、麗本ナシ。

<sup>269</sup> 「第十四」、麗本ナシ。

<sup>270</sup> 「燒」、麗本ナシ。

<sup>271</sup> 「第十五」、麗本ナシ。

<sup>272</sup> 「第十六」、麗本ナシ。

<sup>273</sup> 「十」、麗本ナシ。

<sup>274</sup> 「信」、麗本「信於」。

<sup>275</sup> 「緯」、麗本ナシ。

<sup>276</sup> 「籙」、麗本「錄」。

<sup>277</sup> 「進」、麗本「集」。

<sup>278</sup> 「赴」、麗本「副」。

<sup>279</sup> 「視」、麗本ナシ。

<sup>280</sup> 「夕」、麗本「名」。

<sup>281</sup> 「三」、麗本「五」。

僧、名儒道士、文武百官二千餘人昇正殿。帝御坐、量述三教優劣廢立。眾議紛紜、情見乖咎、不定而散。至其月二十日、依前集論、是非更廣、莫簡帝心、索然又散。至四月初、又依前集、令極言陳理。又勅司隸大夫甄鸞、詳佛道二教、定其深淺。鸞乃上『笑道論』三卷、用笑三洞之名及『笑經』、稱三十六部、文極據明、事多商<sup>282</sup>榷。至五月十五<sup>283</sup>日。帝大集群臣詳鸞上論、以為傷蠹道士、即於殿庭焚之。

有道<sup>284</sup>安法師、慧解洞達、內外淹通、時號釋宗、眾標僧傑、帝所信重、常侍對揚、僉議攸同、三教齊立、惟安抗辯。教止三<sup>285</sup>焉、言出難尋、著文易顯、乃撰『二教論』十二篇。初歸宗顯本篇、略云、「夫萬化本於無生、三才兆於無始。然則無生無始、物之性也、有化有生、人之聚也。聚雖一體、而形神兩異、散雖質別、而心數不忘。故救形之教、教稱為外、濟神之教、教稱為內。是以智論有內外兩徑、『仁王』辯內外兩論、『方等』明內外兩律、『百論』言內外二道。若通論內外、則該彼<sup>286</sup>華戎、若局命此方、則可云儒釋。釋教為內、儒教為外、道無別教、宗結儒流。備彰前典、非為誕謬、詳覽載籍、尋討根源。教惟有二、何得有三。何者、昔玄古樸素、墳典之誥未弘、淳風稍離、丘索之文乃著。故包論七典、統括九流、咸為軍國之謨、並是修身之術。若派而別之、則應為九教、今總而合之、則同屬儒宗。論其官也、各王朝之一職、談其籍也、並皇家之一書。何欲於一化之內、令<sup>287</sup>九流爭川、大道之世、使小成競辯。豈不上傷皇極莫二之風、下開拘放鄙蕩之弊。真所謂巨蠹鴻猷、眩曜朝野矣。」

「言佛教者、窮理盡性之格言、出世入真之正轍。論其文則部分十二、語其旨則四種悉檀。理妙域中、固非名號所及、化檀<sup>288</sup>像表、又非情知<sup>289</sup>所尋。至於遣累落筌、陶神盡照、近超生死、遠證泥洹。播闡五乘、接群

<sup>282</sup> 「商」、麗本「揚」。

<sup>283</sup> 「五」、麗本ナシ。

<sup>284</sup> 「道」、麗本ナシ

<sup>285</sup> 「三」、麗本「二」。

<sup>286</sup> 「彼」、麗本「被」。

<sup>287</sup> 「令」、麗本「合」。

<sup>288</sup> 「檀」、麗本「擅」。

<sup>289</sup> 「知」、麗本「智」。



機之深淺、該明六道、辯善惡之昇沈。復期出世、而理無不周、迹<sup>290</sup>及王化、而事無不盡。能博能要、不質不文、自非天下之至慮、孰能與斯教哉。雖復儒道千家、農墨百氏、取捨驅馳、未及其度者也。夫厚生情篤、身患之誠遂興、不悟遷流、逝川之歎乃作、並是域內之至談、非踰方之巨唱也。何者、推色盡於極微、老氏之所未辯、究心窮於生滅、宣尼又所不<sup>291</sup>言、可謂瞻之似盡、而察之未極者也。經曰、分別色心、有無量相、非諸聲聞緣覺所知、況凡夫識想、安得齊於佛聖乎。經云、＜無以日光等彼螢火＞、斯喻極也。若夫以齊而齊不齊者<sup>292</sup>、未曰齊也。余聞善齊天下者、以不齊而齊天下者也、何須夷嶽實淵、然後方平。續鳧截鶴於焉始等、此蓋狷夫之野議、豈達士之貞觀乎、故諺曰、紫實昧朱、狂<sup>293</sup>斯濫哲。請廣其類、上至天子、下至庶人、莫不資色心以成軀、稟陰陽而作<sup>294</sup>體。不可以色心是等、而便混以智愚、陰陽義齊、則使同之<sup>295</sup>貴賤。此之不可、至理皎然、雖強齊之、其義安在。」餘文多不載。

又<sup>296</sup>史記云、「李老西邁、止及流沙」。『化胡』・『西昇』等經不足窮究。漢末三張、方行其道惑亂天下、備見史書。故李膺『蜀記』云、張陵避瘡、病<sup>297</sup>於丘社中、得呪鬼術書、遂解鬼法。後為大蛇所噉、弟子等妄述昇天。其子衡、衡子魯、還習其道、自號三師。陵為天師、衡為係師、魯為嗣師、咸以鬼道以<sup>298</sup>愚俗。『後漢書』云、張魯初為督義司馬、遂掩殺漢中太守蘇固、斷絕斜谷。殺漢使者、專據漢中三十餘載、戴黃巾、服黃巾、造作符書、以惑百姓。受其道者、出米五斗、世號米賊。初來學者、名為鬼卒、後云祭酒、各領部眾、夷俗信向。朝廷不能討、遂就拜魯<sup>299</sup>鎮夷中郎將、

<sup>290</sup> 「迹」、麗本「迹」。

<sup>291</sup> 「不」、麗本「未」。

<sup>292</sup> 「者」、麗本ナシ。

<sup>293</sup> 「狂」、盧本「柱」。

<sup>294</sup> 「作」、麗本「化」。

<sup>295</sup> 「之」、麗本「之於」。

<sup>296</sup> 「又」、麗本「又曰」。

<sup>297</sup> 「瘡病」、麗本「病瘡」。

<sup>298</sup> 「以」、麗本「以化」。

<sup>299</sup> 「魯」、麗本「魯為」。

通其貢獻。至獻帝二十年、曹操征而破之。初漢末鬼音、黃衣當王、於是張角・張魯等、始服黃衣、曹氏受命、以黃代赤、故年號黃初。黃巾之賊、至是始平、元魏寇謙、稍稍還服。今大道之世、風化宜同小巫、巾色宜改復古。且老子大賢絕棄貴尚、又是朝臣、服色寧異。古有專經之學、而無服象之殊、黃巾布衣、出自張氏。夫聖賢作訓、弘裕溫柔、鬼神嚴厲、動為寒暑。老子誠味、祭酒咸飲、張制鬼服、黃衣則齊。真偽皎然、急緩可見。故略引張氏數條妄作、用懲未聞。

一初言禁經止價者、玄光論云、道家諸經、制雜凡意、教迹邪險、是故不經。但得金帛、便與其經、貧者造之、至死不覩、貪利無慈、逆莫過此。又其方術穢濁不清、乃有扣齒為天鼓、咽唾<sup>300</sup>為醴泉、馬屎為靈薪、老鼠為芝藥。資此求道、焉能得乎。

二或妄稱真道者、『蜀記』云、張陵入鶴<sup>301</sup>鳴山、自稱天師、漢嘉平末為蟒所噉。子衡奔出、假設權方、用表靈化、生糜鵠足、置石崖頂。到光和元年、遣使告曰、正月七日、天師昇玄。都米民山、獠遂因妄傳、敗死利生、逆莫過此之甚。

三或合氣釋罪者、妄造黃書、呪癩無端、乃云開命門、抱<sup>302</sup>真人、三五七九、天羅地網、士女溷亂、不異禽獸、用銷災禍、其可然乎。

四或挾道作亂者、黃巾鬼道、毒流漢室、孫恩求仙、禍延皇晉。破國害俗、惑亂天下、五千道德、全不許之。

五或章書伐德者、遷達七祖、乞免擔沙、橫費紙筆、奏章太上。又云、戊辰之日、上必不達、不達太上、則生民枉死。嗚乎哀哉。

六或畏鬼帶符者、符云、左佩太極章、右佩昆吾鐵、指日則停暉、擬鬼千里血、若受黃書<sup>303</sup>赤章、即是靈仙<sup>304</sup>。

七或制約輸課者、『蜀記』云、受其道者、輸米肉布絹、器物紙筆、薦

<sup>300</sup> 「唾」、麗本「涎」。

<sup>301</sup> 「鶴」、麗本「鵠」。

<sup>302</sup> 「抱」、麗本「挖」。

<sup>303</sup> 「書」、麗本ナシ。

<sup>304</sup> 「仙」、麗本「仙訣」。

席五綵。後生邪濁、増立米代<sup>305</sup>。

八或解除墓門者、左道餘氣也。墓門解除、春<sup>306</sup>秋二分、祭竈礼<sup>307</sup>社、冬夏兩至、祠祀同俗。先受治籙<sup>308</sup>、兵符社契、皆言軍將吏兵、都無教誡之義。

九或妄度苦厄者、立塗炭齋、事起張魯。驢輾泥中、黃土塗面、摘頭懸櫛、埏<sup>309</sup>埴使熟。至義熙初、道士王公旗省去打拍、吳陸修靜猶泥額、反縛懸頭而已。資此度厄、何癡之甚。

十或夢中作罪者、夢見先亡、輒云變怪、召鬼神兵吏、奏章斷之。

十一或輕作凶侯者、造黃神越章、用持殺鬼、又造赤章、用持殺人。趣悅世情、不計殃罪。陰謀懷嫉、凶邪之甚。

斯並三張之鬼法、非老子之本懷、頃世濫行、罕有覺者。論成上之、帝覽安論、以問臣下、僚宰尋校、莫敢排斥、當時廢立遂寢、誠所推焉。

乃經六載、至建德三年、歲在甲午、五月十七日、遂普滅佛道二宗。別置通道觀、簡釋李有名者、百二十員、並著衣冠、名為通道觀學士。

時有蜀地新州願果寺僧猛<sup>310</sup>法師、不遠千里躬詣魏闕、雖面陳至理、邪正未分、而帝滅毀之。情已決、乃著論、十有八條難道本宗、又以三科釋其前執。

其詞略云、猛<sup>311</sup>以世之濫述老子・尹喜西度、化胡出家、老子為說經誡、令尹喜作佛教化胡人、又稱鬼谷先<sup>312</sup>生、撰『商山四皓注』。未善尋者、莫不信從、以為口實。異哉此傳、君子尚不可罔、況貶大聖者乎。今具陳此說、非直人世差錯、假託名字、亦乃言不及義、翻辱老子者乎<sup>313</sup>。勝人達士不出此言、將是無識異道、誇競佛法、假託鬼谷四皓之名、附尹喜傳後、

<sup>305</sup> 「代」、麗本「民」。

<sup>306</sup> 「春」、興本「俗死受春」

<sup>307</sup> 「礼」、麗本「祀」。

<sup>308</sup> 「籙」、麗本「録」。

<sup>309</sup> 「埏」、底本・盧本「埏」、麗本により改めた。

<sup>310</sup> 「猛」、麗本「勗」。

<sup>311</sup> 「猛」、麗本「勗」。

<sup>312</sup> 「先」、麗本「仙」。

<sup>313</sup> 「者乎」、麗本「意者」。

作此異論、用迷昏俗。竊聞傳而不習、夫子不許妄作者、凶老君所誡、此之過<sup>314</sup>患增長三塗、宜應糾正、救其此失。然教有內外、用生疑假、人有賢聖、多迷本迹、故班固『漢書』品人九等。孔丘之徒為上上、類例皆是聖、李耳之儔為中上、類例皆是賢。何晏・王弼云、老未及聖、此則賢聖自分、優劣路顯、故魏文之博識<sup>315</sup>也。黃初三年、下勅告豫州刺史、老聃賢人未宜先孔子、不知魯郡為孔子立廟成未。漢桓帝不師聖法、正以嬖臣而事老子、欲以求福、良足笑也。此祠之興由桓<sup>316</sup>武皇帝以老子賢人、不毀其屋、朕亦以此亭當路、行來者輒往瞻視、而樓屋傾頽<sup>317</sup>、儻能壓人、故令修整。昨過視之、殊未整頓、恐小人謂此為神、妄作<sup>318</sup>禱祀、犯常禁、宜宣告吏民、咸使知聞。據斯以言、呈露久矣、愚惑者多、致有前弊、故著論焉。雖復上聞、終不見納。有猛法師者、氣調橫挺。抗言帝旨、詞頗激切、眾恐禍及其身、帝通容之、情無愧惡。

次有藹法師者、年德榮盛、道俗所歸、聞之歎曰、朱紫雜糅、狂哲交侵至矣、可使五眾流離、四生倒惑哉。又曰、餐周之粟、飲周之水、食樞懷音、寧無酬德。又<sup>319</sup>佛之弟子、豈可見此淪湑、坐此形骸、晏然自靜。徑來上表、引見登殿、舉手而言曰、來意有二、所謂報三寶慈恩、酬檀越厚德。援引卓明、從旦至午、交言支任、抗對如流、梗詞厲色、鏗然無撓。帝雖納其言、情決已定、遲疑不言。藹又進曰、釋李邪正、即事可<sup>320</sup>求、不煩聖慮、索鑊煮兩宗門人、不害者立可見矣。帝怯其言、乃<sup>321</sup>引出。

時宜州沙門道積者、次又出諫、不用其言、遂與同志七人、於彌勒像前不食禮懺、經於七日、一時同逝。藹入南山錫谷、自剖身肉布於石上、引

<sup>314</sup> 「過」、麗本「巨」。

<sup>315</sup> 「識」、麗本「悟」。

<sup>316</sup> 「桓」、麗本「桓帝」。

<sup>317</sup> 「頽」、麗本「頓」。

<sup>318</sup> 「作」、麗本「往」。

<sup>319</sup> 「又」、麗本「又為」。

<sup>320</sup> 「事可」、麗本「可事」。

<sup>321</sup> 「乃」、麗本「乃令」。

腸掛<sup>322</sup>樹、捧心而卒、有人尋之、於崖上見捨身偈三十餘行、其<sup>323</sup>後偈云、  
願捨此身已、早<sup>324</sup>令身自在。

法身自在已、在<sup>325</sup>在諸趣中。

隨有利益處、護法救眾生。

又復業應盡、有為法皆然。

三界皆無常、時來不自在。

他殺及自死、終歸如是處。

智者所不樂、業盡於今日。

### 周武平齊大集僧徒問以興廢慧遠法師抗詔事第十<sup>326</sup>二

周武帝以齊承光二年春、東平高氏召前修大德並赴殿集。帝昇御座、序廢立義云、朕受天命、寧一區宇、世弘三教、其風逾遠、考定至理、多愆陶化、今並廢之。然其六經儒教、久弘政術、禮義忠孝、於世有宜、故須存立。且自真佛無像、遙敬表心、佛經廣陳<sup>327</sup>、崇建圖塔、壯麗修造、致福極多、此實無情、何能恩惠、愚人嚮信、傾竭珍財、徒為引費、故須除蕩、故凡是經象皆毀滅之。父母恩重、沙門不敬、勃逆之甚、國法不容、並退還家、用崇孝始、朕意如此、諸大德謂理何如。

于時沙門大統等五百餘人、咸以王威震赫、諛諛難從、關內以除、義非孤立、眾各默然。下勅催答、並相顧無色、俛首垂淚。有慧遠法師、聲名光價、乃自惟曰、佛法之寄、四眾是依、豈以杜言、謂能通理。遂出對曰、陛下統臨大域、得一居尊、隨俗致詞、憲章三教。詔云、真佛無像、誠如天旨、但耳目生靈、賴經聞佛、藉像表真。今若廢之、無以興敬。帝曰、虛空真佛、咸自知之、未假經像。遠曰、漢明已前、經像未至、此土含生、何故不知虛空真佛。帝時無答。遠曰、若不藉經教、自知有法者、三皇已

<sup>322</sup> 「掛」、麗本「挂」。

<sup>323</sup> 「三十餘行其」、麗本ナシ。

<sup>324</sup> 「早」、麗本「速」。

<sup>325</sup> 「在」、麗本「自」。

<sup>326</sup> 「十」、麗本ナシ。

<sup>327</sup> 「陳」、麗本「歎」。

前、未有文字、人應自知五常等法。當時諸人何為、但識其母、不識其父、同於禽獸。帝又無答。遠曰、若以形像無情、事之無福、故須廢者、國家七廟之像、豈是有情、而妄相尊事。

帝不答此難、乃云、佛經外國之法、此國不須、廢而不用、七廟上代所立、朕亦不以為是、將同廢之。遠曰、若以外國之經非此用者、仲尼所說出自魯國、秦晉之地亦應廢而不行。又以七廟為非、將欲廢者、則是不尊祖考、祖考不尊、則昭穆失序、昭穆失序、則五經無用、前存儒教、其義安在。若爾、則三教同廢、將何治國。帝曰、魯邦之與秦晉、封域乃殊、莫非王者一化、故不類佛經。七廟之難、帝無以通。遠曰、若以秦魯同遵一化、經教通行者、震旦之與天竺、國界雖殊、莫不同在閭浮四海之內、輪王一化、何不同遵佛經、而今獨廢。帝又無答。

遠曰、詔云、並退<sup>328</sup>還家、崇孝養者、孔經亦云、立身行道、以顯父母、即是孝行、何必還家。帝曰、父母恩重、交資色養、棄親向疎、未成至孝。遠曰、若如來<sup>329</sup>旨、陛下左右、皆有二親、何不放之、乃使長役五年、不見父母。帝曰、朕亦依番上下、得歸侍奉。遠曰、佛亦聽僧冬夏隨緣修道、春秋歸家侍養、故目連乞食餉母、如來擔棺臨葬、此理大通、未<sup>330</sup>可獨廢。帝又無答、遠抗聲曰、陛下今恃王力、自在破滅三寶、是邪見人、阿鼻地獄不簡貴賤、陛下何得不怖。帝勃然作色大怒、直視於遠曰、但令百姓得樂、朕亦不辭地獄之<sup>331</sup>苦。遠曰、陛下以邪法化人、現種苦業、當共陛下同趣阿鼻、何處有樂可得。帝理屈、言前所圖意盛、更無所答。但云、僧等且還、有司錄取論僧姓字。

帝已行虐三年、關隴佛法誅除略盡、既克齊境、還准毀之。爾時魏齊東川佛法崇盛、見成寺廟出四十千、並賜王公充為第宅。五眾釋門減三百萬、皆復軍民、還歸編戶。融刮佛像、焚燒經教、三寶福財、簿錄入官、登即賞賜、分散蕩盡。帝以為得志於天下也、未盈一年、癘氣內蒸、身瘡外發、

<sup>328</sup> 「並退」、麗本「退僧」。

<sup>329</sup> 「來」、麗本「聖」。

<sup>330</sup> 「未」、麗本「不」。

<sup>331</sup> 「之」、麗本「諸」。

業<sup>332</sup>相已顯、無悔可銷、遂隱於雲陽宮。纔經七日、尋爾傾崩、天元 嗣曆、於東西二京立陟謁寺、置菩薩僧、用開佛化、不久帝崩、國運移革。

至隋高祖方始大通、如後所顯（注云<sup>333</sup>）。近見大唐吏部尚書唐臨『冥報記』云、外祖隋左僕射齊公、親見文帝、問死者還活人。云、初死見周武帝、云、為我相聞大隋天子、昔與我共食、倉庫玉帛、亦我之儲<sup>334</sup>、我今為滅佛法極受大苦、可為我作功德也。文帝出勅普及天下人出一錢、為之追福焉。

### 周<sup>335</sup>高祖巡鄴除殄佛法有前僧任道林上表請開法事第十<sup>336</sup>三

周建德六年十一月四日、上臨鄴宮新殿、內史宇文弼・上士李德林收上書人表。于時、任道林以表上之、上士<sup>337</sup>覽表曰、君二教也、聖主機辯、特難酬答、可思審之。對曰、主上<sup>338</sup>鋒辯、名流十方、林亦早聞、正以聞辯、故來得辯、無爽云云。乃引入上階御座西立。

詔曰、卿既上事、助匡治政、朕甚嘉尚、可條別自申、勿廣詞費。林乃上撫安<sup>339</sup>齊餘省減賦役事、帝備納之。又<sup>340</sup>曰、林原誓弘佛道、向且專論俗政、似欲諂附君人、其實無心護法。自釋氏弘訓、權應無方、智力高奇、廣宣正法、救茲五濁、特拔<sup>341</sup>三有。人中天上、六道四生、莫不歸依迴向、受其開悟。自漢至今踰五百載、王公卿士、遵奉傳通、及至大周、頓令廢絕。陛下治襲前王、化承後帝、何容偏於佛教、獨不師古。如其非善、先賢久滅、如言有益、陛下可行、廢佛之義、臣所未曉。

詔曰、佛生西域、寄傳東夏、原其風教、殊乖中國、漢魏晉世、似有若

<sup>332</sup> 「業」、麗本「惡」。

<sup>333</sup> 「注云」、麗本ナシ。

<sup>334</sup> 「之儲」、麗本「儲之」。

<sup>335</sup> 「周」、盧本「三周」。

<sup>336</sup> 「十」、麗本ナシ。

<sup>337</sup> 「上士」、盧本「事事」。

<sup>338</sup> 「主上」、麗本「上主」。

<sup>339</sup> 「撫安」、麗本「安撫」。

<sup>340</sup> 「又」、盧本「人」。

<sup>341</sup> 「特拔」、麗本「拔彼」。

無。五胡亂治、風化方盛。朕非五胡、心無敬事、既非正教、所以廢之。

奏曰、佛教東傳、時過七代、劉淵纂晉、元非中夏。以非正朔、稱為五胡、其漢魏晉世、佛化已弘、宋趙符燕、久習崇盛。陛下恥同五胡、盛修佛法、請如漢魏、不絕其宗。

詔曰、佛義雖廣、朕亦嘗覽、言多虛大、語好浮奢、罪到憲推過去、無福則指未來、事者無徵、行之多惑、論其勸善、未殊古禮、研其斷惡、何異俗律。昔嘗為廢、所以暫學、決知非益、所以除之。

奏曰、理深語大、非近情所測、時遠事高、寧小機欲辯。豈以一世之局見、而拒久遠之通議、封迷忽悟、不亦過乎。是以佛理極於法界、教體通於內外。談行、自他俱益、辯果、常樂無為、樹德、恩隆天地、授道、廣利無邊、見奇、則神通自在、布化、則萬國同歸、救度、則怨親等濟、慈愛、則有識無傷。戒除外惡、定止心非、慧照古今、智窮萬物。若家家行此、則民無不治、國國修之、則兵戈無用、今離不行、何處求益。因重奏曰、臣聞孝者、至天之道、順者、極地之養。所以通神明、光四海、百行之本、孰先此孝。昔世<sup>342</sup>道將傾、魏室崩壞、太祖奮威、補天夷難、創啟王業。陛下因斯鴻緒、遂登皇極、君臨四海、德加天下、追惟莫大、終身無報、何有信己心智、執固自解、倚恃爪牙、任縱王力。殘壞太祖所立寺廟、毀破太祖所事靈像、休廢太祖所奉法教、退落太祖所敬師尊。且父母床几、尚不敢損虧、況父之親事、輒能輕壞。國祚延促、弗由於佛、政治興毀、何關於法。豈信一時之慮、招萬世之譏。愚臣冒死、特為不可。

詔曰、孝道之義、寧非至極、若專守執、惟利一身、是使大智權方、反常合道。湯武伐主、仁智不非、尾生守信、禍至身滅。事若有益、假違要行、儻非合理、雖順必剪、不可護己一名、令四海懷惑。內<sup>343</sup>乖太祖、外<sup>344</sup>潤黔元、令沙門還俗、省侍父母、成天下之孝<sup>345</sup>、各各自活、不惱他人。使率土獲利、捨戈<sup>346</sup>從夏、六合同一、即是揚名萬代、以顯太祖、即孝之終

<sup>342</sup> 「世」、麗本「世大」。

<sup>343</sup> 「內」、麗本「外」。

<sup>344</sup> 「外」、麗本「內」。

<sup>345</sup> 「孝」、盧本「考」。

<sup>346</sup> 「戈」、盧本「戎」。



也、何得言非。

奏曰、若言壞佛有益、毀僧益民、昔太祖康日、高鑒萬理、智括千途、必佛法損他<sup>347</sup>、即尋除蕩、寧肯積年奉敬、興遍天下。又佛法存日、損處是何、自破已來、成何利潤、若實無益、寧非不孝。

詔曰、法非不孝、廢<sup>348</sup>興有時、道亦難准、制由上行、王者作則、縱有小利尚須休廢、況佛無益、理不可容。何者、敬事無徵、招感無効、自救無聊、何能益國。自廢已來、民役稍希、租調年增、兵師日盛、東平齊國、西定妖戈<sup>349</sup>、國安民樂、豈非有益。若事有益、太祖存日、屢嘗討齊、何不見獲、朕壞佛法、若是違害、亦可亡身。既平東夏、明知有益、廢之合理、義無更興。

奏曰、自國立政、惟貴於道、制化養民、寧高於德。止見道消國喪、未有兵強祚久、是以虐紂恃眾禍傾帝業、周武脩德福集皇基。夫羌<sup>350</sup>驕戰、遂至滅身、勾踐以道、危而更安、以此論之、何關壞佛退僧、方平東夏、直是毀佛、當此託定之時、偶然斯會、妄謂壞法有益。若爾、湯伐有夏、文王滅崇、武王誅紂、秦并天下、赤漢滅項、此等諸君、豈由壞佛。

自後交論、譏毀人法、或以抗禮君親、或謂妄稱佛性、或譏辯析色心、或重見作非業、或指身本陰陽、林皆隨難消解。帝終搆難重疊、三番五番、窮理盡性、林則無疑不遣、有難斯通。

帝曰、卿言業不乖理、凡有入聖之期、性非業外、道有通凡之趣。此則道無不在、凡聖該通、是則教無孔釋、虛崇如是之言、形通道俗、徒加剔翦之飾。是知帝王即是如來、宜儕<sup>351</sup>丈六、王公即是菩薩、省事文殊、耆年可為上座、不用賓頭、仁惠真為檀度、豈假棄國。和平第一精僧、寧勞布薩、貞謹即成木叉、何必受戒、儉約實是少欲、無假頭陀、蔬食至好長齋、豈煩斷穀。放任妙同無我、何藉解空、忘功全通大乘、寧希波若、文武直是二智、不觀空有、權謀徑成巧便、豈待變化。加官真為授記、無謝

<sup>347</sup> 「他」、麗本「化」。

<sup>348</sup> 「非不孝廢」、麗本ナシ。

<sup>349</sup> 「戈」、盧本「戎」。

<sup>350</sup> 「羌」、盧本「差」。

<sup>351</sup> 「儕」、麗本「停」。

證果、爵錄交獲天堂、何待上界、罰戮見感地獄、不指泥犁。以民為子、可謂大慈、四海為家、即同法界、治政以理、何異救物、安樂百姓、寧殊拔苦、剪罰殘害、理是降魔、君臨天下、真成得道。汪汪何殊淨土、濟濟豈謝迦維、卿懷異見、妄生偏執、即事而言、何處非道。

奏曰、伏承聖旨、義博言深、融道混俗、移專散執。乃令觸處乘真、有情俱道、物我咸適、千徒齊一。美則美矣、愚臣尚疑、若使至道惟一、則無二可融、若理恒外內、則自可常別、若一而非一、則半是半非、二而無二、則乍道乍俗。是則縑素<sup>352</sup>錯亂、儒釋失序、外內交雜、上下參倫、何直遠沈清化、亦是近惑民俗。是以陰陽同氣、生殺恒殊、天地齊形、高卑常異。不可以其俱形、而使地動天靜、惑<sup>353</sup>者見其並氣、而令陰生陽殺、即事永無此理、虛言難可成用、所以形齊氣一、可得言同、生殺高卑、義無不別。故使同而不同、一而不一、道俗之理、有齊無齊<sup>354</sup>與、無為自別。又若王名雖一、凡聖無<sup>355</sup>殊、形事微同、寬狹全異。是故儒釋與無始俱興、道俗共天地同化。若欲泯之為一、止<sup>356</sup>可以道廢俗興<sup>357</sup>、如其俱益於世則<sup>358</sup>、兩理幽顯齊明。今惟<sup>359</sup>興一廢一興<sup>360</sup>、真成不可。

詔曰、卿言道俗天殊、全乖內外、亦可道應自道、無預於俗、釋應自釋、莫依儒王。道若惟道、道何所利、佛若獨佛、化有何功、故道俗相資、儒釋更顯、卿不因朕言、卿欲何論。是以內外抑揚<sup>361</sup>、廢興彼此。今國法不行、王力<sup>362</sup>所斷、廢興在數、常理無違、義無常興、廢復<sup>363</sup>何咎。

奏曰、仰承聖旨、如披雲覩日、伏聽勅訓、實如聖說。道不自道、非俗

<sup>352</sup> 「素」、麗本「俗」。

<sup>353</sup> 「惑」、麗本「或」。

<sup>354</sup> 「齊」、麗本ナシ。

<sup>355</sup> 「無」、麗本「天」。

<sup>356</sup> 「止」、麗本「正」。

<sup>357</sup> 「興」、麗本ナシ。

<sup>358</sup> 「則」、麗本ナシ。

<sup>359</sup> 「惟」、麗本「則」。

<sup>360</sup> 「興」、麗本ナシ。

<sup>361</sup> 「揚」、麗本「討」。

<sup>362</sup> 「力」、麗本「法」。

<sup>363</sup> 「復」、麗本「有」。

不顯、佛不自佛、惟王能興。是以釋教東傳、載<sup>364</sup>經五百、弘通法化、要依王力、方知道藉人弘、神由物感、佛之盛毀、功歸聖旨、道有興廢、義無恒久、法有隱顯、理難常存<sup>365</sup>。比來已廢、義無即行、休斷既久、興期次及、興廢更遞、理自應機。並從世運、不亦宜乎。

詔曰、帝王之法、善決取捨、明斷去就、審鑒同異、妙察非常。朕於釋教、以潛思於府內、校量於今古、驗之以行事、算之以得失。理非常而不要、文高奇而無用、非無端而棄廢、何愛憎於儒釋。

奏曰、弘法之本、必留心於達人、通化之首、要存志於正道。勿見忤己以惡者、懷之以疎隔、容己以美者、歡心以親近。是則自惑於所見、自亂於所聞。不可數聞有謗正之言、遂便信納、從唱而和、乘生是非、尋討愆短、日懷憎薄。是則以偽修<sup>366</sup>真、眾聲惑志。故令當疎者更進之、當親者更遠之、遂使談論偏駁、取捨專非、斯乃害真之禍患、喪德之妖累。於是帝不答、乃更開異途、以發論端。

問曰、朕聞君子舉措<sup>367</sup>、必合於禮、明哲動止、要應於機。比頻賜卿食、言不飲酒食肉、且酒是和神之藥、肉為充肌之膳、古今同味、卿何獨鄙。若身居喪服、禮制不食、即如今賜、自可得食、可食不食、豈非過耶。

奏曰、貪財熹色、貞夫所鄙、好膳嗜味<sup>368</sup>、廉士所惡。割情從道、前賢所歎、抑欲<sup>369</sup>崇德、往哲同嗟。況肉由殺命、酒能亂神、不食是理、寧得<sup>370</sup>為非。

詔曰、肉由害命、斷之且然、酒不損生、何為頓制。若使無損計罪、無過言非、飲漿食飯、亦應得罪、而實不爾、酒何偏斷。

奏曰、結戒隨事、得罪據心、肉體因害、食之即罪、酒性非損、過由弊神。餘處生過、過生由酒、斷酒即除、所以遮制不同、非謂酒體是罪。

<sup>364</sup> 「載」、麗本「時」。

<sup>365</sup> 「存」、麗本「在」。

<sup>366</sup> 「侈」、麗本「移」。

<sup>367</sup> 「措」、麗本「厝」。

<sup>368</sup> 「味」、麗本「美」。

<sup>369</sup> 「欲」、麗本「慾」。

<sup>370</sup> 「得」、麗本「可」。

詔曰、罪有遮性、酒體生罪。今有耐酒之人、能飲不醉、又不弊神、亦不生罪、此人飲酒應不得罪。斯則能飲無過、不能招咎、何關斷酒成戒善、可謂能飲耐酒、常名持戒、少飲即醉、是大罪人。

奏曰、制過防非、本為生善、戒是心善<sup>371</sup>、身口無違、緣中止息、遮性兩斷、乃名戒善。今耐酒之人既不亂神、未破餘戒、實理非罪、正以飲生罪酒、外違遮教、緣中生犯、仍名有罪、以乖不飲、猶非持戒。

詔曰、大士懷道、要由妙解、至人高達、貴其不執、融心與法、性齊寬肆、意共虛空、同量萬物、無不是善、善<sup>372</sup>惡何有非道。是則居酒臥肉之中、寧能有罪、帶婦懷兒而遊、豈言生過。故使太子取婦得道、周陀以捨妻沈淪、淨名以處俗高達、身子以出家愚執。是故善者未可成善、惡者何足言惡、禁酒斷肉之奇、殊乖大道。

奏曰、龍虎以鱗牙為能、猿鳥以超翔為才、君子以解行為道、賢哲以真實成德、故使內外稱奇。緇素高尚、若惟解而無行、同沙井而<sup>373</sup>非潤、專虛而不實、似空雲而無雨。是以匠萬物者、以繩墨為正、御天下者、以法理為本。故能善行<sup>374</sup>防邪、前<sup>375</sup>察姦宄、故使一行之失痛於割肉<sup>376</sup>、一言之善重於千金。若使心根妙解、則居惡為善、神智虛明、處罪成福、亦可移臣賤質、居天重任、迴聖極尊、處臣卑下。是則君臣雜亂、上下倒錯、即事不可、古今未有。何異詞談忠孝、身恒叛逆、語論慈捨、形常殺盜、口閑百技、觸事無能、言通萬里、足不出戶、斯皆情切事奢、言<sup>377</sup>高無用。是以才有大而无用、理有小而必通。執此為道、誠難取信。

詔曰、執情<sup>378</sup>未可論道、小智者難與談真。是以井坎之魚、寧知東海深廣、燕雀籬翔、詎羨鵬鳳之遊、斯皆固小以違大趣、守文害於<sup>379</sup>通途。若

<sup>371</sup> 「心善」、麗本「止惡」。

<sup>372</sup> 「善」、麗本ナシ。

<sup>373</sup> 「而」、麗本「之」。

<sup>374</sup> 「行」、麗本ナシ。

<sup>375</sup> 「前」、麗本「萌」。

<sup>376</sup> 「肉」、麗本「肌」。

<sup>377</sup> 「言」、麗本「虛」。

<sup>378</sup> 「行」、麗本「行者」。

<sup>379</sup> 「害於」、麗本「以害」。

以我我於物、無物而非我、以物物於我、無我而非物、我既不異於物、物復焉異於我、我物兩忘、自他齊一。虛心者是物無不同、遺功者無事而不可。

奏曰、仰承聖旨、名義深博、宗原浩污、究察莫由、事等窺天、誰測其廣、又同測海、寧識其深。若以小小於大、無大而不小、以大大於小、無小而大。大無不大、則秋毫非小<sup>380</sup>、小無不小、則太山非大<sup>381</sup>。故使大大非大<sup>382</sup>、小小非小<sup>383</sup>、是則小大異於同、大小同於異、無大小之異同、何小大之同異。方知非異可異同、寧有同可同異、無同可異同<sup>384</sup>非異同、無異可異異<sup>385</sup>無同可同<sup>386</sup>、是故無同而同非同、無異而異非異、何同異而可異同、非異同而可同異。

帝遂不答、於是君臣寂然不言。良久、詔乃問曰、卿何寂寞、乃欲散有歸無。勿以談不適懷、遂息清辯。

奏曰、古人當言而擯<sup>387</sup>、發言而憂、是以古有不言之君、世傳忘功之士。所以息言表知、非為不適。

詔曰、至人無為、未曾不為、知者不言、未曾不言。亦有鸚鵡言而無用、鳳凰<sup>388</sup>不言而<sup>389</sup>成軌、木有無任得存、雁有不鳴致死。卿今取捨、若為自適。又曰、士有一言、而知人有目擊而道存、亦有靚色審情、復有聽言辯德。朕與卿言為日既久、其間旨趣寧不略委、卿可為朕記錄、在所申陳、令諸世人知朕意焉。是則助朕、何愧忠誠。林以佛法淪陷、冒死申請、帝情較執、不遂所論、辯論雖明、終非本意。

承長安廢教後、別立通道觀、其所學者惟是老莊、好設虛談、通申三教、

<sup>380</sup> 「小」、麗本「小小」。

<sup>381</sup> 「大」、麗本「大大」。

<sup>382</sup> 「大」、麗本「大小」。

<sup>383</sup> 「小」、麗本「小大」。

<sup>384</sup> 「異同」、麗本「同異」。

<sup>385</sup> 「異」、麗本「同」。

<sup>386</sup> 「可同」、麗本「異」。

<sup>387</sup> 「擯」、麗本「懼」。

<sup>388</sup> 「鳳」、麗本「皇」。

<sup>389</sup> 「而」、麗本ナシ。

冀因義勢、發<sup>390</sup>明釋部。乃表鄴城義學沙門十人並聰敏高明者、請預通道觀。上覽表即曰、卿入通道觀大好、學無不有、至論補<sup>391</sup>已、大為利益。仍設食、訖曰、卿可裝束入關、眾人前却。至五月一日、至長安延壽殿奉見、二十四日帝往雲陽宮、至六月一日帝崩。

天元登祚在同州、至九月十三日、長宗伯岐公奏訖、帝允許之曰、佛理弘大、道極幽微、興施有則、法須研究。如此累奏、恐有稽違。奏曰、臣奉<sup>392</sup>申事、止為興法、數啟懇懇、惟願早行。今聖上允可、議曹奏決、上下含弘、定無異趣、一日頒行、天下稱慶、臣何敢言。

至大成元年正月十五日、詔曰、弘建玄風、三寶尊重、特宜脩敬、佛<sup>393</sup>化弘廣、理可歸崇。其舊沙門中德行清高者七人、在正武殿西、安置行道。二月二十六日改元大象、又勅、佛法弘大、千古共崇、豈有沈隱、捨而不行。自今已後、王公已下并及黎庶、並宜修事、知朕意焉。

即於其日、殿嚴尊像、具修虔敬。于時佛道二眾、各誡一大德、令昇法座、敷<sup>394</sup>揚妙典、遂人懷無畏、互吐微言。佛理汪汪、沖深莫測、道宗漂泊、清淺可知、挫銳席中、王公嗟賞。

至四月二十八日、下詔曰、佛義幽深、神奇弘大、必廣開化儀、通其修行。崇奉之徒、依經自檢、遵道之人、勿須剪髮毀形、以乖大道、宜可存鬚髮嚴服、以進高趣。令選舊沙門中、懿德貞潔、學業沖博、名實灼然、聲望可嘉者一百二十人、在陟岵寺為國行道、擬欲供養<sup>395</sup>資須、四事無乏。其民間禪誦、一無有礙、惟京師及洛陽各立一寺、自餘州郡猶未通許。

周大象元年五月二十八日、任道林法師在同州衛道虎宅修述其事。呈上內史沛公宇文譯視<sup>396</sup>覽、小內史臨經公宇文弘披讀、常禮上土託 跋行恭、委尋都上土叱寇臣審覆。

<sup>390</sup> 「發」、麗本「證」。

<sup>391</sup> 「補」、盧本「誦」。

<sup>392</sup> 「奉」、麗本「本」。

<sup>393</sup> 「佛」、麗本「法」。

<sup>394</sup> 「敷」、麗本「勸」。

<sup>395</sup> 「養」、麗本「給」。

<sup>396</sup> 「視」、麗本「親」。

高祖諱邕、即西魏丞相宇文黑泰之第三子也。泰以魏氏廢帝三年崩<sup>397</sup>、世子洛陽公覺嗣位、受魏禪號大周、其年被廢。立弟寧都公敏<sup>398</sup>、三年崩、諡明帝。立弟魯國公、即高祖是也。改號保定、盡五年、改元天和、盡六年、改元建德、至三年滅佛法、六年平齊、江淮巴蜀、中原一統。帝以為得政於天下也、改號宣政、五月便崩。

初帝深信佛宗、曾無有二。流俗識緯、黑衣當王、以僧緇服、彌所經壞<sup>399</sup>。所以太祖入關、便改衣幡、悉為皂色、用厭不祥、乃至高齊<sup>400</sup>竊忌釋種、將戮稠師、以通覺故、所以免害、遂使周祖相從嫉之。危身事迫、信用讒佞、終是信非徹到、故受斯言、不思禍國滅身、勇意而行誅剪、三寶摧碎、寶命銷亡。所以統御既窮、當年便殞。子贇襲位、改元大成、二十六日禪位子衍、改元大象。贇號天元、明年五月、天元又崩、後年正月、改元大定。於二月內國禪有隋、改號開皇、率改皂服 普同黃色、是知識緯虛誕。光武已著前規卜<sup>401</sup>射雉<sup>402</sup>期、虞氏加其潤色、漢末謠言、黃衣當王、張角・張魯並變服以應之、黃初・黃武又改元以附之、斯術<sup>403</sup>不亡。又見周隋交禪、以事徵驗、終歸於空。若夫興廢之道、曆數有期、因亡故昌、亡亦為貴。故經云、難遭想滅、大聖為之碎身、隨機得度、淨土由來不毀。周武行事、不亦宜乎。

道林法師、俗姓任氏、高齊之時在相州、鄴下有名大德。周氏東平、誅除釋種、當時高祖召僧共評廢立、上統等五百餘人無敢陳抗。惠遠法師崛起抗詔、帝無以答、遂以威滅。道林法師初以他行、後乃申表、武帝含弘、召至御座、對坐<sup>404</sup>交論二十餘日、前後七十餘番、帝極覈微、竟不能屈。既理有所歸、乃付議曹、量其可否、會帝昇遐、天元嗣位。至大象元年八月二十九日議哀、九月內申奏時深加面許、明年正月遂詔頒行、於是佛法

<sup>397</sup> 「崩」、麗本「薨」。

<sup>398</sup> 「敏」、麗本「毓」。

<sup>399</sup> 「經壞」、麗本「纏懷」。

<sup>400</sup> 「高齊」、麗本「齊高」。

<sup>401</sup> 「卜」、盧本「十」。

<sup>402</sup> 「雉」、麗本「難」。

<sup>403</sup> 「術」、麗本「術歸」。

<sup>404</sup> 「坐」、麗本「面」。

如前廣通。

#### 周天元皇帝納王明廣表開佛事第十<sup>405</sup>四

趙武帝白馬寺佛圖澄孫弟子王明廣、上衛元嵩破<sup>406</sup>佛法事、表達天元皇帝。至四月八日、內史上大夫宇文譯宣<sup>407</sup>勅旨、佛教興來多曆年代、論其至理、實自難明、但以世代澆浮、不依佛教、致使清淨之法變成濁穢。太祖武皇帝所以廢而不存、正為如此。朕今情存至道、思弘善法、方欲簡擇練行、恭修此理、令形服不改、德行仍存、敬設道場、欲行善法、王公已下並宜知委。餘如前說。

#### 隋文帝詔為降州天火焚老君像事第十<sup>408</sup>五

門下、夫妙覺垂慈、等群生於一子、玄門亭毒、總萬物而為母。故泥洹大教、化彼耆城、無為真道、被斯神國、豈徒足相<sup>409</sup>淨土、不容真人之勝哉。曲沃東南土名烏谷、有靈宮一所、道佛同座、碑記湮滅、莫識修起所由、年代參差、不知營造遠近。忽有異風揚礫、如飛長者之蓋、頽雲掩地、似狎司空之兵、驟雨闌干、翻伊倒洛、電女掣鞭、天帶流金之色、雷童挽軸、地有崩山之響。礫礫老君、身首各去、而佛靈相、儼然無損。黃鶴已高、青牛遂遠、未識金丹、安能不惑者焉、主者施行。

集論者云、夫邪正糾紛、在智猶惑、幽明路絕、顯驗斯形。自皇覺照臨、滿於空有之域、靈瑞感應、充於凡聖之心。自赤澤降神、青丘化及、威德之清昏識、神光之燭幽都、無不喪膽求師、款懷請道、所以掃六師于舍衛、梵主傾誠、偃十陣於伽耶。魔天稽首、安得與夫區區老叟黃巾奉而抗衡、瑣瑣尹生黔首則而齊化。故使周昭宅生已後、唐文教迹以前、未聞釋尊儀相靈祇之所輕毀。至於李老形像、頻被欺陵、曲沃同座而別焚、彭門僧拜

<sup>405</sup> 「十」、麗本ナシ。

<sup>406</sup> 「破」、底本ナシ。麗本により補った。

<sup>407</sup> 「宣」、麗本「宣嵩」。

<sup>408</sup> 「十」、麗本ナシ。

<sup>409</sup> 「之」、麗本「相之」。



而道偃。斯徒眾矣、略舉知之、頑俗多迷、疑腸<sup>410</sup>自結、終非異<sup>411</sup>敢、故抱遲惟。

余以近歲、道<sup>412</sup>訪古蹤、行至鄠西、地名樓觀、古樹摧枿<sup>413</sup>、院宇曾殘<sup>414</sup>、中有宗聖觀、觀南有尹先生別廟。周訪道士、云此不<sup>415</sup>是老君之本地也、尹喜聞道、故置廟以處之。其觀地逼<sup>416</sup>南山、近坡有一土臺、叢樹森聳<sup>417</sup>、云是老君之墓也。訪問周歷、暮宿觀西尹村<sup>418</sup>尹長樂家、因問氏族。長樂年雖遲暮、慧<sup>419</sup>解清明、言晤微擊、諸道怯其過往。自云是尹令之餘胤也、東邊樓觀、此乃先君尹令之故宅也。先君志重丘園、情敦稼穡、地廣苗厚、通觀莫因、遂結草為樓、以用觀望、故云樓觀也。本非老君之宅、先君承老君西遁、將往流沙、道左邀攜、逆旅相待、老君遂之此宅。周眺久之、東南高崗即先君之古臺也、當時亦與李老共登此臺。祖宗相承、墳墓峙列、不聞先君與李老西邁、此乃出自道書、非關古史。又云、昔聞李老生陳<sup>420</sup>苦縣、長亦東川、老方入秦、死於槐里、未聞正說、西化流沙、雖史遷浪言、非為定指。莊蒙所及、斯途有歸、自餘云云、不可尋檢。

余又往始平之西二十餘里、渭水之北、槐里古城、基趾尚存。中有一塚、訊問耆舊、斯塚是誰、皆莫知其由、案縣圖經、但述古城、亦不測其年代、塚跡今遠。訪<sup>421</sup>流沙、即燉煌鳴沙之地是也、彼有流沙之地、而無伯陽之風。『檢道』・『化胡』・『西昇』經等、聃往化胡、胡人不受、乃令尹喜為佛化胡、胡人方服。今窮其浮辯、較其宗匠、自天竺已北諸外國者、乃稱胡國、人皆奉佛、未承喜化、還祖天竺釋迦如來。若此搜求、聃行不遠槐

<sup>410</sup> 「腸」、麗本「陽」。

<sup>411</sup> 「異」、麗本「果」。

<sup>412</sup> 「道」、麗本「通」。

<sup>413</sup> 「枿」、麗本「オ+薛」。

<sup>414</sup> 「殘」、麗本「重」。

<sup>415</sup> 「不」、麗本ナシ。

<sup>416</sup> 「逼」、麗本「通」。

<sup>417</sup> 「聳」、麗本「疎」。

<sup>418</sup> 「村」、盧本「邨」。

<sup>419</sup> 「慧」、麗本「惠」。

<sup>420</sup> 「陳」、麗本「陳郡」。

<sup>421</sup> 「訪」、麗本「訪問」。

里死矣、秦佚<sup>422</sup>吊之、頗為實錄、自餘虛引、未足稱之。故隋尚書令楚國公楊素、行經樓觀、見壁畫尹喜化胡之像、素告諸道士曰、「承聞老君化胡、胡人不受、令喜變身作佛、胡人方受。是知<sup>423</sup>佛能化胡、胡人奉佛、道不能化、云何言老子化胡。」深思此言也。

故列時緣、露布惟遠、後進未廣聞<sup>424</sup>、安能博詣、想有識者、顧此懷諸。

### 隋兩帝重佛宗<sup>425</sup>俱受歸戒事第十<sup>426</sup>六

案、隋著作郎<sup>427</sup>王邵述隋祖起居注云、帝以後魏大統七年六月十三日、生於同州般若尼寺。于時赤光照室、流溢戶外、紫氣滿庭、狀如樓閣、色染人衣、內外驚異。帝母以時炎熱、就而扇之、寒甚幾絕、困不能啼。有神尼者、名曰智仙、河東劉氏女也。少出家、有戒行、和上失之恐墮井、乃在佛屋儼然坐定、時年七歲、遂以禪觀為業。及帝誕日、無因而至、語太祖曰、兒天佛所祐、勿憂也。尼遂名帝為那羅延、言如金剛不可壞也。又曰、兒來處異倫俗家穢雜、自為養之。太祖乃割宅為寺、以兒委尼、不敢召聞<sup>428</sup>。後皇妣來抱、忽化為龍、驚遑墮地。尼曰、何因妄觸我兒、遂令晚得天下。及年七歲、告帝曰、兒當大貴、從東國來、佛法當滅、由兒興之。尼沈靜寡言、時道吉凶、莫不符驗。初在寺養、帝年至十三、方始還家。

及周滅二教、尼隱皇家、帝後果自山東入為天子、重興佛法皆如尼言。及登位後、每顧群臣、追念阿闍梨、以為口實。又云、我興由佛法、而好食麻豆、前身似從道人中來、由小時在寺、至今樂聞鍾聲。乃命史官為尼作傳。帝昔龍潛、所經四十五州、及登極後、皆悉同時起大興國寺。仁壽元年、帝及後宮同感舍利、並放光明、砧槌試之、宛然無損。遂前後置塔、

<sup>422</sup> 「佚」、麗本「矢」。

<sup>423</sup> 「知」、麗本「則」。

<sup>424</sup> 「聞」、麗本ナシ。

<sup>425</sup> 「宗」、麗本「宗法」。

<sup>426</sup> 「十」、麗本ナシ。

<sup>427</sup> 「郎」、麗本ナシ。

<sup>428</sup> 「聞」、麗本「問」。

諸州百有餘所、皆置銘勒、隱于地府、咸發神瑞、充仞耳目<sup>429</sup>、具如王邵所撰『感應傳』。所以周祖竊忌黑衣當王、便摧滅佛法、莫識隋祖元養佛家、王者不死、何由可識、事過方委知聖作<sup>430</sup>狂、自古皆爾、備諸聞見。然帝信重佛宗、情注無已、每日登殿、坐列七僧、轉經問法、乃至大漸。至於道觀、羈縻而已、崇建功德、佛門隆盛。時既非遙、故略其敘。

于時曇延法師、是稱僧傑、昇於正殿而授帝菩薩戒焉、事如別顯。及大業嗣曆、彌隆前政、昔居晉府、盛集英髦。慧日法雲、道場興號、玉清金洞、玄壇著名、四海搜揚、總歸晉府<sup>431</sup>。四事供給、三業依憑、禮以家僧、不屬州省、迄于終曆、徵訪莫窮、而情慕佛宗、崇奉誠約。

天台智顗、定門幽祕、神用罕加、請為國師、尊稱<sup>432</sup>智者、言令所及、無不允從。及其即世、廢朝追感、就山造寺、廣度眾僧。下書憂問、慇懃委曲、遣<sup>433</sup>錫糧粒、并諸法衣。欲使徒眾行道如師存<sup>434</sup>日、故每至忌晨、必預先設供。門人歲至、面敘昔緣、情款莫二。自有帝王、於師珍敬、無以加也。至於李老符籙<sup>435</sup>、曾無預懷、致使交論興言、絕於徵召、故無<sup>436</sup>編次云。

集古今佛道論衡實錄<sup>437</sup>卷第二<sup>438</sup>

<sup>429</sup> 「耳目」、麗本「目前」。

<sup>430</sup> 「作」、麗本「詐」。

<sup>431</sup> 「府」、麗本「邸」。

<sup>432</sup> 「稱」、麗本「加」。

<sup>433</sup> 「遣」、麗本「遺」。

<sup>434</sup> 「存」、麗本「在」。

<sup>435</sup> 「籙」、麗本「錄」。

<sup>436</sup> 「無」、麗本「無所」。

<sup>437</sup> 「實錄」、麗本ナシ。

<sup>438</sup> 「第二」、麗本「乙」。

集古今仏道論衡實錄<sup>439</sup>卷第三<sup>440</sup> 疑

唐釋道宣撰

大唐高祖問僧形服利益事第十七<sup>441</sup>

武皇幸國學問僧道能生佛事第十八<sup>442</sup>

道士李仲卿著論毀佛琳法<sup>443</sup>師抗辯第十九<sup>444</sup>

太<sup>445</sup>宗勅道先佛後僧等<sup>446</sup>上表請校勘第二十<sup>447</sup>

皇太<sup>448</sup>子集三教學者詳論事第二十一<sup>449</sup>

辛中舍著『齊物論』淨琳二師抗釋第二十二<sup>450</sup>

太<sup>451</sup>宗文皇帝問沙門法琳交報顯應事第二十三<sup>452</sup>

文帝<sup>453</sup>幸弘福寺立願重施敘佛道先後第二十四<sup>454</sup>

太<sup>455</sup>宗勅道士『三皇經』不足開化令焚除第二十五<sup>456</sup>

<sup>439</sup> 「實錄」、麗本ナシ。

<sup>440</sup> 「第三」、麗本「丙」。

<sup>441</sup> 「第十七」、麗本「一」。

<sup>442</sup> 「武皇幸國學問僧道能生佛事第十八」、麗本「高祖幸國學統集三教問道是佛師事二」。

<sup>443</sup> 「法」、麗本ナシ。

<sup>444</sup> 「第十九」、麗本「事三」。

<sup>445</sup> 「太」、麗本「大」。

<sup>446</sup> 「等」、底本「寺」、麗本により改めた。

<sup>447</sup> 「表請校勘第二十」、麗本「諫事四」。

<sup>448</sup> 「太」、麗本「大」。

<sup>449</sup> 「第二十一」、麗本「五」。

<sup>450</sup> 「第二十二」、麗本「事六」。

<sup>451</sup> 「太」、麗本「大」。

<sup>452</sup> 「文皇帝問沙門法琳交報顯應事第二十三」、麗本「問琳師辯正論信毀交報事七」。

<sup>453</sup> 「文帝」、麗本「太宗」。

<sup>454</sup> 「立願重施敘佛道先後第二十四」、麗本「手製願文并敘佛道後先八」。

<sup>455</sup> 「太」、麗本「大」。

<sup>456</sup> 「第二十五」、麗本「事九」。

太<sup>457</sup>宗詔法<sup>458</sup>師翻道經為梵文與道士辯覈事第二十六<sup>459</sup>

**高<sup>460</sup>祖問僧形服有何利益琳法<sup>461</sup>師奉對事第十七<sup>462</sup>**

皇唐啟運、諸教並興、然於佛法彌隆信重、捨京舊第、置興聖寺、自餘會昌・勝業・慈悲・證果・集仙等寺、架築相尋。至於道觀、無聞<sup>463</sup>於俗。武德四年、有太<sup>464</sup>史令傳<sup>465</sup>奕者、先是黃巾、深忌緇服。既見國家別敬、彌用疚心、乃上廢佛法事十有一條云、佛經誕妄、言妖事隱、損國破家、未聞益世。請胡佛邪教退還天竺、凡是沙門、放歸桑梓、則家國昌大、李孔之教行焉。

武皇容其小辨<sup>466</sup>、朝輔任其放言、乃下詔問僧曰、棄父母之鬚髮、去君臣之華<sup>467</sup>服、利在何間<sup>468</sup>之中、益在何情之外。損益二宜、請動妙釋<sup>469</sup>。

有濟法寺沙門襄陽釋法琳、憤激傳詞、側聽機候、承有斯問、即陳對曰、琳聞至道絕言、豈九流能辯、法身無像、非十翼所詮。但四趣茫茫、飄淪欲海、三界蠢蠢、顛墜邪山、諸子迷以自焚、凡夫溺而不出。大聖為之興世、至人<sup>470</sup>所以降靈、遂開解脫之門、示以安樂<sup>471</sup>之路。於是天竺王種、辭恩愛而出家、東夏貴遊、厭榮華而入道、誓出二種生死、志求一妙涅槃。弘善以報四恩、立德以資三有、此其利益也。毀形以成其志、故棄鬚髮美

<sup>457</sup> 「太」、麗本「大」。

<sup>458</sup> 「法」、麗本ナシ。

<sup>459</sup> 「第二十六」、麗本「事十」。

<sup>460</sup> 「高」、麗本「大唐高」。

<sup>461</sup> 「法」、麗本ナシ。

<sup>462</sup> 「第十七」、麗本「一」。

<sup>463</sup> 「聞」、麗本「間」。

<sup>464</sup> 「太」、麗本「大」。

<sup>465</sup> 「傳」、盧本「傳」。

<sup>466</sup> 「辨」、麗本「辯」。

<sup>467</sup> 「華」、麗本「章」。

<sup>468</sup> 「間」、麗本「門」。

<sup>469</sup> 「釋」、麗本「適」。

<sup>470</sup> 「人」、麗本「仁」。

<sup>471</sup> 「樂」、麗本「隱」。

容、變俗以會其道、故去君臣華服。雖形闕奉親、而內懷其孝、禮乖事主、而心戢其恩、澤被怨親、以成大順、福霑幽顯、豈拘小違。上智之人、依佛語故為益、下凡之類、虧聖教故為損。懲惡則濫者自新、進善則通人感化、此其大略也。

而傅氏所奏、在司既不施行、乃<sup>472</sup>多寫表狀、公然遠近流布。京室閭里、咸傳禿丁之誚、劇談席上、昌言胡鬼之謠、佛日翳而不明、僧威阻而無力。于時達量道俗、動毫成論者非一、各疎佛理、曲陳邪正。琳閱眾辭、多引經教。琳因謂眾人曰、「此引皆是 奕之所廢、豈得引廢成興<sup>473</sup>、雖曰破邪、終歸邪破。」

琳情出<sup>474</sup>玄機、獨覺千載、器局天授、博悟生知。睹<sup>475</sup>作者之小功<sup>476</sup>、信乘權之有據、乃著『破邪論』。其詞曰、莊周云、六合之內、聖人論而不議、六合之外、聖人存而不論。老子云、域中有四大、而道居其一。案前漢『藝文志』所紀眾書、一萬三千二百六十九卷、莫不功在近益、意在敬事君父、俱未暢於<sup>477</sup>遠途、止在移風易俗。遂使三世因果、理涉旦而猶昏、業報吉凶<sup>478</sup>、義經丘而未曉。斯乃六合之寰塊、三才之俗謨、詎免四流浩汗<sup>479</sup>、為煩惱之波、六趣誼譁、造塵勞之路者也。原夫實相杳<sup>480</sup>冥、逾要道之道、法身凝寂、出玄之又玄。所以現生忍土、誕聖王宮、示金色之身、吐玉毫之相。行則蓮華<sup>481</sup>捧足、住<sup>482</sup>則百寶逐<sup>483</sup>軀、出則天主導前、入則梵王從後。聲聞菩薩、儼若朝儀、八部萬神、森然輔衛。演『涅槃』則地現六動、說『般若』則天雨四花。百福莊嚴、狀滿月之臨滄海、千光

<sup>472</sup> 「乃」、麗本「奕乃」。

<sup>473</sup> 「成興」、麗本「證成」。

<sup>474</sup> 「出」、麗本「契」。

<sup>475</sup> 「睹」、麗本「觀」。

<sup>476</sup> 「小功」、麗本「不工」。

<sup>477</sup> 「於」、麗本ナシ。

<sup>478</sup> 「業報吉凶」、麗本「命報五乘」。

<sup>479</sup> 「汗」、麗本「瀚」。

<sup>480</sup> 「杳」、麗本「窈」。

<sup>481</sup> 「蓮華」、麗本「金蓮」。

<sup>482</sup> 「住」、麗本「坐」。

<sup>483</sup> 「百寶逐」、麗本「寶座承」。

照曜、如聚日之映寶山。師子一吼、則外道摧鋒、法鼓暫鳴、則天魔稽首、是故號佛為法王也、豈與袁周李耳比 德爭衡、末代孔丘輒相聯類、非所言也。

文有三<sup>484</sup>十餘紙、自琳論出、冠絕群篇、家藏一本、心口常<sup>485</sup>誦、並流略之菁華、史書之藻鏡。茂譽於是乎沸騰、蒙俗由之而開悟、琳有功矣。琳以論卷初出、意在榮達、所知上之化下、風靡之言則易、乃上啟儲貳親王及公卿侯伯、並文理弘被、庶績咸嘉、其博詣焉。故奕奏狀因之遂寢、得使釋門重敞、琳有<sup>486</sup>其功。東宮庶子虞世南、詳所上論為之序、胤光價之顧、又重由來。

琳姓陳氏、潁川太丘之後、遠祖移於襄陽、故<sup>487</sup>為縣人焉。少出家、住荊州青溪山玉泉寺、博通內外、以文學見知。大業初入關、視聽以槐里老宗、張葛承繼、言多誕謬、有阻素風、不勝其妄、親事觀閱。史云、老氏西之流沙、莊云、老氏死於槐里、二說糾紛<sup>488</sup>、名實乖競<sup>489</sup>、故西窮砂塞、絕李氏之蹤、中至槐城、有古墳之驗、追訪耆舊、莫識其源。然樓觀道宗、乃尹喜之宅、延老君<sup>490</sup>過之、非柱下居處。今觀西尹村尹<sup>491</sup>長樂者、村中魁岸、即尹令之後、事佛不事道也。余<sup>492</sup>問焉、唱<sup>493</sup>言、我祖結草為樓、於上<sup>494</sup>觀望、故曰樓觀、本非老君之所宅也。今東觀中廣<sup>495</sup>者、即尹先君之宗廟也、自古至今、子孫承紹。不往流砂、昭穆斯在、但以時逢寬政、不事糾懲、任彼黃巾高仰尹李、致有符圖章醮、代代繁廣、道德宏旨

<sup>484</sup> 「三」、麗本「二」。

<sup>485</sup> 「常」、麗本「成」。

<sup>486</sup> 「有」、麗本「又」。

<sup>487</sup> 「故」、麗本「故又」。

<sup>488</sup> 「糾紛」、麗本「紛糾」。

<sup>489</sup> 「競」、麗本「咎」。

<sup>490</sup> 「君」、麗本ナシ。

<sup>491</sup> 「尹村尹」、麗本「尹」。

<sup>492</sup> 「余」、麗本「余往」。

<sup>493</sup> 「唱」、底本「昌」。麗本により改めた。

<sup>494</sup> 「上」、底本ナシ。麗本により補った。

<sup>495</sup> 「廣」、麗本「廟」。

豈有<sup>496</sup>然乎、莫不後<sup>497</sup>生存利、非老厥宗。琳慨其謬妄、方欲討其<sup>498</sup>根源、若非共住久處、無由得成探蹟。則戴冠服褐、從其靜館、為述道德、通說莊黃。昔在荆楚、曾經陶練、義在玄微、蘊括情抱。秦川道學、麟角罕逢、自餘章句、梗概而已。致使九仙九府之錄、三元三洞之儀、黃庭黃書之秘、天文步剛<sup>499</sup>之術、服氣練尸、飛丹獲<sup>500</sup>液、莫不說如指掌、寫送無遺。於是高會館宇、把臂朋從、藏篋並開、奇方畢吐。琳本期既暢、窮力搜求、乃見乾竺古皇老君之師、奉僧位高顯、道士之所推、敬佛之目<sup>501</sup>如雲、重法之科霧結、並具抄略、用擬不虞、後乃返跡、舊徒如常綜業。

及皇運初興、傳令陳表、仲卿進喜、蹠駁佛僧、著論形於見聞、興言在於貶退。琳遂依而抗拒、引道敬我佛乘、劉李違師背教、妄作罔冒<sup>502</sup>凡聖。

及太宗覽論、試以顯驗之刑、琳對以正理極言、上帝一無所問、移於益部僧寺。行至百牢關、因疾而卒、時年六十有九。凡所著論、集三十餘卷、然於釋李交論、偏意敷弘、固使文據卓明、終始包富、後賢引用、不假傍求。斯即季代護法之開士也、當時同代相侮、逝後惜之、自餘玼瑣、未足言議。其對晤重沓、如後廣之、此但敘其風素耳。

### 高祖幸國學統<sup>503</sup>集三教問僧道是佛師事第十八<sup>504</sup>

武德八年、歲居協洽、駕幸國學禮陳釋奠、堂列三座、擬敘三宗。時勝光寺慧乘法師、隋煬所珍、道俗敦敬、眾所樂推、以為導首。於時五都才學、三教通人、榮貴宰伯、臺省咸集。天子下詔曰、「老教・孔教、此土元基、釋教後興、宜崇客禮。今可老先・次孔・末後釋宗。」當時相顧、莫敢酬抗。乘雖登座、情慮不安。太宗時為秦王、躬臨位席、直視乘面、

<sup>496</sup> 「有」、麗本「其」。

<sup>497</sup> 「後」、麗本「厚」。

<sup>498</sup> 「討其」、麗本「窮討」。

<sup>499</sup> 「步剛」、麗本「天岡」。

<sup>500</sup> 「獲」、麗本「糗」。

<sup>501</sup> 「目」、麗本「文」。

<sup>502</sup> 「罔冒」、麗本「冒罔」。

<sup>503</sup> 「統」、麗本「當」。

<sup>504</sup> 「十八」、麗本「第二」。



目未曾迴。頻降中使云、「無<sup>505</sup>所慮、師但廣述佛宗、先敷帝德、既最末陳唱、冠徹前通。」乃命宗曰、「上天下地、其貴在人、榮位緣業、必宗佛聖。今將敘大致、須具禮儀、並合掌虔跪、表師資有。」據聲告纔止、皇儲以下、爰逮群僚、各下席跏<sup>506</sup>跪、竚聆清辯。

乘前開帝德云、「陛下巍巍堂堂、眾聖中王、如星中之月」、言多不載。次述釋宗、後以二難雙徵兩教。

先問道云、「先生廣位道宗、高邁宇宙、向釋『道德』云、上卷明道、下卷明德。未知此道更有大此道者、為更無大於道者。」答曰、「天上天下、唯<sup>507</sup>道至極、最大更無大於道者。」

難曰、「道是至極、最大更無大於道者、亦可道是至極之法、更無法於道者。」答曰、「道是至極之法、亦<sup>508</sup>更無法於道者。」

難曰、「『老經』自云、＜人法地、地法天、天法道、道法自然＞、何意自違本宗、乃至更無法於道者、若道是至極之法、遂更有法於道者。何意道法最大、不得更有大於道者。」答曰、「道只是自然、自然即是道、所以更不<sup>509</sup>別有<sup>510</sup>法能法於道者。」

難曰、「道法是<sup>511</sup>自然、自然即是道、道<sup>512</sup>亦得自然、自然<sup>513</sup>法道不。」答曰、「道法是<sup>514</sup>自然、自然不法道。」

難曰、「道法是<sup>515</sup>自然、自然不法道、亦可道即<sup>516</sup>法自然、自然<sup>517</sup>不即道。」答曰、「道法是自然、自然即是道、所以不相法。」

<sup>505</sup> 「無」、麗本「一無」。

<sup>506</sup> 「跏」、底本「互」。麗本により改めた。

<sup>507</sup> 「唯」、麗本「惟」

<sup>508</sup> 「亦」、麗本ナシ。

<sup>509</sup> 「不」、麗本「無」。

<sup>510</sup> 「有」、麗本ナシ。

<sup>511</sup> 「是」、麗本ナシ。

<sup>512</sup> 「道」、麗本ナシ。

<sup>513</sup> 「自然」、麗本「還」。

<sup>514</sup> 「是」、麗本ナシ。

<sup>515</sup> 「是」、麗本ナシ。

<sup>516</sup> 「即」、麗本ナシ。

<sup>517</sup> 「自然」、麗本「自然自然」。

難曰、「道法<sup>518</sup>是自然、自然即是<sup>519</sup>道、亦可地既<sup>520</sup>法於天、天應<sup>521</sup>即是地。然地法於天、天不即地、故知道法自然、自然不即道、若自然即是道、天應即是地。」

於是仲卿在座、周樟神府、抽解無地、忸怩無答。當時榮貴唱言、「道士遭難不通、遂使玄梯廣布、義網高張、可謂躡響風飛、應機河瀉。」於時天子迴光、驚美其辯、舒顏解頤而笑、皇儲懿戚、左右重臣、並同歎重。黃巾之黨、結舌無報、博士祭酒、張喉<sup>522</sup>愕視、束體轅門。慧日所以更明、法雲於茲還布。

尋於座中、下詔問乘。道士潘誕奏云、「悉達太子不能得佛、六年求道方得成佛、是則道能生佛、佛由道成、道是佛之父師<sup>523</sup>、佛乃道之子弟<sup>524</sup>、故佛經云、＜求於無上正真<sup>525</sup>＞、又云、＜體解大道、發無上意＞。外國語云＜阿耨菩提＞、晉翻之<sup>526</sup>無上大道、若以此驗、道大佛小、於事可知。」

乘略答<sup>527</sup>云、「震旦之與天竺、猶環海之比麟洲。聃乃周末始生、佛是周初前出、計其相去三十許王、論年所經、三百餘載、豈有昭王世佛而退求敬王時道乎。勾<sup>528</sup>虛驗實、足可知也。仲卿向敘道者、謂太上大道、先天地生、鬱勃洞虛之中、煒曄玉清之上、是佛之師、不言周時之老聃也。且五帝之前、未聞有道、三王之季、始有聃名、漢景以來、方興道學。窮今討古、道者為誰。案七籍九流經國之典、宗師周易、五運相生、既闢兩儀、陰陽是判、故曰一陰一陽之謂道、陰陽不測之謂神。天地於事可明、陰陽

<sup>518</sup> 「是」、麗本ナシ。

<sup>519</sup> 「是」、麗本ナシ。

<sup>520</sup> 「既」、麗本ナシ。

<sup>521</sup> 「應」、麗本ナシ。

<sup>522</sup> 「喉」、麗本「侯」。

<sup>523</sup> 「父師」、麗本「師父」。

<sup>524</sup> 「子弟」、麗本「弟子」。

<sup>525</sup> 「真」、麗本「真之道」。

<sup>526</sup> 「翻之」、麗本「音翻之云」

<sup>527</sup> 「略答」、麗本「答略」。

<sup>528</sup> 「勾」、麗本「鉤」。

在生有驗、此理數然也。不云有道先天地生、道既莫從、何能生佛。故車胤云、＜在己為德、及物為<sup>529</sup>道＞、殷<sup>530</sup>仲文云、＜德者得也、道者由也。言得孝在心、由之而成者也＞、王充『論衡』云<sup>531</sup>、＜立身之謂德、成名之謂道＞、道德者<sup>532</sup>、為若此矣、卿所言道寧異是乎。若異斯者、不足論評<sup>533</sup>。豈有頭戴金冠、身披<sup>534</sup>黃褐、鬢垂素髮、手把玉璋、別號天尊、居大羅之上、獨名大道、治玉京之中。山海之所未詳、經史之所不載、大羅同鳥有之說、玉京本亡是之談。」言畢下座。

乘爾時獨據詞鋒、舉朝矚目、致使異宗無何而退、可謂一席之<sup>535</sup>揚扇、足為萬代之<sup>536</sup>舟航、可尚可師、立功立事。是知近假叨<sup>537</sup>幸之力、遠庇護念之恩、道藉人弘、惟乘有矣。

乘姓劉氏、彭城人也。有陳<sup>538</sup>之時、早經師訓聽『成實論』・『大涅槃經』、聲論之美、光華江表、及隋降陳國、望逸朝廷。煬帝昔在晉蕃、南鎮淮海、立四道場、追徵四遠、有名釋李、率來府供。乘以學優見舉、召入王庭、言論酬對、殊有風采。然其儀相魁岸、眉目高朗、貌體時事、不在思量、鋪詞摘藻、俊逸終古。自寓內推舉、聲辯之最、無越南朝。良以吳楚之文騷經陳、其翹楚典午南據、才學涌於波瀾、故得遊談玄路、天下稱焉。乘於斯伍、聲價尤甚。所以慧日道場、義門法將、盱<sup>539</sup>衡而對雄<sup>540</sup>伯、電舌而卷群英、乘於僧位、灼灼高出。

煬帝初在春坊、因從京邑談講、徒侶互顯英雄、論難之華、道俗同許。

<sup>529</sup> 「為」、麗本ナシ。

<sup>530</sup> 「殷」、麗本「王充殷」。

<sup>531</sup> 「云」、麗本ナシ。

<sup>532</sup> 「者」、麗本「也者」。

<sup>533</sup> 「論評」、麗本「苦詞」。

<sup>534</sup> 「披」、麗本「被」。

<sup>535</sup> 「之」、麗本ナシ。

<sup>536</sup> 「之」、麗本ナシ。

<sup>537</sup> 「叨」、麗本「幻」。

<sup>538</sup> 「陳」、麗本「陳氏」。

<sup>539</sup> 「躬」、麗本「盱」。

<sup>540</sup> 「雄」、麗本「雒」。

及成雒邑、召往東都、厚供重賜、月望相接。及往西平・且<sup>541</sup>末・遼海・衰<sup>542</sup>平、無不預從戎麾、對晤詞旨。京師西南建兩禪宇、內獲舍利、擬瘞寺塔、終憂所重、特詔此行。粵自東都、西至京定<sup>543</sup>、威儀福瑞、聽逸郊闡。及帝往江都、留乘洛邑、常事恒業、不擁素風。皇泰初元、彌崇敬重、內置道場、晨宵覲接。開明建始、鄭重相仍、齋講繼軫、法輪不絕。

及武德四年、蕩定東夏、入偽諸州、例留一寺。洛陽舊都、僧徒極盛、簡取名勝、配住同華。兩州仍舉勝達者五人、天策別供。乘以德高眾望、又處其員、在京住勝光寺。以勝光寺主僧珍法師、即隋煬國師智<sup>544</sup>顗禪師之弟子也、以行解有聲、追往慧日、舊曾同寺、同氣相求。珍亦文帝素交、特隆恒准、所以泰<sup>545</sup>國福供、並入勝光寺<sup>546</sup>。乘達帝城<sup>547</sup>、弘道無倦、福智二嚴、與時俱積。勝光北<sup>548</sup>院、寶塔高華、堂宇綺飾、像<sup>549</sup>設嚴麗、乃至畫繪瓌奇、冠絕區域、皆乘目准、心計巧類、神功不可思也。每有盛集、必事先驅、湧注若河傾、名貌如摘錦、能使智人傾心清耳竚聆、逸辯不覺晷度形疲。自餘昏漠、但聞寫送輕快、莫知筌緒。然為人慈育、以濟度為心、言問所流、惟存贊悅、不及其<sup>550</sup>過、斯亦季代之辯士也。年將八十、終於勝光寺<sup>551</sup>、帝深悼惜、賻贈榮顯。

### 道士李仲卿等造論毀佛沙門法琳<sup>552</sup>著『辯正論』以抗事第十九<sup>553</sup>

武德九年、清虛觀道士李仲卿・劉進喜猜忌佛法、恒加訕謗、與傅奕臂

<sup>541</sup> 「且」、麗本「旦」。

<sup>542</sup> 「衰」、麗本「襄」。

<sup>543</sup> 「定」、麗本「室」。

<sup>544</sup> 「智」、麗本「智者」。

<sup>545</sup> 「泰」、麗本「秦」。

<sup>546</sup> 「寺」、麗本ナシ。

<sup>547</sup> 「城」、麗本「成」。

<sup>548</sup> 「北」、盧本「壯」。

<sup>549</sup> 「城」、麗本「成」。

<sup>550</sup> 「其」、麗本ナシ。

<sup>551</sup> 「寺」、麗本ナシ。

<sup>552</sup> 「沙門法琳」、麗本「法琳法師」。

<sup>553</sup> 「十九」、麗本「三」。

齒結構、誅剪釋宗。卿著『十異九迷論』、喜著<sup>554</sup>『顯正論』、仍託傅氏上聞天聽。孟春下勅、京立三寺、僧限千人、餘並放還桑梓、有才用者八品處分。嚴勅行下、無敢抗言、五眾哀號、四俗驚歎。不久震方出帝、氛祲廓清、太宗素襲啟聞、薄究宗領、登即大赦一切休寧、僧還本寺、佛日還朗。

法<sup>555</sup>琳前造『破邪論』、道俗具瞻、道士斯<sup>556</sup>論猶未筆削、乃因劉李二論、造『辯正論』以擬之、一帙八卷、綸綜終古、立信當今、絕後光前、布露惟遠。潁川陳子良、才術縱橫、聲振寰宇、為之注解、并序由來、文多不載。

### 太宗下勅道先佛後僧等上諫事第二十<sup>557</sup>

貞觀十一年、駕巡洛邑。僧中<sup>558</sup>先有與黃巾<sup>559</sup>論者、聞之於上、乃下詔云、「老君垂範、義在清虛、釋迦貽則<sup>560</sup>、理存因果。求其教也、汲引之跡殊途、求其宗也、弘益之風齊致。然大道之興、肇於遂古、源出無名之始、事高有形之外。邁兩儀而運行、包萬物而亭育、故能經邦致治、反樸還淳。至如佛教之興、基於西域、逮於後漢、方被中土、神變之理多方、報應之緣匪一。泊於近世、崇信滋深、人冀當年之福、家懼來生之禍、由是滯俗者、聞玄宗而大笑、好異者、望真諦而爭歸、始波涌於閭里、終風靡於朝庭。遂使殊俗之典、蔚為眾妙之先、諸華之教、翻居一乘之後。流遯忘返、於茲累代。今鼎祚克昌、既憑上德之慶、天下大定、而<sup>561</sup>賴無為之功、宜有解張、闡茲玄化。自今已後、齋供行立、至於稱謂、道士・女道士、可在僧尼之前、庶敦反本<sup>562</sup>、暢於九有、貽諸萬葉。」

<sup>554</sup> 「著」、麗本ナシ。

<sup>555</sup> 「法」、麗本「沙門法」。

<sup>556</sup> 「斯」、麗本「新」。

<sup>557</sup> 「二十」、麗本「四」。

<sup>558</sup> 「僧中」、麗本「黃巾」。

<sup>559</sup> 「黃巾」、麗本「僧中」。

<sup>560</sup> 「則」、麗本「訓則」。

<sup>561</sup> 「而」、麗本「亦」。

<sup>562</sup> 「本」、麗本「本之俗」。

時京邑僧徒各陳極諫、有司不納。沙門智實、後生俊 穎、內外兼明。携諸宿<sup>563</sup>老、隨駕陳表、乃至關口、上<sup>564</sup>其表略云、「僧某等言、某年迫桑榆、始逢太平之世、貌侵蒲柳、方值聖明之君。竊聞父有諍子、君有諍臣、某等雖預出家、仍在臣子之例、有犯無隱、敢不陳之。伏見詔書、國家本系、出自<sup>565</sup>柱下、尊祖之風、形於前典。頒告天下、無德而稱、令道士等、在僧之上、奉以周旋、豈敢拒詔。尋老君垂範、治國治家、所佩服章、亦無改異、不立館宇<sup>566</sup>、不領門人、處柱下以全真、隱龍德而養性。智者見之謂之智、愚者見之謂之愚、非魯司寇、莫之能識。今之道士、不遵其法、所著衣<sup>567</sup>服、並是黃巾之餘、本非老君之裳<sup>568</sup>。行三張之穢術、棄五千之妙門、反同張禹<sup>569</sup>、漫行章句。從<sup>570</sup>漢魏以<sup>571</sup>來、常以鬼道化於浮俗、妄託老君之教<sup>572</sup>、實是左道之苗。若位在僧尼之上、誠恐真偽同流、有損國化。如不陳奏、何<sup>573</sup>表臣子情<sup>574</sup>。謹錄道經、及漢魏諸史佛先道後之事、如別所陳、伏願天慈、曲垂聽覽。」

中書侍郎岑文本宣勅語、「僧等此事、久以行訖、不伏者與杖。」諸大德等咸 是暮年、形疲道路、飲氣而旋。智實勇身先出云、「不伏此理、萬刃之下、甘心伏罪。」遂杖之放還。

實少出家、住京師總持寺、沙彌時殊有高烈、有精神、善談論、有聲遠近、通『攝論』・『俱舍』。自受具已後、嚴策形心、衣鉢自隨、淨瓶常執、不入市、不乘騎。每有勝集、無不論難、鏗鏘高調、聲氣堅正。屬武德初、

<sup>563</sup> 「宿」、麗「夙」。

<sup>564</sup> 「上」、麗本ナシ。

<sup>565</sup> 「自」、盧本「因」。

<sup>566</sup> 「宇」、麗本「寺」。

<sup>567</sup> 「衣」、麗本「冠」。

<sup>568</sup> 「裳」、麗本「裔」。

<sup>569</sup> 「禹」、盧本「虫」。

<sup>570</sup> 「從」、盧本「教」。

<sup>571</sup> 「以」、麗本「已」。

<sup>572</sup> 「教」、麗本「後」。

<sup>573</sup> 「何」、麗本「何以」。

<sup>574</sup> 「情」、麗本「之情」。

薛舉東逼、乃選翹勇僧千人、入於戎<sup>575</sup>幕。有僧法雅、躬為幕<sup>576</sup>頭、京師鼎沸、僧徒無計。實於眾中大<sup>577</sup>哭云、「雅是魔賊」、撮而毆之。以事達太上、乃令還俗、因周行講肆、不染俗風。貞觀初元、雅有事、故下勅、令實出家、住於本寺。及尊黃老、令在僧前、實携京邑大德、法常・慧淨・法琳等十餘人、隨頓上表、以死上請、不許之。實曰、「深知明詔<sup>578</sup>、不可轉也、萬載之後、知僧中之有人焉。」後染疾、清齋如初、有勸非時食者、實曰、「余見死者多矣、臨終之時多陷戒律、豈<sup>579</sup>重身輕聖、何名師資乎。」乃閉口不食、有問後事、答曰、「彎弓箭下、可選地耶。任後量處、省事為要。」言已卒、時春秋三十餘矣。

### 皇太子集三教學者詳論事第二十一<sup>580</sup>

貞觀十二年、皇太子集諸宮臣及三教學士、於弘文殿開明佛法。紀國寺慧淨法師預斯嘉會、有令召淨開『法華經』、奉旨登座、如常序胤。道士蔡晃講道論、好獨秀時英。下令遣與抗論、晃即整容、問曰、「經稱＜序品第一＞、未審序第何分」。淨曰、「如來入定徵瑞、放光現奇、動地雨花、假近開遠。為破二之洪基、作明一之由漸、故為序也。第者為居、一者為始、序最居先、故稱第一。」晃曰、「第者弟<sup>581</sup>也、為弟則不得稱一、言一則不得稱弟、兩字矛盾、何以會通。」淨曰、「向不云乎、第者為居、一者為始。先生既不領前宗、而謬陳後難、便是自難、何成難人。」晃曰、「言不領者、請為重釋。」淨啟令曰、「昔有二人、一名蛇奴、道帝忘掃。一名身子、一聞千解。然則蛇奴再聞不悟、身子一唱千領。此非授道不明、但是納法者非<sup>582</sup>。」晃曰、「法師言不出唇、何以可領。」淨曰、「菩薩說

<sup>575</sup> 「戎」、盧本「成」。

<sup>576</sup> 「幕」、麗本「募」。

<sup>577</sup> 「大」、麗本「太」。

<sup>578</sup> 「詔」、麗本「詔已下」。

<sup>579</sup> 「豈」、麗本「豈不以」。

<sup>580</sup> 「二十一」、麗本「五」。

<sup>581</sup> 「弟」、麗本「第」。

<sup>582</sup> 「者非」、麗「非俊」。

法、聲振<sup>583</sup>十方、道士在坐、如迷如醉。豈直形骸聾瞽、其智抑亦有之。」晃曰、「野干說法、何由可聞。」淨曰、「天宮嚴衛、理絕獸蹤、道士魂迷、謂人為畜。」

有國子祭酒孔穎達者、心存<sup>584</sup>道黨、潛扇斯玷、曰、「承聞佛教<sup>585</sup>無諍、法師何以構斯諍<sup>586</sup>。」淨啟令曰、「如來在日、已有斯事。佛破外道、外道不通、反謂佛曰、＜汝常自言平等、今既以難破我、即是不平等<sup>587</sup>。＞佛為通曰、＜以我不平、破汝不平、汝若得平、即我平也。＞而今亦爾、以淨之諍、破彼之諍、彼得無諍、即淨無諍也。」於時、皇儲語祭酒曰、「君既勸說、真為道黨。」淨曰<sup>588</sup>「常聞君子不黨、其知祭酒亦黨乎。」皇儲怡然大笑、合坐歡躍、令曰<sup>589</sup>、「不徒法樂以至於斯。」

淨頻入宮闈、抗論無擬、殿下目屬斯<sup>590</sup>神銳也、尋下令曰、「紀國寺慧淨法師、名稱高遠、行業著聞、綱紀伽藍、必有弘益、請為普光寺主、仍知本寺上坐事。」復下書與普光及以淨所廣述、寺綱住持、惟人在寄等<sup>591</sup>。

淨本趙郡房氏、即隋國子博士徽遠之猶子也。家代儒宗、流略固其常習、而精爽清舉、卓朗<sup>592</sup>文雄、機論標放、乘時構采。少出家、遊學三河、不專師傳、於大小乘探蹟沈隱。

開皇末曆、觀化帝京、優柔教義、亟發光問。大業之紀、聲唱轉高、預有才人、無不臨造。或決疑豫、或示新文、讎校古今、商榷儒墨。問之不已、乃為敘述。古來詩人、雅什雖多、罕登百二。群髦重其慧悟、服其品藻、遂勸續『詩英華』。自梁高齊宣已下逮于皇運、編為<sup>593</sup>十卷、吳王文

<sup>583</sup> 「振」、麗本「震」。

<sup>584</sup> 「在」、麗本「存」。

<sup>585</sup> 「教」、麗本「家」。

<sup>586</sup> 「諍」、麗本ナシ。

<sup>587</sup> 「等」、麗本「何謂平等」。

<sup>588</sup> 「曰」、麗本「啟」。

<sup>589</sup> 「令曰」、麗本「今日」。

<sup>590</sup> 「斯」、麗本「其」。

<sup>591</sup> 「等」、麗本「等事也」。

<sup>592</sup> 「朗」、麗本「明」。

<sup>593</sup> 「編為」、麗本「為編」。



學劉孝孫序之。并『俱舍』・『毘曇』・『大<sup>594</sup>莊嚴』、咸為著疏、合三十一卷。『法華』已下、行用諸要、亦續疏、令成誦之。並注『經集論』、不能委述。

貞觀嗣寶、宰伯咸欽、僕射 玄齡尤所敬重、每有勝集、引諸寮案、預聽法筵、日下當時、以為榮觀之極也。然能事匪一、學罕兼通、淨之陳跡、可謂玄儒並驚。所以吹蕪易發、光華莫不由此。年逾縱心、風疾交集、然猶憑几<sup>595</sup>談寫、敘對時賢。余曾問其疾苦、答云、「淨嘗疾甚、無計可投、承聞病是著因、固當捨著、遂召五眾一切都捨。夜覺有間<sup>596</sup>、曉<sup>597</sup>又重發、依前都捨、疾間亦然。今則七十有餘、生事極矣、安有為命而捨財乎。念念死計、無情財事。昔人年至百歲、猶不體命行無常、今淨<sup>598</sup>悟之、任時而已。」然其恕己謙光、接誘道俗、迎送禮遇、不爽恒倫。至於同法論難、知窮引通、不咎前失、人<sup>599</sup>代即目、聞見自多、故不曲盡、其宗轄・其道化、履歷具見『續高僧傳』。

### 太子中舍『齊物論』并淨琳二法師抗拒事兩首第二十二<sup>600</sup>

太子中舍辛誦、學該文史、誕傲自矜。心存<sup>601</sup>道術、輕弄佛法、染翰著論、詳略釋宗。時有對者、謂必碎之於地、謂僧中之無人也。

慧淨法師不勝其侮、乃裁論以擬之曰、「披覽高論、博究精微、旨瞻文華、驚心眩目。辯超炙輶、理跨聯環、幽難勃以縱橫、揆藻紛其駱驛。非夫哲士、誰其溢心。瞻彼上人、固難與對、輕持不敏、寧酬客難。

來論云、＜一音衍<sup>602</sup>說、各隨類解。蠕動眾生、皆有佛性。然則佛陀之

<sup>594</sup> 「大」、麗本「大乘」。

<sup>595</sup> 「几」、盧本「凡」。

<sup>596</sup> 「間」、盧本「聞」。

<sup>597</sup> 「曉」、麗本「晚」。

<sup>598</sup> 「今淨」、麗本「淨今」。

<sup>599</sup> 「失人」、麗本「人共」。

<sup>600</sup> 「二十二」、麗本「六」。

<sup>601</sup> 「存」、麗本「在」。

<sup>602</sup> 「衍」、麗本「演」。

與先<sup>603</sup>覺、語從俗異；智慧之與般若、義本玄同。習智覺、若非勝因；念佛慧、豈登妙果。＞答曰、＜大哉、斯舉也。深固幽遠、理涉嫌疑、今當為子略陳梗概。若乃問 同答異、文郁郁於孔書、名一義乖、理明明於釋典。若名同不許義異、問<sup>604</sup>一則<sup>605</sup>不得答殊。此例既昇、彼並自沒、如有未喻、更為提撕。夫以住無所住、萬善所以兼修；為無不為、一音所以齊應。豈止絕聖棄智、抱一守雌、冷然獨善、義無兼濟。較言優劣、其可倫乎。二宗既辯、百難斯滯。＞

論云、＜彼<sup>606</sup>此名言、遂可分別。一音各解、乃翫空談。＞答曰、＜誠如來旨、亦須分別。竊以逍遙一也、鵬鷖不可齊乎<sup>607</sup>九萬；榮枯同也<sup>608</sup>、椿菌不可齊乎八千。而況燭火之倖日月、浸灌之方時雨、寧有分同明潤、而遂均其曜澤哉。至若山毫一其大小<sup>609</sup>、彭殤均其壽夭、庭楹亂其橫豎、施厲混其妍媸。斯由相待不定<sup>610</sup>、相奪可忘、莊生所以絕其有封、非於<sup>611</sup>未始無物、斯則以余分別、攻子分別、子亡分別、即<sup>612</sup>余亡分別矣。君子劇談、幸無虛論、一言易失、駟馬難追、斯文誠矣、深可慎哉。＞

論云、＜諸行無常、觸類緣起；復心有待、資氣涉求。然則我淨受於熏修、慧定成於繕剋。＞答曰、＜無常者、故吾去也；緣起者、新吾來也。故吾去矣、吾豈常乎。新吾來矣、吾豈斷乎。新故相傳、假熏修以成淨；美惡更代、非繕剋而難功。是則生滅破彼<sup>613</sup>斷常、因果顯其<sup>614</sup>中觀。斯實莊釋玄同、東西理會、而吾子去彼取此、得無謬乎。＞

論曰、＜續覺截鶴、庸詎真如、草化蜂飛、何居弱喪。＞答曰、＜夫自

<sup>603</sup> 「先」、麗本「大」。

<sup>604</sup> 「問」、麗本「則問」。

<sup>605</sup> 「則」、麗本ナシ。

<sup>606</sup> 「彼」、麗本「必彼」。

<sup>607</sup> 「乎」、麗本「於」。

<sup>608</sup> 「也」、麗本「管」。

<sup>609</sup> 「大小」、麗本「小大」。

<sup>610</sup> 「定」、麗本「足」。

<sup>611</sup> 「非於」、麗本「謂」。

<sup>612</sup> 「即」、麗本「子」。

<sup>613</sup> 「彼」、麗本「於」。

<sup>614</sup> 「其」、麗本「乎」。

然者、報分也；熏修者、業理也。報分已定、二鳥不<sup>615</sup>羨於短長；業理資緣、兩蟲有待而飛化。然則事像易疑、沈冥難曉、幽求之士<sup>616</sup>、淪惑罔息。乃<sup>617</sup>道圓四果、尚昧衣珠、位隆十地、猶昏羅縠。聖賢固其若此、而況庸庸者乎。自非鑒鏡三明、雄飛七辯、安能妙契玄極、敷究幽微。貧道籍以受業家門、朋從是寄、希能擇善、敢進芻蕘。如或鏗然、願詳金牒。＞」於是辛氏頂受斯文、頓裂邪網。

有李遠問舍人者、曾讀斯論、意所未詳、便以示沙門法琳、請更<sup>618</sup>廣其義類。琳乃答曰、

「蒙示辛氏與淨法師『齊物論』、大約兩問、詞旨宏贍、理致幽絕、既開義府、特曜文鋒。舉佛性平等之談、引群生各解之說、陳彼此之兩難、辯玄同之一門<sup>619</sup>。非夫契彼寰中、孰能振斯高論。美則美矣、疑頗疑焉。何者？尋上皇朝徹、始流先覺之名；法王應物、爰標佛陀之號。智慧者、蓋分別之小術；般若者、乃無知之大宗。分別緣起、所以強稱先覺、無知性寂、於是假謂佛陀。分別既於外有數、無知則於內無心。於外有數、分別之見不忘<sup>620</sup>；於內無心、誘引之功莫匱。甚秋毫之方巨嶽、踰尺鷃之比大鵬、不可同年而語矣。莊生云、吾亡是非、不亡彼此。庸詎然乎。所以小智不及大智、小年不及大年。惟彭祖之特聞、非眾人之所逮也。況三世之理不差、二諦之門可驗。是以聖立因果、凡夫有得聖之期；道稱自然、學者無成道之望<sup>621</sup>。從微至著、憑繕剋而方研<sup>622</sup>；修<sup>623</sup>因趣果、籍熏修而始見。彼既知而故問、余亦述而略答。詳夫一音普被、弱喪由是同歸；四智廣覃、真如以之自顯。自顯也者、惟微惟彰；同歸也者、孰來孰去。蓋知隨業受報、二鳥不嫌其短長；因濕致生、兩蟲無擇於飛化。不存待與無

<sup>615</sup> 「不」、麗本「無」。

<sup>616</sup> 「士」、麗本「土」。

<sup>617</sup> 「乃」、麗本「至乃」。

<sup>618</sup> 「更」、麗本ナシ。

<sup>619</sup> 「門」、麗本「問」。

<sup>620</sup> 「忘」、麗本「亡」。

<sup>621</sup> 「望」、麗本「聖」。

<sup>622</sup> 「研」、麗本「妍」。

<sup>623</sup> 「修」、麗本「乘」。

待、明即待之、非待矣。請試論之。

昔闕澤有言、＜孔老法天、諸天法佛。洪範九疇、承天制用；上方十善、奉佛慈風。＞若將孔老以匹聖尊、可謂子貢賢於仲尼、跛鼃陵於駿驥。欲觀渤海、更保涓流、何異蔽目而視毛端、却行以求郢路、非所應也、非所應也。且王導・周顗、宰輔之冠蓋；王濛・謝尚、人倫之羽儀、次則王謐・郗超<sup>624</sup>・劉琨・謝容等、並江左英彥。七十餘人、皆學綜九流、才映千古、咸言性靈真要、可以持身濟俗者、莫過於釋氏之教。及宋文帝與何尚之・王玄保等、亦有此談、如其<sup>625</sup>＜宇內並遵斯要、吾當坐致太平矣＞。尚之又云、＜十善暢、則人天興；五戒行、則鬼畜絕。其實濟世之玄範、豈造次而可論乎。＞中舍學富才高、文華理切、秦懸一字、蜀掛千金、何以當茲奇麗也。不量管見、輕陳鄙俚、敢此有酬、以麻續組耳。」李舍人得琳重釋、渙然神解、重疑頓消。

仍以斯論、廣於視聽、故得二文雙顯、各其志乎。

### 太宗文皇帝問沙門法琳交報顯應事第二十三<sup>626</sup>

貞觀十四年、先有黃巾西華觀秦世英者、挾方術以自媚、因程器於儲兩、素嫉釋宗。陰上法琳所造之論云、「此『辯正』但欲謗訕皇宗、罪當調上。」太宗聞之、便下勅沙汰僧尼、貌減年齒。使御史韋棕・將軍于伯億、并寺省州縣官人、日別鴻臚、檢閱情狀、見有眾僧、宜依遺教。仍追訪琳身、據法推勘。琳扼腕奮發、追徵未及、即詣公庭、輕生答對、不懼性命、乃繫<sup>627</sup>之縲紲。

下詔問曰、「周之宗盟、異姓為後、尊祖重親、實由先古、何為追逐其短、首鼠兩端、廣引形似之言、備陳不遜之喻、爬毀我祖禰、謗讟我先人。如此要君、罪有不恕。」

琳答曰、「文王大聖、周公大賢、追遠慎終、昊天靡答。孝悌之至、通於神明。雖有宗周、義不爭長。何者皇天無親、竟由輔德。古人黨理而不

<sup>624</sup> 「王謐郗超」、麗本「郗超王謐」。

<sup>625</sup> 「其」、麗本ナシ。

<sup>626</sup> 「二十三」、麗本「七」。

<sup>627</sup> 「繫」、麗本「繫」。

黨親、不自我先、不自我後。雖親、有罪必罰、雖疎、有功必賞、賞罰理當、故天下和平。老子習訓、道宗德教、加於百姓、恕己謙光、仁風形<sup>628</sup>于四海。」又云、「吾師名佛、佛者覺一切人也。乾竺古皇、西昇逝矣、討尋老教、始末可追、日授中經、示誨弟子、言吾師者、善入泥洹、綿綿常存、吾今逝矣。今劉李所述、謗滅老氏之師、世莫能知、所以著茲『辯正論』有八卷、略對道士六十餘條、並陳史籍、前言實非謗毀家國。自後辨對三<sup>629</sup>十餘列、具狀奏聞。」

勅云、「所<sup>630</sup>著『辯正論・信毀交報篇』曰、＜有念觀音者<sup>631</sup>、臨刃不傷＞、且放<sup>632</sup>七日、令爾念之、試及刑期、能無傷不。」琳外纏桎梏、內迫刑期、水火<sup>633</sup>交懷、惟祈顯應。恰至限滿、忽神思彰勇、橫逸胸懷、頓亡死畏、立待追對。須臾勅至云、「今赦期已滿、即事加刑、有何所念、念有靈不。」琳答曰、「自隋季擾攘、四海沸騰、毒疫<sup>634</sup>流行、干戈競起、興師相伐、各擅兵威、臣佞君荒、不為正治、遏絕王路、固執一隅。自皇王吊伐、載清海陸、斯實觀音之力、咸資勢至之功。比德連衡、道齊上聖、救橫死於帝庭、免淫刑於都市。琳於七日已來、不念觀音、惟念陛下。」又勅詔<sup>635</sup>書侍御、韋棕問琳、「有詔令念觀音、何因不念、乃云惟念陛下。」琳答、「伏承觀音聖鑒、塵形六道、上天下地、皆為師範。然大<sup>636</sup>唐光宅四海九夷、奉職八表刑清、君聖臣賢、不為枉濫。陛<sup>637</sup>下子育、恒品如經、即是觀音。既其靈鑒相符、所以惟念陛下。且琳<sup>638</sup>著『辯正論』、爰與書史符同、一句參差、任從斧鉞。陛下若順忠順正、琳則不損一毛、陛

<sup>628</sup> 「形」、麗本「刑」。

<sup>629</sup> 「辨對三」、麗本「二」。

<sup>630</sup> 「所」、麗本「汝所」。

<sup>631</sup> 「者」、麗本ナシ。

<sup>632</sup> 「放」、麗「赦」。

<sup>633</sup> 「水火」、麗本「冰炭」。

<sup>634</sup> 「毒疫」、麗本「役毒」。

<sup>635</sup> 「詔」、麗本「治」。

<sup>636</sup> 「大」、麗本ナシ。

<sup>637</sup> 「陛」、麗本「今陛」。

<sup>638</sup> 「琳」、麗本「琳所」。

下若刑濫無辜、琳則有伏屍之痛。」以狀奏聞、遂不加罪。下勅徙於益部僧寺。

於時朝廷上下、知英構扇、御史韋 悰、審英飾詐。疑陽陳<sup>639</sup>俗、乃奏彈曰、「竊以大道鬱興、沖虛之跡 斯闡；玄風既播、無為之教實隆。未有身預黃冠、志同凡 素者也。道士秦英、頗解<sup>640</sup>醫方、薄閑咒 禁、親戚寄命、羸疾投身。姦姪其妻、禽獸不若；情違正教、心類豺狼。逞貪競之懷、恣邪穢之行。家藏妻子、門有姬童、乘肥衣輕、出入衢路、揚眉奮 袂、無憚憲章。健羨未忘、觀<sup>641</sup>傲 在慮。斯原不殄、至教或<sup>642</sup>虧、請置嚴科、以懲姪侈。」有勅追入大理、竟以狂狷被誅、公私同知賊惡、怪其死晚。可謂賊夫人之子、於斯見矣。

#### 文帝幸弘福寺立願重施敘佛道先後第二十四<sup>643</sup>

貞觀十五年五月十四日、太宗文帝躬幸弘福寺、於時僧眾 並出、虞候遠關。勅召大德五人、在寺內堂中坐訖、具敘立寺所由。意存太穆皇后、哀淚橫流、僧並垂淚<sup>644</sup>。

乃手製願文曰、「皇帝菩薩戒弟子、稽首和南十方諸佛菩薩・聖僧・天龍大眾。若夫至理凝寂、道絕名言、大慈方便、隨機攝誘。濟苦海以智舟、朗重昏以慧日。開曉度脫、不可思議。弟子夙罹愆戾、早嬰偏罰。追惟撫育之恩、每念慈顏之遠、泣血崩心、永無逮及。號天蹙地、何所厝身。歲月不居、炎涼亟 改、荼毒之痛、在乎粉骨<sup>645</sup>。敬養已絕、萬恨不追、冤酷之深、百身何贖。惟以丹誠、歸依三寶、謹於弘福道場奉施齋供、并施淨財、以充檀捨、用斯<sup>646</sup>功德、奉為先靈。願心悟無為<sup>647</sup>、神遷妙喜、策紺

<sup>639</sup> 「陳」、麗本「庶」。

<sup>640</sup> 「解」、麗本「學」。

<sup>641</sup> 「傲」、麗本「緻」。

<sup>642</sup> 「或」、麗本「式」。

<sup>643</sup> 「第二十四」、麗本「事第八」。

<sup>644</sup> 「淚」、麗本「泣」。

<sup>645</sup> 「粉骨」、麗本「茲日」。

<sup>646</sup> 「斯」、麗本「其」。

<sup>647</sup> 「為」、麗本「生」。

馬以入香城、躡金階而昇寶殿、遊玩法樂、逍遙淨土、永蔭法雲、常喰甘露、疾證菩提、早登正覺。六道四生、並同斯願。」

帝謂僧曰、「比以老君是朕先宗、尊祖重親、有生之本、故令在前、師等<sup>648</sup>應悵悵。」寺主道懿奉對、「陛下尊重祖宗、使天下成式、僧等荷國重恩、安心行道。詔旨行下、咸大歡喜、豈敢悵悵。」

帝曰、「朕以先宗在前、可即大於佛也。自有國已來、何處別造道觀。凡有功德、並歸寺家、國內戰場之始、無不一心歸命於佛。今天下大定、戰場之地、並置佛宇<sup>649</sup>、乃至本宅先妣、惟<sup>650</sup>置佛寺。朕敬有處、所以盡命歸依、師等宜悉朕懷。彼道士者、止是師習先宗、故位在前。今李家據國、李老在前、若釋家治化、則釋門居上、可不平也。」

僧等起謝。帝曰、「坐。此<sup>651</sup>是弟子意耳、不述不知。天時大熱、房宇窄狹、若為居住、今有施物、可造後房、使僧等寬展行道。」餘言多不載、事訖還宮。

### 太宗下勅以道士『三皇經』不足傳授令焚除事第二十五

貞觀二十二年十月、有吉州上表云、「有事天尊者、行三皇齋法。依檢其經、乃云＜欲為天子、欲為皇后者、可讀此經。＞據此言及國家、檢田令云、＜道士通三皇<sup>652</sup>者、給地三十畝。＞檢公式令、＜諸有令式不便者、奏聞此三皇經。＞」文言有異、具錄以聞。

有勅令百官議定、「依追道士張惠元、問有此言不、惠元答云、＜此處『三皇經』並無此言、不知遠州何因有此。然為之一字、聲有平去。若平聲讀之、誠如所奏、若去聲讀之、此乃為國、於理無妨。＞臣等以為惠元所說、不乖勸善。然此經中、天文大字・符圖等、不入家籍<sup>653</sup>、請除、餘

<sup>648</sup> 「等」、麗本「等大」。

<sup>649</sup> 「宇」、麗本「寺」。

<sup>650</sup> 「惟」、麗本「唯」。

<sup>651</sup> 「此」、麗本ナシ。

<sup>652</sup> 「皇」、麗本「皇經」。

<sup>653</sup> 「家籍」、麗本「篆籀」。

者請留。」吏部楊纂等議云、「依讀<sup>654</sup>『三皇經』、全<sup>655</sup>與老子『道德經』義類不同、並不可留、以惑於後。」

勅旨、「其『三皇經』並收取焚之、其道士通『道德經』者給地三十畝。」仍著令。於時、省司下諸州收『三皇經』、並聚於尚書禮部廳前、于尚書試以火焚<sup>656</sup>、一時灰燼。

昔宋時鮑靜初造『三皇』被誅、今仍宗尚、改「三皇」為「三洞」、妄立天文大字、惑誤昏俗、其詐顯然、迷者不覺。今遇大唐聖帝、體其偽妄、故此焚除。近如大業末年、京師五通觀道士輔慧詳、三年不言、改『涅槃<sup>657</sup>』為『長樂經』、將欲入山巖中。於時條制不許出城門、候見其內著黃衣、又獲新經、執送留守。及至勘校、改經事實、尚書衛文昇、以狀奏聞、於金光門外戮之。耳目生靈、之所<sup>658</sup>同委、其覺者如此、不覺者有之。然彼輒爾制經、寫於藏篋、無人檢勘、誰辯偽真。且所造者、文義淺俗、濫引佛經、讀者無味、不足觀採。至如『南華』、幽求固是、命家之作、不可及<sup>659</sup>。

#### 文帝詔令契法師翻老子為梵文與道士辯覆<sup>660</sup>事第二十六<sup>661</sup>

貞觀二十一年、西域使李義表還、奏稱、東天竺童子王所、未有佛法、外道宗盛。臣已告云、「支那大國、未有佛教已前、舊有得道<sup>662</sup>人說經、在俗流布。但此文不來、若得聞者、必當信奉。」彼王言、「卿還本國、譯為梵言、我欲見之。必道越此徒、傳通不晚。」登即下勅、令契<sup>663</sup>法師與諸道士、對共譯出。

<sup>654</sup> 「讀」、麗本「識」。

<sup>655</sup> 「全」、麗本「今」。

<sup>656</sup> 「焚」、麗本ナシ。

<sup>657</sup> 「槃」、麗本「槃經」。

<sup>658</sup> 「之所」、麗本「所共」。

<sup>659</sup> 「及」、麗本「及也」。

<sup>660</sup> 「與道士辯覆」、麗本ナシ。

<sup>661</sup> 「二十六」、麗本「十」。

<sup>662</sup> 「道」、麗本「聖」。

<sup>663</sup> 「契」、麗本「玄契」。



於時道士蔡晃・成英二人李宗之望、自餘鋒穎三十餘人、並集五通觀、日別參議、詳覈『道德』。桀乃句句披析、窮其義類、得其旨理、方<sup>664</sup>為譯之。諸道士等並引用佛經、『中』・『百』等論、以通玄極。

桀曰、「佛教道教、理致天乖、安用佛理通明道義。」如是言議往還、累日窮勦。出語濩落、的據無從。或誦四諦四果、或誦無得無待、名聲雲誦、寶聖俱靈<sup>665</sup>。桀曰、「諸先生何事遊言、無可尋究。向說四諦四果、道經不明、何因喪本、虛談『老子』。且據四諦一門、門有多義、義理難曉、作論辯之。佛教如是、不可陷倫。向問四諦、但答其名、諦別廣義、尋問莫識、如何以此欲相抗乎。道經明道、但是一義、又無別論用以通辯、不得引佛義宗、用解『老子』、斯理定也。」晃遂歸情曰、「自昔相傳、祖承佛義、所以『維摩』『三論』晃素學宗、致令吐言命旨、無非斯理。且道義玄通、洗情為本、在文雖異、厥趣攸同、故引解之、理例無爽。如僧肇著論、盛引老莊、成誦在心、由來不怪。佛言似道、如何不思。」桀曰、「佛教初開、深經尚壅<sup>666</sup>、老談玄理、微附虛懷、盡照落筌、滯而未解。故『肇論』序致、聯類喻之、非謂比擬、便同涯極。今<sup>667</sup>經正論、繁富人謀、各有司南、兩不諧會。然老之『道德』、文止五千、無論解之。但有群注、自餘千卷、事雜符圖、蓋張葛之耳附、非老君之氣叶。又『道德』兩卷、詞旨沉深、漢景重之、誠不虛及。至如何晏・王弼・嚴遵・鍾會・顧歡・蕭繹・盧景裕・韋處玄之流、數十餘家、注解老經、指歸非一。皆推涉俗理、莫引佛言、如何棄置舊蹤、越津釋府。將非探蹟過度、失<sup>668</sup>混沌之竅耶。」

於是諸徒無言以對、遂即染翰綴文。厥初云道、此乃人言、梵云末伽、可以翻度。道<sup>669</sup>士等一時舉袂曰、「道翻末伽、失於古譯。古稱菩提、此謂為道、未聞末伽以為道也。」桀曰、「今翻『道德』、奉勅不輕、須覈方言、

<sup>664</sup> 「方」、麗本「名」。

<sup>665</sup> 「誦寶聖俱靈」、麗本「誦實質俱虛」。

<sup>666</sup> 「壅」、麗本「擁」。

<sup>667</sup> 「今」、麗本「令佛」。

<sup>668</sup> 「失」、麗本「同夫」。

<sup>669</sup> 「道」、麗本「諸道」。

乃名傳旨。菩提言覺、末伽言道、唐梵音義、確爾難乖、豈得浪翻、冒罔天聽。」道士成英曰、「佛陀言覺、菩提言道、由來盛談、道俗同委、今翻末伽、何得非妄。」契曰、「傳聞濫真、良談匪惑。未達梵言、故存恒習。佛陀西<sup>670</sup>天音、唐言覺者、菩提天語、人言為覺。此則人法 兩異、聲采 全乖。末伽為道、通國齊 解、如不見信、謂是妄 談。請以此語問彼西人、足所行道、彼名何物、非末伽者、余是罪人。非唯<sup>671</sup>罔 上、當時乃<sup>672</sup>取笑天下。」自此眾鋒一時潛退、便譯盡文。

河上序胤、闕而不出。成英曰、「老經幽祕、聞必具儀、非夫序胤、何以開悟。請為翻度、惠彼邊戎。」契曰、「觀老存身存國之文、文 詞具矣。叩齒咽液之序、序實驚人。同巫覡之姪哇、等禽獸之淺術、將恐西關異國、有愧卿邦。」英等不愜其情、以事陳諸朝宰、中書馬 周曰、「西域 有道如李莊不。」答曰<sup>673</sup>、「彼土尚道、九十六家、並厭形骸為桎梏、指神我為聖本。莫不淪滯、情有致使、不拔我根。故其陶練精靈、不能出俗、上極非想、終墜無間。至如順俗四大之術、冥初六諦之宗、東夏老莊所未言也。若翻老序、彼必以為笑林。契告忠誠、如何不相體悉。」當時中書門下同僚、咸然此述、遂不翻之。

契姓陳氏、潁川人也。後葉居於兩河、以慧解馳名。周行嶽瀆、承梵學富、誓欲<sup>674</sup>博求。以貞觀初入關、住莊嚴寺、學梵書語、不久並通。上表西行、有司不許。因<sup>675</sup>間行、遠詣天竺、三年方達。所在王臣高勝、無不重之。經十餘年、備獲經論、旋於京邑。天子降禮、賜以優言。貞觀末年、敬重尤甚。常處內禁、行往畢隨。永徽已來、不爽前敬。常以翻譯而為命家、今在北山玉華宮寺、領徒翻經、勤注不絕。然其高行不可具陳、別有大傳、廣文如彼<sup>676</sup>。

<sup>670</sup> 「西」、麗本ナシ。

<sup>671</sup> 「唯」、麗本「惟」。

<sup>672</sup> 「乃」、麗本「亦乃」。

<sup>673</sup> 「曰」、麗本ナシ。

<sup>674</sup> 「欲」、麗本「願」。

<sup>675</sup> 「因」、麗本「因遂」。

<sup>676</sup> 「彼」、麗本「後」。

自<sup>677</sup>永徽嗣曆、屢發深衷、降意佛宗、徵延論道。覽前王之逸軌<sup>678</sup>、追賢達之行 事。宋 魏兩朝、咸興談述；周隋接運、俱暢論衡。然則晉氏南遷、以釋宗為命<sup>679</sup>族；魏朝北有、齊縉黃而等駕。由是江表、談玄規猷。自隔關河語極、溜澀一亂、所以屢有揚激、教義殊途。雖事拒輪、終歸陷網。雲泥路絕、聲采罕追；人代致混、論辯韜隱<sup>680</sup>。顧斯陳述、不逸<sup>681</sup>懷悼。致有黃巾、被責緘默。當時彼<sup>682</sup>出論場、昌言我勝、未登席者、隨言信之。輒以所聞、敘斯實錄。事連宸極、故絕浮詞。

集古今佛道論衡實錄卷第三 疑

<sup>677</sup> 「自」、麗本「集古今佛道論衡卷丁、唐西明寺釋氏。今上召佛道二宗入內詳述名理事一條、上以西明寺成召僧道士入內論義事一條、上以冬雪未降內立齋祀召佛道二宗論義事一條、上幸東都召西京僧道士等於彼論義一條、上在東都令洛邑僧靜泰與道士李榮對論一條、上在西京蓬萊宮令僧靈辯與道士對論一條、又在司成宣 范義頤宅難莊易義一條」。

<sup>678</sup> 「軌」、麗本「典」。

<sup>679</sup> 「命」、麗本「令」。

<sup>680</sup> 「韜隱」、麗本「韜陷」。

<sup>681</sup> 「逸」、麗本「無」。

<sup>682</sup> 「彼」、麗本「後」。

## 集古今佛道論衡實錄卷第四 疑

唐釋 道宣撰

今上召佛道二宗入内詳述名理事第二十七<sup>683</sup>上以西明寺成召僧道士入内論義事第二十八<sup>684</sup>上以冬雪未降内立齋祀召佛道二宗論義事第二十九<sup>685</sup>上幸東都召西京僧道士等於彼論義事第三十<sup>686</sup>上在東都令洛邑僧靜泰與道士李榮對第三十一<sup>687</sup>上在西京蓬萊宮令僧靈辯與道士對第三十二<sup>688</sup>又在司成宣范義頤宅難莊易義第三十三<sup>689</sup>今上召佛道二宗入内詳述名理事第二十七<sup>690</sup>

顯慶三年四月下勅、追僧及<sup>691</sup>道士各七人、入内論義。時會隱法師立<sup>692</sup>五蘊義、神泰法師立九斷知義。道士黃頤<sup>693</sup>・李榮・黃壽等、次第論義。並以莫識名體、茫如夢海、雖事往返、寥<sup>694</sup>落無歸。次下勅遣道士豎義、李榮立道生萬物義。大慈恩<sup>695</sup>僧慧立登論座。先敘云、「皇帝皇后、神功聖德、遠夷順化、宇内肅清。豈直掩映軒義、亦乃牢籠周漢<sup>696</sup>。」又嘆仰佛化、歆濟黎元、文多不載。

---

<sup>683</sup> 「第二十七」、麗本「一條」。

<sup>684</sup> 「第二十八」、麗本「一條」。

<sup>685</sup> 「第二十九」、麗本「一條」。

<sup>686</sup> 「第三十」、麗本「一條」。

<sup>687</sup> 「第三十一」、麗本「一條」。

<sup>688</sup> 「第三十二」、麗本「一條」。

<sup>689</sup> 「第三十三」、麗本「一條」。

<sup>690</sup> 「二十七」、麗本「一」。

<sup>691</sup> 「及」、麗本ナシ。

<sup>692</sup> 「立」、麗本「豎」。

<sup>693</sup> 「頤」、麗本「頤」。

<sup>694</sup> 「寥」、麗本「牢」。

<sup>695</sup> 「恩」、麗本「恩寺」。

<sup>696</sup> 「漢」、麗本「漢云云」。

便問榮云、「先生立<sup>697</sup>＜道生萬物＞、未知此道為是有知、為是無知。」答曰、「道經云＜人法地、地法天、天法道＞、既為天地之法、豈曰無知。」難曰、「向敘道為萬物之母、今度萬物不由道生、何者。若使道是有知、則唯<sup>698</sup>生於善、何故亦生於惡。據此善惡昇沈、叢雜總生、則無知矣。如不通悟、請廣其類。至如人君未<sup>699</sup>開闢之時、何不早生今日。聖主子育黔黎、與之榮樂、乃先誕共工・蚩尤・桀紂・幽厲之徒、而殘酷群生、授以塗炭。人臣之中、何不唯<sup>700</sup>生稷契<sup>701</sup>・夔龍之輩、而復生飛廉・惡來、斬尚新王之侶、諛諂其君、令邦國危亂哉。羽族之中、何不唯生鸞鳳善鳥、而復生梟鏡<sup>702</sup>惡禽<sup>703</sup>乎。毛群之中、何不惟生騏驎・驊騮<sup>704</sup>、而復生豺狼豪蝮乎。草木之中、何不唯生松柏・梓桂・蕙蓀・蘭菊、而復生櫛櫪・樗棘・葶艾・蒺藜<sup>705</sup>乎。既而混生萬物、不鑄善惡、則道是無知、不能生物。何得云天地取法、而為萬物之<sup>706</sup>宗始乎。據我如來大聖、窮理盡性之教也、天地萬物皆<sup>707</sup>是眾生業力所感。善業多者、則瑠璃為地、黃金界道、瓊枝蔭陌、玉葉垂空、甘露充糧、綺衣為座。惡業多者、則砂<sup>708</sup>壤為土、瓦礫為衢、稗飯充虛、麻衣被體、泥行雨宿、霜糝暑耘。日夜驅馳、以供公府。皆自業自作、無人使之。吾子心愚不識、橫言道生。道實不生、一何可愍。」李榮得此一徵、愕然不知何對。立時乘機拂弄、榮亦杜口默然、於是赦然下座。

<sup>697</sup> 「立」、麗本「云」。

<sup>698</sup> 「唯」、麗本「惟」。

<sup>699</sup> 「未」、麗本「之中」。

<sup>700</sup> 「唯」、麗本「惟」。

<sup>701</sup> 「契」、麗本「偃」。

<sup>702</sup> 「鏡」、麗本「鷲」。

<sup>703</sup> 「禽」、麗本「鳥」。

<sup>704</sup> 「驊騮」、麗本「馬騮」。

<sup>705</sup> 「藜」、麗本「茨」。

<sup>706</sup> 「之」、麗本「皆之」。

<sup>707</sup> 「皆」、麗本ナシ。

<sup>708</sup> 「砂」、麗本「沙」。

次道士黃壽登座、豎老子名義、會隱法師將事整容、與其抗論。夫<sup>709</sup>唯論難之體、褒貶為先、恐難道名、有所觸誤、即奏云、「黃壽身預黃冠、不知忌諱。城狐社鼠、徒事依憑。國家遠承龍德之後、陛下即<sup>710</sup>老<sup>711</sup>君子<sup>712</sup>孫。豈有對人之孫、公談祖禰之名字。至如五千文內、大有好義、不能標列、而說聖人之名。計罪論刑、黃壽死有餘及。」於時<sup>713</sup>蒙勅云、「是更豎別義。」壽因此挫銳、流汗失圖、難<sup>714</sup>事言對、次序乖越。遞相擊論、遂至逼暝。僧等見將燭來、便起辭退。

勅曰、「向<sup>715</sup>觀師等兩家義論<sup>716</sup>、宗旨未甚分明。」立遂奏云、「向來兩家議論、宗旨不明、誠如聖旨。何者。眾僧豎義、道士不識其源。既恥無言、遂讎<sup>717</sup>闢漫語。如<sup>718</sup>僧豎五蘊義、黃蹟以蔭名來難、且蔭以覆蓋為宗、蘊以積聚為義。如色有二<sup>719</sup>十一聚、在色名之下；識有八種聚、在一名之下、舉統以收、稱為蘊義。若以蔭名來難、義理全乖。又神泰豎九斷知義、道士生來未聞此名。雖上論座、不知發問之處、無以遮差、遂浪作餘語。真可謂欲適南越、而總轡北冥。馬足雖行朔方、終非趣越之步。李榮浪語、亦復如是。由是宗旨不明、塵黷聖聽、過在道士。然佛法大宗、因緣為義、故論云＜未曾有一法不從因緣生＞、且如眼觀<sup>720</sup>殿柱、須具五緣、一識心不亂、二眼根不壞、三藉以光明、四有境現前、五中間無障。必具此緣、方得見柱。若使曦<sup>721</sup>光已沒、龍燭未明、縱有朱楹、何由可

<sup>709</sup> 「夫」、麗本「立」。

<sup>710</sup> 「即」、盧本ナシ。

<sup>711</sup> 「老」麗本「李老」。

<sup>712</sup> 「子」、麗本「之」。

<sup>713</sup> 「時」、麗本「是」。

<sup>714</sup> 「難」、麗本「雖」。

<sup>715</sup> 「向」、麗本「向來」。

<sup>716</sup> 「義論」、麗本「論義」。

<sup>717</sup> 「讎」、盧本「讎」、麗本「鏜」。

<sup>718</sup> 「如」、麗本「至如」。

<sup>719</sup> 「二」、麗本ナシ。

<sup>720</sup> 「觀」、麗本「見」。

<sup>721</sup> 「曦」、麗本「羲」。

見。又如穀<sup>722</sup>子、陽和之月、遇水土人功、則能生芽。夏盛甕裏、冬委地中、緣不具故、畢竟不生。人亦如是、內則業惑為因、外則父母為緣、身方得生。父母乖各、終不能<sup>723</sup>生。如是禽魚鳥獸、萬物皆爾、從因緣生。故經云、＜深入緣起、斷諸邪見、有無二邊、無復餘習。＞以佛智慧、窮法實相、是故號佛為無等覺、為天人師。外道之輩、則不如是、皆悉邪網覆心、倒針刺眼。或言、諸法自然而生、即是此方莊老<sup>724</sup>之義。或言<sup>725</sup>從自在天生、或言<sup>726</sup>韋紐天生<sup>727</sup>、或言無因、或言宿作、此並西方異道之計也。皆不知法本、不識因緣、信意放言、誑誤蒙俗、致使天人惑其飾詐。」

又對聖上說三性義、一遍計性、二依他起性、三圓成實性。外道所立、遍計性收、事等空花、由來非有、廣解三性、言多不具。

自上<sup>728</sup>起來、經過食頃、僧及道士陪侍、臣僚<sup>729</sup>兩行立聽。時既夜久、息言奉辭、勅云「好去」、各還宿所。經停少時、勅使出<sup>730</sup>云「語師等因緣義大好、何不早論。」于時三藏已下、莫不欣慶。斯則無勞廣<sup>731</sup>略、碎蕩高旗、不藉軍威、堅城屠陷、見之今日矣。于時以道士不識蘊蔭斷知等義、莫允帝情。散席之後、承內給事王君德云、「勅語道士等何不學佛經。」因斯以言釋李宗人、學業優劣、辯給通塞、實錄如前、貧富之懷、亦具瞻矣。

<sup>722</sup> 「穀」、麗本「禾子穀」。

<sup>723</sup> 「能」、麗本「得」。

<sup>724</sup> 「莊老」、麗本「老莊」。

<sup>725</sup> 「言」、麗本「言諸法」。

<sup>726</sup> 「或言」、麗本ナシ。

<sup>727</sup> 「生」、麗本「生冥性生」。

<sup>728</sup> 「上」、盧本「土」。

<sup>729</sup> 「僚」、麗本「僚佐」。

<sup>730</sup> 「出」、麗本「告」。

<sup>731</sup> 「廣」、麗本「廟」。

上以西明寺成功徳圓滿佛僧創入榮泰所期、又召僧道士入内殿躬御論場觀  
其義理事第二十八<sup>732</sup>

顯慶三年六月十二日、西明寺成、城郭道俗雲合、幢蓋嚴華。明辰<sup>733</sup>良日、將欲入寺。簫鼓振地、香華亂空。自北城之達<sup>734</sup>南寺十餘里中<sup>735</sup>、街衢闐闐。至十三日清旦、帝御安福門上、群公僚佐、備列于下。内出繡像・長旛、高廣驚於視聽。從於大街、沿路南往、並皆御覽、事訖方還。

尋即下勅、追僧・道士各七人入。上幸百福殿、内官引僧在東、道士在西、俱時上殿。帝曰、「佛道二教、同歸一善。然則梵境虛寂、為於無為；玄門深奧、德於不德。師等栖誠碧落、學照古今、志契寶坊、業光空有、可共談名理、以相啟沃。」慧立奉對、「陛下叡性、自天欽明纂曆、九功包於虞夏、七徳冠於嬴劉、遂使天平地成、遐安邇肅。既而寓内無事、垂慮玄門、爰詔緇黃、考覈名理。但僧道士等、輕生多幸、濫沐恩光、遂得屢入金門、頻昇玉砌。所恐聞見寡狹、詞韻庸疎、虛煩聽覽、不足觀採、伏增悚汗。」

降勅云、「好、師等依位坐。」又勅云、「師可一人登<sup>736</sup>座開題。」時清都觀道士張惠元奏云、「周之宗盟、異姓為後。陛下宗承柱下、今日堅義、道士不得不先。又夷夏不同、客主位別、望請道士於先上座。」帝沈默久之。立遂奏曰、「竊尋諸佛如來、徳高眾聖、道冠人天。為三千大千之獨尊、作百億四洲之慈父、引迷拯溺、惟佛一人。此地未出娑婆、即是釋迦之兆域、惠元何得濫言客主、妄定華夷。伏惟陛下、屈初地之尊、光臨瞻部、受佛付囑、顯揚聖化。爰慈燈於暗室、浮慧舸於苦流。書云＜皇天無親、惟徳是輔＞、蓋此之謂歟。惠元邪說、未可為依。」勅云、「好、更遞<sup>737</sup>上仍僧為先。」

<sup>732</sup> 「十八」、麗本ナシ。

<sup>733</sup> 「辰」、麗本「晨」。

<sup>734</sup> 「達」、盧本「遠」。

<sup>735</sup> 「中」、麗本「十」。

<sup>736</sup> 「登」、麗本「上」。

<sup>737</sup> 「遞」、麗本「遣」。



爾時會隱法師昇座、堅四無畏義。道士七人、各陳論難。無足敘之、事在別傳。

次道士李榮、開六洞義、擬佛法六通為言。立昇論席、問榮六洞名數。答訖、徵云、「夫言洞者、豈不於物通達、無壅<sup>738</sup>義耶。」答云、「是。」難曰、「若使於物通達無擁、名洞未委、老君於物得洞以不。」答云、「是、老君上聖、何得非洞。」徵曰、「若使老君於物通洞者、何故道經云＜天下大患、莫若有身、使我無身、吾何患也＞。據此、則老君於身尚礙、何能洞於萬物。」榮云、「師緩莫過相陵轢。榮在蜀日、已聞師名、不謂今在天堂、得親談論。共師俱是出家人、莫苦事<sup>739</sup>非駁。」立報曰、「觀先生此語、似索孤息。古人云＜黃塵之下、不許借稍＞、乍可出外別敘暄涼、此席終須定其邪正。向云與立同是出家、檢形計<sup>740</sup>事、焉可同耶。先生鬢髮不剪、褲袴未除；手把桃符、腰懸赤袋；巡門厭鬼、歷巷摩兒。本不異淫祀邪巫、豈得同我清<sup>741</sup>虛釋子。」李榮大怒云、「汝若以翦髮為好、何不剔眉。」立曰、「何為剔眉。」榮曰、「一種毛故。」立曰、「一種是毛、剔髮亦剔眉。卿亦一種是毛、何為角髮不角髭。」榮遂杜默無對。立調曰、「昔平津困於十難、李榮死於一言。論德立謝、古人論功、無慚往哲。」於是<sup>742</sup>即避席。主人<sup>743</sup>解頤大笑、次後諸僧與論。時熱、坐久恐勞、且辭主上<sup>744</sup>。勅云、「好。」遂散還寺。

觀三藏玄奘在西明寺度僧、不在論席。十四日平旦、勅使報奘云、「七僧入內與道士論議、五人論道<sup>745</sup>大勝、幽州師最好。兩人雖未論議、亦應例是勝也。」

<sup>738</sup> 「壅」、盧本「擬」、麗本「擁」。

<sup>739</sup> 「事」、麗本「相」。

<sup>740</sup> 「計」、麗本「討」。

<sup>741</sup> 「清」、麗本「情」。

<sup>742</sup> 「是」、麗本ナシ。

<sup>743</sup> 「人」、麗本「上」。

<sup>744</sup> 「且辭主上」、麗本「主上且辭」。

<sup>745</sup> 「道」、麗本ナシ。

立姓趙氏、其先百<sup>746</sup>益之後<sup>747</sup>、益孫造、父有功於周穆王、封於趙城、遂因氏焉。趙衰・趙盾即其遠祖、隨宦東西、故為北地之新平人也。祖禮周太中大夫平東將軍、上柱國龍門侯。父毅隨祕書郎司隸刺史、崇儒好道、撰『文帝起居注』二十五卷、『大業略記<sup>748</sup>』三卷、並藏祕閣。董狐直筆、公有之矣、立即司隸第三子也。

幼鍾茶毒、有叔照法師、攜接慈育、年十五、貞觀三年出家、住幽州昭仁寺、擁以公貫、無由遠學。生知特達、不染俗流、志仰前良、謀猷慧解。洒假借經史、內外披尋、自強不息、通鏡今古。一坐北荒、二十餘載、聲榮藉甚、曜逸京阜。慈恩譯經、通訪巖穴、以文辯騰譽、致此徵延。永徽元年、舉以申省、依追參譯。既染芝蘭、芬郁逾美。自到帝京、頻登闕<sup>749</sup>輦、潔齋行道、率先總至。所以導達功業、咸立之能、光輝<sup>750</sup>論道、咸立之力、前後重錫、備顯僧倫。既非教元、略而不述。然其聲辯包富、寫送雲行、事逾宿構、蓋難與競。遂使挫拉強禦、傾倒帝前、顧問此何人斯。答曰、「其本幽州僧也。」所以帝偏眄睞允、副遺頻造<sup>751</sup>。契云、「幽州師大好。」斯言有旨。至七日<sup>752</sup>內、勅鴻臚卿韋慶儉、補充西明寺都維那。性不習諠詣、闕辭退、所司抑之、不為通表。因理僧務、不墜彝倫。

### 帝以冬旱內立齋祀召佛道二宗論議事第二十九<sup>753</sup>

顯慶三年冬十一月、上以冬雪未零、憂勞在慮、思弘法雨、雩祈雪降。爰構福場、故能靜處、中禁廣嚴法座。下勅召大慈恩寺沙門義褒、東明觀道士張惠元等入內。於別中殿、講道論好<sup>754</sup>。

<sup>746</sup> 「百」、麗本「伯」。

<sup>747</sup> 「益之後」、麗本ナシ。

<sup>748</sup> 「略記」、盧本「毘概」。

<sup>749</sup> 「闕」、麗本「閨」。

<sup>750</sup> 「輝」、麗本「暉」。

<sup>751</sup> 「頻造」、麗本「塵頻告」。

<sup>752</sup> 「日」、麗本「月」。

<sup>753</sup> 「二十九」、麗本「三」。

<sup>754</sup> 「好」、麗本「始」。

于斯時也、内外宮禁咸集法筵。釋李搜揚、選窮翹楚。即斯榮觀、終古無之。天子親問、褒所來邑、於座具答。時道士李榮先昇高座、立本際義。勅褒云、「承師能論義、請昇高座、共談名理。」便即登座。問云、「既義標本際、為道本於際、名為本際、為際本道、名為本際。」答云、「互得進。」難云、「道本於際、際為道本、亦可際本於道、道為際元。」答云、「何往不通。」並曰、「若使道將本際、互得相返<sup>755</sup>、亦可自然與道、互得相法。」答曰、「道但<sup>756</sup>法自然、自然不法道。」又並曰、「若使道法於自然、自然不法道、亦可道本於本際、本際不本道。」於是道士著難、恐墜厥宗、但存緘默、不能加報。

褒即覆詰<sup>757</sup>難云、「汝道本於本際、遂得道際互相本。亦可道法於自然、何為道自不得互相法。」榮得重並、既不領難、又不解詰<sup>758</sup>、便浪嘲云、「法師喚我為先生、汝便<sup>759</sup>我之<sup>760</sup>弟子。」褒應聲挫云、「今對聖言論、申明邪正、用簡帝心。芻蕘之嘲、塵黷天聽、義須棄置、誠不可也。雖然無言不酬、古有遺詰、聊以相答。我以事佛為師、我為佛之弟子、汝既稱為先生、汝應先道而生。我為弟子、佛是我師。汝若先道而生、汝則應為道祖。」道士當時忸怩無對、塵尾垂頓、聲氣俱下。褒因調曰、「塵尾已萎、鹿巾將折；語聲既惡<sup>761</sup>、義鋒亦摧。」李榮無對、逡巡下席。

尋即有勅、令褒依法登座。便辭讓曰、「義褒江表庸僧、山中朽樗、天光遠被、漏影林泉。輕枉絲綸、親臨御覽。然則佛法僧寶、無上福田、梯橙<sup>762</sup>樂山、津梁苦海、法身常住、迹示興亡。像教住持、取資帝力。伏惟陛下、道邁軒羲、德隆<sup>763</sup>堯舜、遊刃萬機、弘顯三寶。皇后懋續宮闈、皇太子聲高啟頌。今為膏雨不降、瑞雪未零、憂勞黎庶、設齋祈福。紫庭之

<sup>755</sup> 「返」、麗本「通返」。

<sup>756</sup> 「但」、麗本ナシ。

<sup>757</sup> 「詰」、麗本「結」。

<sup>758</sup> 「詰」、麗本「結」。

<sup>759</sup> 「便」、麗本「則便」。

<sup>760</sup> 「我之」、麗本「成我」。

<sup>761</sup> 「惡」、麗本「爽」。

<sup>762</sup> 「橙」、麗本「蹬」。

<sup>763</sup> 「隆」、七本「際」。

內、建立勝幢、黃屋之中、安施法座。欲使道風常扇、佛日連輝。爰詔緇黃、各陳名理、玉階闡玉京之教、金闕揚金口之言。以斯景福、莊嚴聖御。伏願皇帝、金輪永轉、玉鏡恒明、等敬北辰、慶隆南嶽。皇后心明七耀、體洞二儀、垂訓六宮、母儀萬國。皇太子凝神望苑、作睿春坊、布彩前星、披圖下武。

義褒海隅遺隱、忽廁高<sup>764</sup>華。以有怯之心、登無畏之座；用木訥之口、釋解頤之談云云。然則聖旨斯臨、課虛立義、今標<sup>765</sup>義目、厥號摩訶般若波羅蜜義。此乃大乘之象駕、方等之龍津、菩薩大師、如來智母。摩訶大也、般若慧也、波羅蜜者、到彼岸也。夫玄府不足盡其深華、故寄大以因之；水鏡未可喻其澄朗、假慧以明之；造盡不可得其崖極、借度以稱之云云。」

道士張惠元問曰、「音是胡音、字是唐字。翻胡為唐、此有何益。」答曰、「字是唐字、音是梵音。譯梵為唐、彼此俱益。」又難曰、「胡音何能益人。」答曰、「佛生<sup>766</sup>天竺、梵音為正、教流中夏、利見甚多。云何無益。」彼進無難、返唱不通、褒調<sup>767</sup>之曰、「道士年耄、今復發狂。答義若此、頓不思量。」張曰、「我那忽狂。」褒調曰、「子心不狂、那出狂語。退亦佳矣、佇<sup>768</sup>軸何為。」張遂復座。

姚道士次論義曰、「般若非愚智、何以翻為智。」答曰、「為欲破愚癡、歎美稱為智。」姚<sup>769</sup>責云、「何者是愚癡、而將智來破。」答曰、「愚人是道士、將智以破之。」姚曰、「我那忽是愚。」答曰、「般若非愚智、破愚嘆為智。道士若亡愚、我智藥亦遣。」如是覆却數番、姚<sup>770</sup>遂飲氣吞聲、周惇失守、無難坐默。褒因總調云、「張生則逃狂無所、姚道士<sup>771</sup>又避愚無地、狂愚既退、李可進關。」榮因問曰、「義標般若波羅蜜、斯乃

<sup>764</sup> 「高」、麗本「嵩」。

<sup>765</sup> 「標」、麗本「示」。

<sup>766</sup> 「生」、麗本「出」。

<sup>767</sup> 「調」、麗本「體」。

<sup>768</sup> 「佇」、麗本「抒」。

<sup>769</sup> 「姚」、麗本「張」。

<sup>770</sup> 「姚」、麗本「張」。

<sup>771</sup> 「士」、麗本ナシ。

非彼非此、何以言到彼岸。」答曰、「般若非彼此、歎美為度彼。」李曰、「非彼非此、歎度彼岸、亦應非彼非此、歎到此岸。」答曰、「雖彼此兩亡、歎彼令離此。」李曰、「歎彼不歎此、亦應非此不非彼。」答曰、「歎彼令離此、此離彼亦亡。」李榮更無難、乃嘲曰、「僧頭似彈丸、解義亦團欒。」褒接聲曰、「今<sup>772</sup>彈彈黃雀、已射兩鴟鴞<sup>773</sup>。彈彈黃雀足、射射鴟鴞<sup>774</sup>腰。」于時李既發機被彈、張元乃拔箭助之。褒又調曰、「李不自拔、張強<sup>775</sup>助言。姚生一愚、那不見救<sup>776</sup>。」姚即發言云云。褒合調曰、「兩人助一人、三愚成一智。昔聞今始見、斯言無有從。」于時天子欣然、內宮誼合、李榮俛首不已、便云、「作如此解義、何須遠從吳地來。」褒云、「三吳之<sup>777</sup>地、本出英賢。橫目苟身、舊無人物云云。」言訖下座。當斯時也、獨御黃老、無敢抗言。可謂振論鼓於王庭、不異提婆之日；灑法音於帝掖、何殊身子之秋。

事罷相從、還栖公館。褒謂諸道士曰、「駟不及舌、明言非易。天下清論、何有窮涯。等星曜之在天、類河山之鎮地、須便引用、未待鄙言。何有面對天顏、輕為謔論、脫付法推、罪當不敬。賴聖慈弘、恕其不逮不敬之罪、終難可逃。」道士等大慚。張元曰、「不須述也。」褒曰、「往不可咎、來猶可追。請廣義方、統詳名理。豈非釋李高軌、不墜風流、勝負兩亡、情理雙遣者也。」

筆者詳略褒之義道、可曰脫穎當時、准的萬代、碎黃巾於黃屋、不藉漢師、列帝網於帝前、無勞秦陣。是以雲梯嬰帶、徒聞姚主之談；吞併合從、成祖宋君之美。信矣。

### 上幸東都又召西京僧道士等於彼<sup>778</sup>論事第三十<sup>779</sup>

<sup>772</sup> 「今」、麗本「今一」。

<sup>773</sup> 「鴟」、麗本「鸛」。

<sup>774</sup> 「鴟」、麗本「鸛」。

<sup>775</sup> 「強」、麗本「狂」。

<sup>776</sup> 「救」、麗本「助」。

<sup>777</sup> 「之」、麗本「勝」。

<sup>778</sup> 「於彼」、麗本「往」。

<sup>779</sup> 「三十」、麗本「四」。

顯慶五年、上幸<sup>780</sup>駕東都、歸心佛道、宗尚義理。匪<sup>781</sup>因談敘、無由釋會。下勅、追大慈恩寺僧義褒、西明寺僧惠立等、各侍者二人、東赴洛邑、登即郵傳。依往至合璧宮奉見、敘論義旨、不爽經通。下勅、停東都淨土寺。褒即於彼講『大品』・『三論』、聲華崇盛、光價逾隆。

褒姓薛氏、常州晉陵人、蓋齊相孟嘗君之後、大吳名臣綜瑩之胤也。而天體高邈、履性清明。少染緇衣、長遊聽采。初在蘇州明法師所、服勤教義、具美清涼、『大品』・『華嚴』、開明巖穴。又往縉雲山婺州曠法師所、經于多載、備閱<sup>782</sup>幽求、會體素誠、爽拔玄致。於是周流禹穴三十餘年、傳經述論、學侶奔繼<sup>783</sup>。每惟大乘至教、元在渭陰、播蕩淳源、乃流楊越、嗟乎高軌、中原失蹤。後住東陽金華山法幢寺。弘法<sup>784</sup>不倦、終日坐忘、思契伊心、長懷卒歲。

會慈恩申請寓內搜揚、京邑髦彥承風仰德、以名聞奏、下勅徵延。既達京師、幽憂頓蕩。三藏玄奘不以形隔致猜、共敘大綱、護法為務。請所學經論、通講十遍、顧謂門徒、並往聽之。

時在慈恩創開宏理、有空雙遣、藥病齊亡。于時、執有毘曇、存空成實、分河飲水之客、別部說戒之徒、我見<sup>785</sup>鏗然、欻然驚視、皆謂空見外道、或曰「空花道人」。遂即負氣衝天、莫不承風摧輻、喪魂破膽、失路迷歸。褒乃誨以謗法之愆、示以信首之路。責以三開<sup>786</sup>、則周幃無計；導以五過、則負罪彌天。辯給之口、引用飛流、能使答對無前。翔集雲雨、自戾止日下、光問德音、宰輔傾誠<sup>787</sup>、道勝嗟賞。中興大法。斯人在斯、纔有一月、即蒙勅召中禁明道、躬閱清言、如前略述、不爽華望。

<sup>780</sup> 「上幸」、麗本「車」。

<sup>781</sup> 「匪」、麗本「非」。

<sup>782</sup> 「閱」、麗本「問」。

<sup>783</sup> 「繼」、麗本「從」。

<sup>784</sup> 「法」、麗本「道」。

<sup>785</sup> 「我見」、麗本「人我」。

<sup>786</sup> 「三開」、麗本「關」。

<sup>787</sup> 「誠」、麗本「城」。

晚巡洛下、重復徵延、聲榮藉甚、彌隆今古。不意法幢<sup>788</sup>忽崩、仁舟淪沒、因疾卒於洛邑、幽明結慘、道俗悲涼。下詔流問、并給賻贈、令葬鄉邑。自餘道勝、未獲其文、隨得編之、恐有遺逸、故耳。

### 上<sup>789</sup>在東都令<sup>790</sup>洛邑僧靜泰與道士李榮對論<sup>791</sup>第三十一<sup>792</sup>

顯慶五年八月十八日、勅召僧靜泰道士李榮在洛宮中。

帝問僧曰、「『老子化胡經』述化胡事、其事如何？可備詳其由緒。」靜泰奏言、「詳夫皇王盛事、其跡不同。或闢明堂以待賢、或臨衢室而問下、或賦清文於柏殿、或延雅論於蓬山。並驅名教之場、未踐真玄之肆。豈若我皇、德靜兩儀、道清八表。巖廊多暇、二教融襟。控方外之輪、高昇惠日。理域中之躅、暢引玄風。爰詔緇黃、對揚賓主、但靜泰編學謏聞、雕冰鑄木肅承、疏宇斧鉞交襟。」聖旨問、「『道士化胡經』云、老子化胡為佛、此事如何？」靜泰奏言、「老子二篇莊生內外、或以虛無為主、或以自然為宗。固與佛教有殊、然是一家恬素。降茲已<sup>793</sup>外、制自下愚。靈寶創起、張陵吳時始盛。上清肇端、葛氏齊代方行。亦有鮑靜、謬作三皇被誅、具明『晉史』。大唐貞觀之際、下詔普焚此『化胡經』者、泰據晉代雜錄及裴子野『高僧傳』皆云、「道士王浮與沙門帛祖對論每屈、浮遂取『漢書・西域傳』、擬為化胡經。『搜神記』、『幽明錄』等亦云王浮造偽之過。

道士李榮云、「靜泰無知、浪為援引。榮據『化胡經』云、老子化胡為佛、又『老子序』云、西適流沙、此即化胡之事顯矣。」靜泰奏言、「李榮重引化胡、靜泰前已指偽。縱令此經實錄、由須歸佛大師『化胡經』中。老子云、我師釋迦文、善入於泥洹。又榮引『老子經・序』、竟無西邁流沙之論、但云尹喜謂老子曰「將隱乎據」。榮對、詔不實、請付

<sup>788</sup> 「幢」、麗本「柱」。

<sup>789</sup> 「上」、麗本「今上」。

<sup>790</sup> 「令」、麗本「有」。

<sup>791</sup> 「與道士李榮對論」、麗本「勅對道士李榮敘道事」。

<sup>792</sup> 「三十一」、麗本「五」。

<sup>793</sup> 「已」、麗本「以」。

嚴科。又莊子云、老聃死秦佚<sup>794</sup>弔之。又『西京雜記』云、老子葬於槐里、此並典誥良證。又道士諸經唯有莊老、餘皆偽誑。偷竊佛教、安置縱橫、首尾蹈機、進退惟咎。假令榮經改無歸佛之語、陛下祕閣亦有道經。請對三觀學士以定是非、即源真謬。」

李榮云、「道人亦浪譯經。據白馬將經唯有『四十二章』、餘者並是道人偽作。近亦有玄奘、浪翻經論。」靜泰奏言、「李榮苟事往來、莫知史籍。據騰蘭初至此地、大譯諸經。其後支迦婁<sup>795</sup>之徒、康僧會之輩、曇摩提之屬、鳩摩羅之流、翻譯皆有年月。詳諸國史、亦有俗士聶承遠・謝靈運等、皆翻譯、備詳群錄。豈比汝之偽經？或云、朱鳥喙<sup>796</sup>銜、或道青鳥<sup>797</sup>吻噬、終散失於龍漢、卒改易於赤明、足<sup>798</sup>涉憑虛未聞崇有。又榮所云近有玄奘、亦浪翻經、竊謂不可據。玄奘久遊五印、妙盡梵言、考之風雅、理無倫奪。又玄奘所譯、契我聖朝、藻二帝之天文、煥兩皇之宸照。無知祭酒、輒事毀譽。案榮之罪、已合萬死。」

李榮奏云、「老釋二教並是聖言、非榮靜泰即能陳述。」靜泰奏言、「榮自不能、泰即能矣。」李榮重云、「榮據『道劫經』云、道上<sup>799</sup>於佛、佛還小道化胡之事、斯<sup>800</sup>亦不虛。」靜泰奏言、「道士語稱檀越、已竊僧言。經引『劫』文、還偷梵語。擲<sup>801</sup>角受化、尚戴黃巾。既漸佛風、不披緇服、食我桑椹、不見好音。人之無良、胡不遄死？『劫』是梵語、豈是道言？邊境有人。其名竊矣。」李榮云、「大道空同、何佛何道？」靜泰奏言、「李榮體中無物、固是空同。」李榮自云、「可無糞屎耶？」靜泰奏言、「聖人之側、帝者之前、用鄙俚為樞機、將委卷<sup>802</sup>為雅論。古人請尚方

<sup>794</sup> 「佚」、麗本「失」。

<sup>795</sup> 「婁」、麗本「提」。

<sup>796</sup> 「喙」、麗本「味」。

<sup>797</sup> 「鳥」、麗本「烏」。

<sup>798</sup> 「足」、麗本「並」。

<sup>799</sup> 「上」、麗本「生」。

<sup>800</sup> 「斯」、麗本「斷」。

<sup>801</sup> 「擲」、麗本「蹶」。

<sup>802</sup> 「卷」、麗本「巷」。



馬劍、今時可拂彼驢頭。刑於可刑、仁因<sup>803</sup>仁矣。」李榮云、「我莊子曰、道在糞尿<sup>804</sup>。」靜泰曰、「汝道在糞尿<sup>805</sup>、此據縱下而言。汝道本清虛、何不據極上而說？」又責榮云、「汝面對宸極而云、我莊子耶？」李榮曰、「汝經中亦云、如是我聞、阿難亦復稱我、我亦何妨？」靜泰曰、「經云、如是我聞、結集之語。又阿難無我、假言我我。汝我未除、不得我我。又阿難稱我、以對後人。爾今稱我、親承嚴辰、此而不類、何以逃辜？」李榮辭窮、遂嘲云、「靜泰語莫悵<sup>806</sup>、我未發汝利揚。」靜泰云、「李榮烏黠、何異蛙蟻、先師米賊、汝亦不良。」李榮遂云、「汝頭似瓠蘆等語云。」靜泰奏言、「此對旒冕、宜應雅論。幸許劇談、敢欲[9]間作。亦請嘲李榮顯勝負<sup>807</sup>。」聖旨便曰、「可令連脚嘲。」泰曰、「李榮道士、額前垂髮已比羊頭、口上生鬚還同鹿尾。纔堪按酒、未足論文。更事相嘲、一何孟浪。」泰又奏言、「向承聖旨、令連脚嘲、可<sup>808</sup>曰、「李榮腰長、即貌而述、屢申駝項、亟蹙蛇腰。舉手乍奮驢蹄、動脚時搖鶴膝。」李榮頻被嘲急、不覺云、「靜泰不長不短。」靜泰奏云、「靜泰加之一分則太長。」李榮云、「向共相嘲、便誦洛神之賦。」靜泰云、「此關宋王之語、未涉陳王之詞。義屈言窮、周悵<sup>809</sup>述妄、李榮是蜀郡詞人。」泰云、「泰是洛陽才子。」榮云、「賈生已死。才子何關？」靜泰奏云、「嚴楊不嗣、江漢虛<sup>810</sup>衰。榮為蜀郡詞人、一何自枉？」李榮每<sup>811</sup>詞、又轉語云、「箇是虛<sup>812</sup>衰、那得靈輝？」靜泰云、「夷歌嫵曲、自謂成章。鳥韻怪<sup>813</sup>言、用閑音賞。」李榮又轉語云、「何意喚我為李王？」因言「大唐天

<sup>803</sup> 「因」、麗本「固」。

<sup>804</sup> 「尿」、麗本「屎」。

<sup>805</sup> 「尿」、麗本「屎」。

<sup>806</sup> 「悵」、麗本「惶」。

<sup>807</sup> 「顯勝負」、麗本「頭」。

<sup>808</sup> 「可」、麗本「便」。

<sup>809</sup> 「述」、麗本「迷」。

<sup>810</sup> 「虛」、麗本「靈」。

<sup>811</sup> 「每」、麗本「無」。

<sup>812</sup> 「虛」、麗本「靈」。

<sup>813</sup> 「怪」、麗本「左」。

子、故是李王。」靜泰云、「汝此語為自屬爾<sup>814</sup>耶？為屬帝耶？如其自屬、爾是何人？如其屬帝、言王非帝？」李榮云、我經云「城中有四大王居一焉、言王何過？」靜泰云、「管子曰、明一者皇、察道者帝、通德者王。汝言域中有四大者、汝教自淺、汝復不閑。以帝為王、汝過之極。」李榮既急不覺直云、「靜泰言是。」靜泰奏言、「李榮既稱泰是、伏乞宸鑒。」李榮又轉語云、「大道老君、皇帝所尚、何物綠精<sup>815</sup>胡子剃髮小兒、起自西戎而亂東夏？」靜泰云、「如來出現、彼處為天中。我皇御寓、此間為地正。佛法有囑委以皇王、有感必通、何論彼此？若限以華裔、恐子自弊於杜郵、老是楚人、未知何地？」又榮向云、「綠精胡子、自是葱嶺已東、榮仲卿之鄙辭、亦無關於佛事。雖然無言不酬、請商略汝家之穢法。無知鬼卒、可笑顛狂。或灰刺<sup>816</sup>圍身、或牛糞塗體、或背擎水器、或背負楊枝、或解髮却拘交繩反繫、以廁溷而為神主、將井竈而作靈師。自臣奴僕之辭、又引頑愚之稱、醮祭多陳酒脯、求恩唯索金銀。禮天曹而請福、拜北斗而祈壽。淫祀之黨、充斥未亡。銜惑之徒、置罔網紀。加又扣頭搏頰、銜枚繯<sup>817</sup>緋。三點九閤之方、丹門玉柱之術。既無慚於父子、寧有愧於弟兄？並是汝天師之法、豈非汝之教耶？」李榮不覺云「是」。

靜泰云、「李榮既屢言泰是、如何不伏重乞宸鑒？」李榮又奏云、「靜泰所言、榮疑宿構、請共嘲燭、即是臨機之能。」靜泰[22]奏言、「泰雖無德、言若成誦。」又語李榮云、「汝欲嘲燭汝宿構耶？燭與李榮無情、是同燭明勝汝。」李榮奏言、「道之與佛、非榮泰等之所言」委時久<sup>818</sup>請休。靜泰奏言、「李榮知難而退、重乞天鑒。夜久更闌恐疲 聖旨」帝<sup>819</sup>休榮、遂走下塔<sup>820</sup>、云「去也。」

<sup>814</sup> 「爾」、麗本ナシ。

<sup>815</sup> 「晴」、麗本「精」。

<sup>816</sup> 「刺」、麗本「獄」。

<sup>817</sup> 「枚繯」、麗本「板繯」。

<sup>818</sup> 「久」、麗本「又」。

<sup>819</sup> 「帝」、麗本「帝令」。

<sup>820</sup> 「塔」、麗本「基」。

于時靜泰脚痺未行、少選停立、泰自奏言、靜泰先患風痺、帝令人扶之。榮於塔下云、「靜泰已死、兩人扶侍。」泰云、「帝者之前、理須戰慄、辭而復語、一何失敬也。」明日帝令給事王君德賁李榮曰、「汝比共長安僧等、論激連環不絕。何意共僧靜泰論義、四度無答？」李榮事急報云、「若不如此、恐陛下不樂、由是失厝。」令還梓州、形色摧惡<sup>821</sup>、聲譽頓折、道士之望、唯指於榮。既其對論失言、舉宗落彩<sup>822</sup>。

泰本洛陽人、素有遠識之量。雖略通玄理、而以才辯見知。上幸東都多營法祀、晝覽萬機、夜通論道。禮誦餘暇、偏重義宗。道士李榮、老宗魁首。恃其管見、親預微近<sup>823</sup>。遭剋<sup>824</sup>敵仍參勝席。故泰為眾樂推登、鋒奮擊挫、拉若摧枯、潛聲如舌、結面陳泰。是斯即心伏魂飛。況對天顏褒貶、足稱畫一、此則千載之龜鏡也。初以言辯見知、具問才術。東臺侍郎上官儀云、「又能賦詩、上令作之、應命便上。」帝重之、欲令觀國登庸、問欲還俗不、須何等官？泰答、「夙昔素心、常懷出俗。遠同法王之棄俗、近喻巢禽<sup>825</sup>之解網、俗榮非其所慕、伏願不虧發趾之心。」上大幸之、便勅所司、東都敬愛寺大德、未臨可以泰居之。其所須侍者任取多少。諸餘大德例止一人。泰別勅垂顧、使將五人入寺、爾後頻登榮觀、事多不錄。

### 大慈恩寺沙門靈辯與道士對論第三十二<sup>826</sup>

龍朔二年十二月八日、於蓬萊宮碧宇殿。靈辯奉詔開淨名經題目。

問曰、「難思之道、唯凡不測聖亦不知。」答、「凡聖俱不思。」難、「至理玄微、凡流容可不測、聖心懸鑒、妙智寧得不知？」答、「法性虛融道無不遍、物理平等何法可思？」難、「山芥無容入之義、於凡故是難思。大小有苞含之理、在聖寧非不測？」答、「難思之道、物無不遍、何

<sup>821</sup> 「惡」、麗本「慝」。

<sup>822</sup> 「彩」、麗本「采」。

<sup>823</sup> 「近」、麗本「延」。

<sup>824</sup> 「剋」、麗本「勅」。

<sup>825</sup> 「禽」、麗本「許」。

<sup>826</sup> 「三十二」、麗本「六」。

必山芥有納、凡聖分思不思。」難、「凡智聖智不分思不思、凡力聖力不分納不納。」答、「凡聖跡殊、容有納不納、凡聖本一、不分思不思。」難、「凡聖本無二、不分思不思。凡聖跡有殊、應有議不議。」答、「本跡雖殊不思議一也。」難、「此是聖者本跡殊、何預凡夫事？」答、「一切眾生即涅槃相、難思之道、詎簡聖凡。」難、「難思無有二、可使凡聖本無別。」難、「思既不殊、凡聖跡寧兩。」答、「不二處說二、二亦何所二。」難、「亦可不思<sup>827</sup>、說思何得、聖人亦不思。」答、「不二處說二<sup>828</sup>不二。若存二、可使不思處說思、不思得有思、不二處說二、無二不存二、無思處說思、不立思不思。」難、「此乃何止不立思、亦不存不思、何得經首稱不思？」答、「絕思慮故言不思、非謂有不思。故華嚴經云、如是不思議、不可得、深入不思議、思非思寂滅。」

三年四月十四日於蓬萊宮月陂北亭、與道士姚義玄等五人、西明寺僧子立等四人講論。其日晚勅放道人道士各還觀寺、別勅留僧靈辯及道士二人、至十五日乃[9]放還。初十四日、道士方惠長開老經題。靈辯問曰、「向陳道德唯上<sup>829</sup>老教、亦在儒宗。」答、「道經獨有、儒教所無。」難、「李<sup>830</sup>經曰、有至德要道。易云、一陰一陽謂之道。此則已顯於儒家、豈獨明於老氏？」答、「自然之道為本、餘者為末。」難、「自云<sup>831</sup>道不攝在陰陽、老氏可為本、陰陽亦苞於自然、周易豈為末？」答、「元氣已來大道為本、萬物皆從道生、道為萬法祖。」難曰、「道為物祖不思<sup>832</sup>前言、老易同歸、若為遺難。」惠長不能答、因嘲之曰、「昔列子纔遇季咸、悅然心醉、黃冠暫逢緇服、不覺魂迷。」上大笑、令更難。靈辯奏曰、「向者纔申短略、黃巾以成瓦解。今若更憑神算、赤舌將必永消<sup>833</sup>。」

<sup>827</sup> 「思」、麗本「思處說思」。

<sup>828</sup> 「二」、麗本「二無二」。

<sup>829</sup> 「上」、麗本「止」。

<sup>830</sup> 「李」、麗本「孝」。

<sup>831</sup> 「云」、麗本「然之」。

<sup>832</sup> 「思」、麗本「異」。

<sup>833</sup> 「消」、麗本「銷」。

上又笑、重問曰、「向云、道為物祖能生萬象、以何為體？」答、「大道無形。」難、「有形可有、道無形應無道。」答、「雖復無形何妨有道？」難、「無形得法亦可有形、是無法有形不是無、無形不有道。」答、「大道生萬物、萬法即是道、何得言無道？」難、「象若非是道、可使象外別有道、道能生於象、既指象為道。象外即無道、無道說誰生？」答、「天<sup>834</sup>道雖無形、無形之道、能生於萬法。」難、「子外見有母、知母能生子。象外不見道、誰知汝道生？又前言、道能生萬法、萬法即是道、亦可知母能生子、子應即是母。又前言、道為萬法祖、自違彼經教。老子云、無名天地始、有名萬物母。母祖語雖殊、根本是一義。道既是無名、寧得為物祖。」惠長總鎮首<sup>835</sup>語不得、因嘲之曰、「既非得意、何為杜默？已倒穀皮。」答、「吞米賊。」又難曰、「道無有形、指象為道、形亦可道無有祖、指象為物祖。」答、「道為物祖象非物祖。」難、「道別有形不得、象即道形。」答、「大道無形。」難、「大道非祖。」答、「道本無名、強為立名、為物之祖、那得非祖？」難、「道本無名、強為立名、亦可道本非祖強為物祖。」答、「然。」難、「道本非是祖、非祖強說祖、亦可大道無有形無形強說形。」又難、「離象無別道、象未生時有道生、亦可離眼無別目、未有目時有眼見。」答、「道是玄微、眼為龜法、二義不同、安得為類？」難、「象是質礙、道本虛無、有無性乖、若為同體。」惠長又無答。辯奏曰、「靈辯忝預玄門、實懷慈忍、雖逢死雀、不願重彈。」上大笑稱善。

五月十六日、於蓬萊宮、又與道士論難、其道士對答不相領、當無可記錄。至六月十二日、於蓬萊宮蓬萊殿論義、靈辯與道士李榮同奉見。上謂榮曰、「襄陽道人有精神、好交言、無令墮其圍中。」榮奏曰、「孔子尚畏後生、況榮不如前哲。」辯奏曰、「靈辯誠為後生、李榮故當是老(以榮住在蜀中故有此譏)。」上大笑曰、「榮已被逼。」榮開『昇玄經』題目<sup>836</sup>、「道玄不可以言象詮。」辯問曰、「玄理本寂、思慮情智、不可度量。妙道既絕言詞、若為得啟題目。」答、「玄雖不可說、亦可以言說。雖復有

<sup>834</sup> 「天」、麗本「大」。

<sup>835</sup> 「鎮首」、麗本「領前」。

<sup>836</sup> 「目」、麗本「曰」。

言說、此說無所說。」難、「玄若可言詮、即當云可詮。如實不可詮、當云不可詮。何得向云不可詮、今復言可詮？」榮領難不得、辯謂榮曰、「求魚兔者必藉於筌蹄、尋玄旨者要資於言象。在言既其蹇、棘於理信亦迷矇。」又更為述前難。答曰、「玄道實絕言。假言以詮玄。道<sup>837</sup>或有說、道<sup>838</sup>或無說。微妙至道中無說無不說。」辯曰、「此是『中論』龍樹菩薩偈。偈云、諸佛或說我、或說於無我、諸法實相中、無我無非我。安得影茲正偈、為彼邪言？竊菩薩之詞、作監齋之語。」榮曰、「佛道何殊？西域名為涅槃、正<sup>839</sup>是此處死滅。」辯曰、「螢光日光不可一、邪法正法安得齊？西域名涅槃、唐翻為滅者、此乃玄寂之妙境、恬澹之虛宗、絕患累於後身、證無為於極地。詎得以生死變謝、而相擬乎？子聞涅槃亦是滅、生死亦是滅。兩滅即是齊。鳥<sup>840</sup>鵲亦有聲、鸞鳳亦有聲、二聲應可一。二鳥俱出聲、清雅猶來別、二法雖同滅、冥寂本不均。」因呵曰、「足下若不情昏菽麥、目闇玄黃、何為以至人涅槃、同庶類生死？」上大笑曰、「向者道士標章、今乃翻是道人豎義。」令難問、玄理是可詮、可使以言詮、玄理體是不可詮、如何得詮<sup>841</sup>？答、「曉悟物情、假以言詮、玄亦可詮。」難、「玄體不可詮、假言以詮玄。玄遂可詮者、空刺不可拔、強以手來拔、空刺應可拔。」反問、「空是玄不？」反答、「非是玄。」反難、「是玄可並玄非玄、若為得並玄。」正難、「空既不並、玄空體非是玄。言既可詮玄、可並玄非玄。若為得並玄。」正難、「空既不並玄、空體非是玄。言既可詮玄、言應得是玄、言雖不是玄、言亦可詮玄。空雖不是玄、何妨空並玄？」答、「玄是微妙、妙<sup>842</sup>何以空來並。」難、「玄是微妙、如何以言來詮、又汝玄理不可詮、玄理亦可詮。空雖不可並、空亦應可並、空體不可並、非並不得並、玄體不可詮、非詮不得詮。」榮不能答、直抗聲曰、「明王有道、致使番僧入貢。」辯曰、「日磾生於塞外、為忠臣於漢

<sup>837</sup> 「道」、麗本「玄道」。

<sup>838</sup> 「道」、麗本「玄道」。

<sup>839</sup> 「正」、麗本「止」。

<sup>840</sup> 「鳥」、麗本「鳥」。

<sup>841</sup> 「詮」、麗本「言詮」。

<sup>842</sup> 「妙」、麗本「如」。

朝。道陵長自蜀中、作米賊於魏日。」榮默然不答、又謂之曰、「得嘲急解、何事踟躕？」榮曰、「既得玄旨、所以杜默。」辯曰、「魚目不類明珠、結舌何關杜口。」上大笑、令更難。

難曰、「玄理幽深至人可測、道士庸昧、若為得知。」答、「玄雖幽奧、至人深知、凡則淺知。」難、「道士學玄理、至人能深知、道士得淺知。道士學仙法、仙人能高飛、道士應下飛、仙飛有高下、道士高下俱不飛、玄理有淺深、道士淺深俱不測。」榮不能答。辯嘲之曰、「『老子』兩卷、本末研尋、莊生七篇、何曾披讀？頭戴死穀皮、欲似鈍啄木。」榮未及對、又嘲曰、「聞君來蜀道、蜀道信為難、何不乘鳧遊帝里？翻被枷項入長安（勅追榮入京日著枷）」榮曰、「死灰其慮。槁木其形、行忘坐忘、著枷何妨？」辯曰、「行忘坐忘、終身是忘。亦可行枷坐枷、終身著枷。」仍嘲之曰、「槁木猶應重、死灰方未然、既逢田甲尿、仍遭酷吏懸？」榮未答、「又嘲曰、柱枷異支榮<sup>843</sup>、擎枷非據<sup>844</sup>梧。閉口臨枷柄、真似濫吹竽。」榮恚曰、「天子知有榮、乃與榮枷著。如汝道人之流、主上何曾記錄？」辯曰、「天子今年知有榮、來年亦應知有榮。今年既與榮枷著、來年亦與榮枷著。聖恩方復未已、著枷豈有了時？」又謂曰、「詳刑抵罪<sup>845</sup>、天子未必皆知。道士著枷、聖人何曾記識？」又謂曰、「李榮著枷、聖人必不承意、儻若因枷被識、亦猶以醜見知。」榮慚怒厲聲曰、「道門英秀、蜀郡李榮、何物小僧敢欲相輕？」辯曰、「李李榮<sup>846</sup>榮、先乏雄情爽氣、何勞瞋目勵聲？」仍嘲曰、「區區蜀地老、竊號道門英、已摧頭上角、何用口中鳴？」榮不能酬、但曰、「道人何所知？怒力加飡飯。」辯曰、「眾僧本來齋潔、故當飡飯進蔬、道士唯重醮祭。應須酌體焚魚。」榮曰、「天宮清淨、何意論魚？」辯曰、「向已同齋、何為語飯（當論時在中後）？」榮曰、「蠹爾荆蠻、詎堪為敵。」辯曰、「周德未被、往日暫有荆蠻。皇澤遠覃、今時猶見蜀獠<sup>847</sup>。」榮曰、「心裏若無烏泥、袈裟何為得

<sup>843</sup> 「榮」、麗本「策」。

<sup>844</sup> 「據」、麗本「梧」。

<sup>845</sup> 「罪」、麗本「羅」。

<sup>846</sup> 「李榮」、麗本「榮李」。

<sup>847</sup> 「獠」、麗本「獠」。

黑？」辯曰、「心中既有柴棘、頭上遂裏木皮。」末席、辯嘲榮曰、「道士當諦聽、沙門贈子言、鴻鶴已高逝、燕雀徒自喧。」已前雜嘲甚多、不能盡記、每嘲、上皆垂恩欣笑。

### 茅齋中與國學博士范質談論第三十三<sup>848</sup>

昔毘城長者遊談里巷之中、今皇邑先生迂駕蓬門之內。以今況古、夫何異哉？范先生洞曉儒宗、兼精李釋、未嘗不覈玄微於道肆、談空理於法筵。小僧往遊江左、遐想風流、適至關中、彌飲<sup>849</sup>道德、尚未披敘、邂逅相逢。深適鄙懷、是所願也。既而光陰易失、嘉會難留、豈可使慧遠仲堪、獨論象繫、道林玄度、自解逍遙。請各據宗塗、標榜<sup>850</sup>題目、以申者<sup>851</sup>擊、共敘幽微云爾。

范曰、莊子之書、頗曾披攬、其間旨趣、待問當酬。問曰、「七篇繁廣、一問無由得窮。請更別舉章門、以申往復。」范曰、「齊物之理、今古以為難。法師可依此義以開宗轍。」問曰、「今古共<sup>852</sup>難、誠如所論、命開宗轍、未敢轍當。聯復竭愚、試陳短句。秋毫太山、儒墨咸稱大小。莊生以為不爾、豈非孟浪之談？」范曰、「俗滯情於是非、莊生遂忘於大小。」難曰、「但忘俗見之情、應不齊彼山毫之質。」范曰、「意在忘情。」難曰、「不須齊質。」范曰、「不論齊質、情詎得忘？」難曰、「秋毫既無陵霄之峯、太山未有入塵之細。逼令均等、其可得乎？」范曰、「毫有入塵之細、不羨陵霄之峯、山有陵霄之峯、不鄙入塵之細。各冥自性、故說為齊。」難曰、「物雖各冥、其極大小之體不無、莊周雖貴捐情、不覺翻迷物理、至如空虛本無質、象不可論有差殊。山毫既有形容、安得談其均等？」范曰、「談其齊等、本貴忘情、若欲均形、豈非為蛇畫足？」難曰、「前言形均、始可情喪、未是悟他。今持畫足過人翻為自因。」更並曰、「山大毫小、莊書遂可齊其大小。天尊地卑、周易應可混

<sup>848</sup> 「第三十三」、麗本「序」。

<sup>849</sup> 「飲」、麗本「欽」。

<sup>850</sup> 「榜」、麗本「勝」。

<sup>851</sup> 「者」、麗本「考」。

<sup>852</sup> 「共」、麗本「若」。



其尊卑。莊生安得齊其大小？」范曰、「二教所詮、由來是別。均齊之理、本自不同。難易本是別不得同、山毫本不齊、不齊應說異。異物既不異、不<sup>853</sup>異得說異、別物應可同、何得說不同？」

靈辯姓安氏、襄陽人也。其先西域胡<sup>854</sup>族、晉中朝時、徙居長安白鹿原、永嘉末<sup>855</sup>又南遷。因家于襄陽、宿植<sup>856</sup>德本、累修淨業。家遞土農、門傳貞素。靈辯載江漢之英靈、胤荊衡之秀氣、幼而聰慧、早能言理。年十五出家、聽習三論、大乘諸經、究極幽微。尤長白黑、天骨峻爽、風韻淒清。眉目口鼻之間、自然虛肅。常若秋岬含霽、霜松引颺。每至辯波騰迅、詞芒灑落、又如河箭飛流、月弦揚彩。永徽中<sup>857</sup>暫遊東都、聲馳天闕、尋奉勅住大慈恩寺、仍被追入內論義。前後與道士李榮等亟經往復、靈辯肅對宸嚴、縱敷雄辯、神氣高邁、精彩抑揚。望敵摧鋒、前無強陣。嘲戲間發滑稽、有餘<sup>858</sup>頻解、聖顏每延優獎。然素懷謙悵<sup>859</sup>、加復謹慎。溫枝絕訪、時莫能知、同侶所傳、百不存一。昔次卿宏論、唯聞重席之賞、充宗小辯、纔傳折角之謠、尚想連環、沈吟千祀。略題梗概為之記云、但恨言唯應物、理非獨詣、尋微之延、猶有餘功。

集古今佛道論衡卷第四<sup>860</sup> 疑<sup>861</sup>

<sup>853</sup> 「異不」、底本・盧本「不異」、麗本により改めた。

<sup>854</sup> 「胡」、麗本「古」。

<sup>855</sup> 「末」、底本・盧本「末」、麗本により改めた。

<sup>856</sup> 「植」、麗本「殖」。

<sup>857</sup> 「中」、麗本「年中」。

<sup>858</sup> 「有餘」、麗本「餘裕」。

<sup>859</sup> 「悵」、麗本「挹」。

<sup>860</sup> 「第四」、麗本「丁」。

<sup>861</sup> 「疑」、麗本「集古今佛道論衡卷丁 續附

唐西明寺釋氏

唐麟德元年於京師西明寺撰述

維唐龍朔元年春三月。西華觀道士朝散大夫郭行真敬造。真惟。佛道稱聖。咸作化於含元。寶乘靈寶。俱開津於有識。然則承俗訓。一風軌於醺章。佛垂法網。是舟師於形有。自非統括經詰。孰能輕舉。謹竭誠心。敬傳經像。用資景福通祇無邊。啟深信之根前。喻即真之正業。可不然歟。

維唐龍朔元年京師西華觀道士朝散大夫郭行真永所惟。釋尊弘化慈誘遍於人天。李老垂則述作開於赤縣。故使在身國不免生死之流。離惱離著超於空有

之城。所以迴心歸向。奉敬無遺。造佛書經。晨昏禮謁。當願善無不在常。志篤於真乘。道無不通。故莫滯於凡識。統諸來學。幸顧斯言金銅佛五軀。十一面觀音像二軀。并諸大乘經。

維唐龍朔元年。京師西華觀道士朝散大夫郭行真。自惟。昭告于十方先覺無極大聖。能仁化主慈氏法王。行真稟自凡庸隸斯觀伍。形雖草化心造彌勒柱下周之史臣道不振於明后。佛乃天人師。敬德化總於無邊。豈有事天之夫章醮之士。琴瑟不釋。酒脯未遺。禹步而抗於豐降。叩齒而排於列缺。誠所不取也。今改操迴信欽仰佛宗。敬造經像。恩程心用。伏願啟斯厚夜大敞明離。裂久却之障纒。解無始之流縛。生生弘反本之業。代代出解脫之津。預有同流景仰斯在金銅佛像五軀。十一面觀音像二軀。并諸大乘經。

維唐龍朔元年。京師西華觀道士朝散大夫郭行真所造。仰惟諸佛大聖神通。遍於十方。柱下仁風流扇光於五岳。梁魏已上未聞道有儀形。周齊已下弘誘開於氓俗。是則擬佛陶化。終詐飾於昏蒙。達見通微。畢曉鏡於明識。所以開義遷善。奉造靈儀并諸經誥。當使上弘下施。開遂古之濛泉。福始罪終。顯窮生之厚障。伏願恩隆慈施。不隔於邪林。方便善巧。無滯於幽谷。並使解明七覺慧發三明。拔見幢而偃疑山。裂愛網而陳寶駕。悠哉同侶可不勉哉。

維唐龍朔元年。京師西華觀道士朝散大夫郭行真所造。夫以陰陽結構。凡俗之所依持。空有驅除。惟聖於焉體鏡。排三有而超挺。聞乎五藏之經。在一得而守雌。見於二篇之作。是則尊天敬地。無忽於有為。解縛離惱寔開於惑性。由斯比德事等雲泥。敢用傾誠敬崇流施。寫經造像無替暄涼。用此福因津通有識。咸超見網早越迷林。敬造金銅佛像五軀。

十一面觀音檀像兩軀。諸大乘經相續寫。

維唐龍朔元年。京師西華觀道士朝散大夫郭行真所造。自惟生在微伍。忽廁朝班。弘之以厚禮。敬之以宗匠。斯之榮問。誠有其由。真雖隸處黃冠。心存玄化。討尋邪誥。佛為道父。後學迷生。妄存比競。擬人以倫。固難齊准。且佛為法王。道稱柱史。佛垂金色相。開四八之奇。道見白頭鼻。流雙柱之異。聲光不聞於恒俗。大羅乃焉有之言。神通未化於物情。玉京本亡是之說。是用歸心至覺經像。留情傳於避壤。遠流未悟。當使一乘一道。常作化於大同。九天九有。共陶津於極教。

維唐龍朔元年。京師西華觀道士朝散大夫郭行真。尋道德二篇。不存於毀佛。脩多三藏莫述於李宗。後學奔竟。亞迹於法王前。修奉法志。隆於羽化。是用丹誠舉述。元討於仙經。栖心正則。豈存於服氣。三錄三元。緣情而妄立。丹書玉檢。逐物而興言。秦漢由此而致譏。欒徐寄茲而取喪。是用憑心委志。敬寫流通。庶有見聞咸存此意。

維唐龍朔元年。京師西華觀道士朝散大夫敦行真所造。自惟佛經詞義。迥拔於人天。道書本末。影像於西域。何以知然。至如元陽一經。響法華諸典。西升眾卷。類方俗詠歌。文義不可大觀。情事全非所錄。況復朱門玉柱之液靈竅。穢土俗之情高。燕老君之雅識。還依正繕寫。不濫染於元陽。如本奉持。豈有

淪於教義。伏願聖慈無礙垂降迷蹤。永作道於後昆。畢如流於夢海。

金銅佛像伍軀 十一面觀音菩薩二軀諸大乘經

維唐龍朔元年。京師西華觀道士朝散大夫郭行真所造。真以道本無形。形之於周魏。佛惟有像。像布於人天。故柱下之容。未足光於視聽。能仁之相。可謂超出幽明。故使石像浮江經生火聚。群儒奉之。如在書傳記而不渝。是使致敬彌勤奉持難絕。用斯上善通被下元。割見網於此生。獲正果於來際。貽諸末葉通斯致焉。

維唐龍朔元年。西華觀道士朝散大夫郭行真造。真以。道惟元氣。非形像之照臨。佛稱大覺統景仰之尋則。佛稱道父。僧曰上賓。聖教明文無容隱匿。所以敬寫經像傳奉未聞。開萬古之槃根。樹百王之逸軌。欲使一乘令駕。總邪正之登臨。九天奉識。該幽明而翊化。

維唐龍朔元年。京師西華觀道士朝散大夫郭行真所造。惟夫。一國朝宗一人稱聖。一土陶化一佛稱覺。故使唐虞殷夏五運推遷。過現未來三際循環。代代異材。豈惟一老。劫劫開濟。是稱多佛。無識敘稱。已形葛洪之誚。有情通議。早見周顒之說。是以李聃葬於槐里。秦失哭而不迷。馬遷演於流沙。尹喜變而垂迹。未若釋氏大聖。混封周於環海。教義弘明。誠濟會於真俗。遂投誠欽仰奉尊歸戒。造像書經。式表虔敬。當使幽明叶讚心用之道。日隆現未。智開冥津之尊。將曉永垂弘範貽則英賢。

維唐龍朔元年。西華觀道士朝散大夫郭行真敬造。蓋以。老氏之教不出流沙。釋君之宗化行環海。即日而敘。廣陋可知。窮神體聖。居然非惑。二篇之志言。未絕於俗塵。三藏之經理。自詣於真極。所以歸依正覺承受至乘。造佛書經。流通士俗。願反本之道。控精爽於天衢。迴向之門畢權衡於地軸。是使天師受道。恒禮佛於鶴鳴。隱居立敬。常拜釋於茅嶺。自餘未悟事等効尤詳覈昇玄無宜冰執。

龍朔元年。西華觀道士朝散大夫郭行真所造。真夙知希向。早預法流。形雖黃老心染緇釋。經像福本。每事經營。用資景業。通被存沒。必願罪終福始。惑盡智明。逮及黎元咸資敬仰。

維唐龍朔元年。西華觀道士朝散大夫郭行真所造。夫為道日損。義有存於克念。學無常師。理必資於遷善。至於道德五千言。不涉於章醮靈寶三洞事。有微於方術。黃書赤符。莫通於物議。玄霜絳雪。或陷於烏有。未若佛宗至極。坦八正之通津。妙法窮真。靜八倒之迷藪。所以百王奉化。寺塔遍於大千。萬代承風。僧徒充於天下。行真不惟鄙俚。奉佩遺筌。造像書經流通兆庶。當願早傾三漏。早見三身。早騰三界。早御三有。通被高識。通斯意焉。

維唐龍朔元年。京師西華觀道士朝散大夫郭行真所造。真聞。道本虛通。義非摧結。靈智洞照。須知大歸。自古同門英秀。咸尚佛宗。叔代暗識諸生。雷奔輕侮。是不遵往哲。不讀金科。遂生此見。未曰通敏。至如張族三師。相從拜佛。陶寇兩傑。攝敬釋宗。詳于梁魏之書。備例蜀川之紀。豈非擇木而處。得至身而達性。知幾其神。悟佛性之非朽。故辯泉具。造像書經。敬勒願言陳于

## &lt;キーワード&gt;

道宣、集古今仏道論衡、江南系統大蔵経、思溪蔵、テキスト

---

卷末。庶同悟士塵斯道哉。

維唐龍朔元年。京師西華觀道士朝散大夫郭行真所造。夫以。一實之道。理越於天仙。大覺之言。義該於空有。至如。陳思辨道。乃涉方士之科。何晏敘甜。未在聖門之列。然則道有大小之別。聖亦昇沈之儀。老君柱史之員。立教非為其主。釋乃法王之位。訓範統於幽明。故二篇述作。顯於山之論。兩諦大造。程於周氏之宗。所以沿古至今罕能詳覈。余承正則。義取真乘。造佛書經無替心曲。用茲上善通彼識情。願解大道發無上意。

集古今佛道論衡卷丁

集古今佛道論衡四卷重校序

按此一部四卷之書。其第四卷。國本與宋本則同。唯八紙耳。丹本大多至三十四紙。非唯多小不同。文義亦不相涉。又前第三卷。國本與宋本則同。丹本始終迥異者何耶。今進退檢校。宋本錯亂失第三卷。妄引第四卷為第三卷。於第四卷。則傍引道士郭行真捨道歸佛之文。十餘段凡八紙。補為一卷。國本依宋故同錯耳。今詳此一部撰集之體。始自漢明帝。終至唐高宗。歷紀帝代佛道論衡。而國本宋本之第三卷。凡七條事。即唐高宗時事也。今於第四卷八紙後。所蓮寫十條之事。是高祖太宗時事也。然則先後倒錯。勢必不然。理須正之。今依丹本。以高祖太宗時十事。為第三卷。高宗時七事為第四卷。而正焉。其郭行真捨道歸佛之文。并附于尾云。守其序。」

## Summary

# Dao Xuan's Compilation *Ji gujin fodao lunheng* in the Jiangnan Lineage of the Buddhist Tripitaka: Introduction and Transcription

Wang Xue

The *Ji gujin fodao lunheng*, compiled by Dao Xuan, is listed in the traditional catalogues as comprising both three and four volumes. Research into the old Japanese manuscript (so-called early three-volume edition) reveals the process of compilation by Dao Xuan; however, the features of the later edition can only be understood from the four-volume printed editions in the Tripitaka. From the earliest printed edition, the Kai Bao Zang, to the relatively complete Tipitaka Koreana edition, the form of the *Fodao lunheng* has continued to change. Additionally, as the versions of the text in the Kai Bao Zang and the Khitan Zang, carved around the same time, and the versions in various later editions of the Jiangnan Tripitaka (江南大藏經) do not correspond, it is considered that the text of the printed Tripitaka version underwent a complex process of transmission.

This paper is divided into two parts: an introduction and a transcription. Firstly, I introduce the Fuzhou Zang (preserved at Dongchan and Kaiyuan Temples), which is the earliest edition within the Southern lineage and was established from the Northern Song to the early Southern Song, and the Fuzhou Ban edition of the Southern Song (preserved at Yuanjue-si and Zifu-si). I then provide basic information regarding both editions of the *Fodao lunheng*. Next, I focus on the Sixi Zang edition (湖州版思溪藏本) version, which was dealt with in the reprint, and after comparing it with the Central Plains/Northern lineage and old Japanese copies of the *sūtra*, I highlight the features of the Jiangnan Lineage of the Buddhist Tripitaka. In the transcription, I use the 湖州版思溪藏本(Sixi

Zang edition) as the base text, and collate it with the Kaiyuan Temple and the Tipitaka Koreana editions.

**Keywords:** Dao Xuan, The *Ji gujin foday lunheng*, the Jiangnan Lineage of the Buddhist Tripitaka, Sixi Zang, text

*Postgraduate Student,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*